

八

南進問題をめぐる英米との関係

1 極東危機説

802

昭和15年7月1日

在シドニー秋山総領事より
有田外務大臣宛(電報)

有田外相ラジオ声明に関する豪州の反響報告

シドニー 7月1日後発
本省 7月2日前着

第二六六號

有田聲明ニ對スル當地反響左ノ通り

一、當地各紙ハ「日本ノ所謂安定策」「ヘラルド」「日本ハ英米トノ摩擦ヲ豫期ス」「テレグラフ」「日本眞目標ヲ發表ス東亞南洋ノ支配香港ノ家族濠洲引揚」「サンデーサン」等ノ表題「トツプ」ヲ飾リ要點ハ東亞南洋ニ對シ霸權樹立外部ヨリ干涉排除日本ヲ中心トスル連帶地域ノ樹立ニ在リト指摘ス又日英ノ交渉ハ微妙ナル段階ニ達セリ米國ハ日本ノ「モンロー」主義ヲ認メサルヘシトノ英米政府ノ態度ヲ報ス

二、政府要人ハ口ヲ緘シテ何等意見ヲ發表セス聯邦勞働黨首

Curtin ノミハ三十日最近二三週間ノ濠洲ノ危機ハ極メテ増大シ英帝國ノ各地共敵ノ的トナレリト「ラヂオ」放送セリ

三、一日「テレグラフ」ハ有田聲明ニ鑑ミ速ニ日本ヘ公使ヲ派遣スヘシト「メ」首相宛公開狀ノ形ニテ論シタリ

四、一日「ヘラルド」ハ「日本ノ漸進政策」ト題シ歐洲ノ戰局蘇聯ノ南進ニ乘シ日本ハ東亞南洋ニ對シ盟主タルヲ斷定シタルモ其ノ適用地域及「安定勢力」ナルモノノ性質等ハ漠然トシ居ルモ日本ノ急進派ニ對スル大讓歩ナルカ然ラスンハ歐洲戰局ヨリ最大ノ收穫ヲ取ラントノ希望ニ發セルハ疑ヒナク單ナル東亞ノ平和及安定勢力トシテノ發言權要求ニ止ラス東亞南洋ニ於ケル日本ノ優越ヲ唱フルモノニテ其ノ勢力ノ及フ限度ハ明カニ無限ナリ一九一五年ニ日本ハ支那ニ二十一箇條ヲ突付ケタルカ有田聲明ハ其ノ一九四〇年版ナリ日本ノ穩健派ハ日本カ時局ヲ利用シ米國其ノ他西洋諸國ヲ敵トセハ戰後ニ如何ナル立場

トナルカ考へ見ルカ可ナルヘク太平洋ノ列強ニ取リ「平和と進歩」ノ希望ハ同一ナルモノハ一國ノ支配欲ニ依リテハ達成サレスト論シタリ

編注 本書第17文書。

803

昭和15年7月1日
在英国重光大使より
有田外務大臣宛(電報)

有田外相ラジオ声明に関する英国の反響報告

ロンドン 7月1日後発
本省 7月2日後着

第一一三六號

往電第一一二九號ニ關シ

一日各紙ハ何レモ右ヲ以テ帝國カ東亞「モンロー」主義ヲ聲明セルモノニテ日本ハ東亞ヲ支配(dominate)セント欲ストカ米國ハ右ニ反對スヘシトカ報シ居ル處右ハ香港婦女子ノ避難(引續キ刺激的ニ報セラル)及南支日本軍カ英側カ軍ノ機密ヲ支那側ニ内報セリトテ憤激シ居レリトノ報道ト共ニ重要紙面ニ掲載セラレタリ尙「タイムス」ハ社説ニ於

テ大體理解アル趣旨ヲ論シ注意ヲ惹キタリ有田外相ハ極東及南太平洋ノ大部分ニ對スル「モンロー」主義ヲ宣言シ人種地理文化經濟的見地ヨリ同方面ノ新秩序ヲ要求セルカ支那カ日本ニ對シ依然抗戰ヲ繼續シ居ル事實カ右ヲ妥當ナラシムルヤ否ヤハ別問題ナリ日本ハ列強ニ援蔣政策放棄ヲ警告シ英國ノ多事ナルニ乗シ香港及緬甸經由武器輸送阻止ヲ要求セルカ右ハ佛國ノ降伏ニ依リ不可避トナレル所ニシテ敢テ驚クニ足ラス日本ハ東亞ヲ勢力範圍ト看做シ居ル處同外相カ南太平洋(爪哇、「タイ」迄モ含ムヘシ)迄モ東亞ノ範疇ニ屬セシメタル點ハ注意スヘク其ノ眞意ハ不明ナルモ日本カ右地域ニ君臨セントスルニ於テハ列國ハ容易ニ之ヲ承認シ難シ素々右カ太平洋ニ於ケル領土的乃至政治的變更ニ關シ日本ニ協議ヲ期待スト云フ趣旨ナラハ右要求ハ至極當然ナリ

804

昭和15年7月1日
在米國堀内大使より
有田外務大臣宛(電報)

有田外相ラジオ声明に関する米国の反響報告

第一〇一〇號

ワシントン 7月1日後発
本 省 7月2日夜着

貴大臣ノ二十九日ノ「ラヂオ」演説ハ當國各新聞ニ大々的ニ報道セラレタルカ右ニ關シ二十九日當地發^(編注)UPカ米官邊ノ意嚮トシテ報スル處ニ依レハ米ノ極東政策ハ一九三八年十二月三十一日附日本政府宛覺書中明示セラレ居ル通りニシテ日本ノ東亞「モンロー」主義ニ贊同スルヲ得ス一國カ自國ノ主權下ニアラサル諸地域ニ新秩序ヲ樹立セントシ自國獨リ之カ指導勢力タラントスルカ如キ希望乃至要求ハ之ヲ是認シ得ストノ立前ヲ依然堅持スヘシトノ趣ナリ尙各紙論調左ノ通り

一、三十日華府「イヴニングスター」

二十九日ノ有田外相ノ演説ハ亞細亞「モンロー」主義ノ提唱ニ外ナラス東洋諸國カ歴史的、人種的、經濟的ニ共通ノ利害關係ヲ有スルハ米洲諸國ト立場ヲ同シクシ居リ米政府モ亦從來右事實ヲ容認シ來リタルモノニシテ日本カ東亞ノ安定勢力タルヲ利シ自國ノ利益ノ爲現狀ヲ破壊セントスルニアラサル限り米トシテ右主張ニ何等危惧ス

ル必要ナキモ右主張カ東亞ニ單一勢力圈ヲ設定シ全東亞竝ニ南洋ニ日本ノ霸權ヲ確立セントスルニ在ルニ於テハ米其ノ他東洋ニ利害關係ヲ有スル諸國ハ重大ナル關心ヲ以テ事態ヲ注^(文字不明)□セサルヲ得ス

二、三十日「ボルチモアサン」

日本カ亞細亞ニ於テ重大ナル利害關係ヲ有スルハ否定スヘカラサルモ米ノ「モンロー」主義ハ些少ノ例外ハアリトスルモ既[?]ニ米洲諸國ニ對スル米ノ政治的竝ニ軍事的支配ノ爲ノ手段タラサルニ反シ日本ノ亞細亞「モンロー」主義ハ之ヲ以テ帝國主義的侵略ノ手段タラシメントスルニアリ事態ハ既ニ概念的表現ノ問題ニアラスシテ實踐如何ニ懸リ居レリ

三、一日紐育「タイムス」ハ「スターリング」退役海軍少將

ノ論文ヲ掲ケタルカ同少將カ從來兎角對日強硬論ヲ唱ヘ居タルニ鑑ミ一般ノ注目ヲ惹キ居レリ要旨左ノ通り
日本ハ現在歐洲戰爭ニ對シ中立ヲ維持シ居ルモ獨伊樞軸側加擔ノ可能性大ナルモノアリ右實現センカ英米ニ取リ重大ナル打撃タルハ云フヲ俟タス日本カ既ニ政治的軍事的ニ東亞ノ支配勢力タル以上現實ヲ直視シ日本ノ主張ス

ル經濟的文化的軍事的立場ヲ容認シ日本ノ獨伊加擔ヲ防
止スル爲英米ハ共ニ全力ヲ舉ケサルヘカラス之カ第一着
手トシテ英佛ハ香港ヲ含ム其ノ支那本土諸領ヲ放棄スヘ
ク又米ハ對日新通商條約ヲ速ニ成立セシメ兩國國交ノ常
態化ヲ計ルヘシ右ハ英本土既ニ危殆ニ瀕シ米艦隊大西洋
集結ノ必要緊迫シ居ル今日殊更必要ナリ

編注 十二月三十日付の誤り。『日本外交文書 日中戦争』

第三冊第1343文書参照。

805

昭和15年7月2日

在英國重光大使より
有田外務大臣宛(電報)

有田外相ラジオ声明中の「南洋」の用語につ

き誤解除消方意見具申

ロンドン 7月2日後発

本省 7月3日後着

第一一四〇號

往電第一一三六號ニ關シ

當方面ニ於テハ貴大臣放送中ノ South Sea regions ノ用語

ヲ以テ濠洲等ヲ含ム南太平洋全域ヲ指スモノト解スル者多
シ此ノ邊ニ多少ノ誤解ヲ生シ居ル模様ニテ當方ニ於テハ然
ルヘク説明ヲ與ヘ居ルモ場合ニ依リテハ貴方ニ於テモ適宜
御説明アリテハ如何カト存ス本問題ニ關聯シテ英國政府ハ
米國政府ト種々相談シツツアル模様ニシテ英國側ニ於テハ
頻リニ米國ヲシテ利害關係ヲ感セシメントスル希望モアル
様子ナルニ付右申添フ
米ヘ轉電セリ

806

昭和15年7月2日

在米國堀内大使より
有田外務大臣宛(電報)

有田外相ラジオ声明への米國國務省の対応振

りについて

ワシントン 7月2日後発

本省 7月3日後着

第一一〇一六號

一日「ハル」長官ハ新聞會見ニ於テ所謂亞細亞「モンロ
ー」主義ニ關シ簡單ニ米ハ目下太平洋問題竝ニ平和問題ヲ
含ム一般的基本政策ヲ考究中ナリト述ヘタルノミナルカ日

本ノ亞細亞「モンロー」主義カ比島ニ適用セラルト思考スルヤトノ質問ニ對シテハ現在ノ所之ヲ論評スルヲ差控ヘタシトテ多クヲ語ルヲ避ケ米ハ極東ノ現狀變更ニハ深甚ノ注意ヲ拂ヒ居レリト語レル趣ナリ

尙「ニューヨーク、タイムス」華府特電ノ報スル所ニ依レハ當地外交官邊ハ右ヲ以テ米ハ極東問題ニ關シテハ現在條約尊重ノ從來ノ立場ヲ變更セス即チ門戶開放、支那ニ於ケル領土保全及太平洋ニ於ケル現狀維持ノ政策ヲ持續スヘキモ此ノ際日本ト事ヲ構フルヲ欲セス萬一日本カ直接行動ニ出テ米ニ影響ヲ及ホスカ如キコトアラハ其ノ際改メテ事態檢討ヲ行フヘク豫メ公式ノ聲明ヲ以テ自國ノ態度ヲ拘束スルヲ欲セサルモノト解シ居ル趣ナリ

807

昭和15年7月3日

在英国重光大使より
有田外務大臣宛(電報)

英國の対日態度硬化につき報告

ロンドン 7月3日後発

本省 7月4日前着

一、英國ノ態度ハ最近一兩日硬化ノ模様ニテ香港婦女子引揚馬來半島防備強化ノ決定(何レモ英國陸軍側ノ主張ニ依ル)ト照合シ居レリ右ハ東京通信トシテ我陸軍ハ外務大臣ノ聲明ニ飽キ足ラス又海軍モ米國トノ開戦ヲ恐レ居ラス又ハ香港ノ封鎖乃至ハ日本軍部ハ英國側カ支那側ニ情報ヲ供給セリトテ英國ヲ攻撃セリトカ(此報道ハ當地ニテ態々打消發表セラル)ノ報道頻リニ行ハレ日本新黨樹立ハ對英、米態度ノ強化ヲ意味ストノ報道ト共ニ英國側ニ於テ日本カ何時獨逸側ニ加擔スルヤモ計ラレストノ懸念ニ出ツルモノトセラレ居レリ

二、英國側ノ對日對抗策トシテハ米國トノ聯繫ニ重點ヲ置クハ當然ニシテ一般ニ米國ト聯絡シテ從來ノ對日態度ニ變更ヲ加ヘントスル議論増加シ或ハ通商問題原料品ノ供給等ノ問題ニ付テ米國ト共ニ何等カノ措置ヲ採ランコトヲ主張スル者アリ尙今日日本ヲ戰爭ニ引入レ日米、日英間ニ葛藤ヲ惹起セシメントスル策動益々執拗ニ行ハレ居ルハ左傾新聞記事ニ現ハレ居レリ

米へ轉電セリ

昭和15年7月4日

在英國重光大使より
有田外務大臣宛(電報)

英國外務次官に有田外相ラジオ声明の趣旨を

説明し対中和平実現のために援蔣政策放棄を

説示について

ロンドン 7月4日後発

本省 7月5日後着

第一一六四號(館長符號扱)

四日「バ」次官ト會談シ内容左ノ通り應酬ヲ爲シタリ

一、外務大臣聲明ニ付

本使ハ往電第一一一一號以來ノ出來事トシテハ有田大臣ノ演說ヲ主ナルモノトスル處右聲明ノ主要點ハ日本カ飽迄戰爭ニ介入セス又東亞(南洋)ノ地域ニ戰火ヲ入レシメサル政策ヲ持スルコトヲ表明スルニ在リ右ハ佛國ノ降伏ニ依リ印度支那ノ歸屬問題ノ議論生シ茲ニ日本ノ態度表明ヲ餘儀ナクセラレタル次第ナリ尙支那問題ハ速ニ解決シタキ意嚮ニハ變化ナク之カ爲ニハ重慶ニ對スル供給阻止ノ問題ハ當然起ル譯ニシテ即チ右ハ支那ニ平和ヲ回復セントスル趣旨ニシテ右根本政策ニ合スル次第ナリ然ル

ニモ拘ハラス英國ノ新聞通信ハ日本ノ一部人士ノ言論ヲ採上ケ今ニモ東亞ノ戰火ノ擴大スルヲ欲スルカ如キ取扱ヲ爲シ英國政府ハ香港ノ引揚馬來半島ノ防備強化ヲ發表シ居ル處右ハ日本ノ關知スル所ニアラサルモ我方ノ政策ニ付誤解ナキヲ希望ス

二、有田聲明ニ南洋トアルハ如何ナル意義ナリヤ(四日ノ「ガーヂアン」論說ニモ南洋ヲ南太平洋ト解シ日本ハ「フィヂー」群島迄勢力範圍ニ入レタリト言ヒ居レリ)

米國ニ在リテハ「モンロー」主義ノ意義ハ北米ノミナラス南米ヲモ含マシメ居ル處日本カ所謂「モンロー」主義ヲ聲明セリトテ南太平洋迄モ同様其ノ勢力範圍ニ入レタリト英國人ハ考フルカ如キモ日本ノ政策ハ右ノ如キ野心ヲ包含シ居ル次第ニアラス右區域ニ日本カ大國トシテ依テ以テ生存シ居ル地域ニ限ラレ極メテ「モデスト」ナル範圍ナリ南洋ト言フハ日本ヨリ觀タル日本語ノ呼稱ニシテ大體蘭印附近ヲ意味シ濠洲方面ノ南太平洋ハ觀念ニ入リ居ラス

三、何分軍人ノ勢力強ク何時如何ナルコトカ起ルカモ知レストノ心配ヲ有スル向アリ云々

809

昭和15年8月5日

在英国重光大使より
松岡外務大臣宛(電報)

欧州戦争や日本の対外政策をめぐる関係諸国
との外交関係につき意見具申

滿洲又ハ支那ノ實ハ半植民地トナリタル地域ニ付テハ出
先軍部ノ衝突ハ免レ得サリシモ苟モ日本カ他國殊ニ大國
ト戦争迄モ^痛睹セントスル場合ハ左様ニ簡單ニ行クモノニ
アラス況ンヤ政府トシテハ前述ノ如ク明ニ不介入ノ政策
ヲ表明シ居ルニ於テヲヤ一體英國ハ日本ノ眞意ニ付責任
ナキ方面ノ言論ニ重キヲ置キ過キスヤ而シテ過日外相ノ
示サレタル參謀本部將校ノ會談ナルモノヲ認メ其ノ措辭
ノ當否ハ別トシテ其ノ内容ヲ觀ルニ英國ニ對シ戰意ヲ表
シタルニアラス重慶政府ニ對スル援助ヲ廢止サレタキコ
トヲ強ク要求セルモノナリ即チ日本陸軍ハ他國ノ妨害ヲ
防キナルヘク速ニ支那問題ヲ片付ケ何人モ欲スル支那ニ
秩序ヲ回復セシメント欲シ居ル次第ニテ此ノ點他國ト事
ヲ構ヘントスル趣旨ハ一モ見エサルニアラサルヤ

*
第一三五六號(館長符號扱)

ロンドン 8月5日發
本省 8月6日着

今回大東亞政策ヲ確立實行セラル、ニ對シ滿腔ノ敬意ヲ表
ス右ニ關シ此ノ際左ノ點(從來ノ電報ト重複スル嫌アルモ)
氣附ノ儘申進ス

「今日ノ形勢ニ於テハ我態度ハ獨伊ニ對シテハ獨自ノ竝行
政策遂行カ可然ク其ノ程度運用ニ付テハ蘇聯ノ竝行政
策ニ遣口ハ非常ニ參考トナルト思ハル

伊國ノ同盟政策ハ伊國ノ地理上已ムヲ得サルニ出テタル
モノナルモ伊國ハ將來獨逸ニ對シテハ大体追從的地位ヲ
保ツニ過キス日本ハ極メテ有利ナル地理的地位ヲ有シ又
世界ニ於ケル地位ヲ建設スルコトカ目的ナルニ付根本ニ
於テ政策ノ獨自性ヲ確保スルコトカ要點ナリト考フ次テ
大東亞ニ於ケル我地位ヲ建設スルニハ直接ニハ小國(佛
蘭或ハ葡)ノ犠牲ニ於テ行ヒ間接ニハ英米側ノ犠牲トナ
ルヘキモ)他國トノ衝突ヲ避ケ一時ニ相手ヲ多クセス各
個處分ノ方策ヲ以テ最少限度ノ損害ヲ以テ最大ノ利益ヲ
收ムルコトヲ考慮スル要アラン

二、蘇聯ハ獨トノ竝行政策ニ依リ「バルト」東歐ヲ^(一字不明)略シ巴

爾幹ニ於テ之(獨伊)ト妥協シ次ニ「イラン」土耳古「イラク」方面(或ハ芬蘭ノ地位ヲモ固ムト思ハル)ニ向フモノト察セラルルモ常ニ英(佛)等大國トノ直接衝突ヲ避ケツツ強ク中立ヲ標榜シ戰爭ニ關係ナキ小國ニ對シテ其ノ權益ヲ擴張シツ、アリ結局ハ英國ノ植民地ノ根本的動搖ニ向ツテ進ミツ、アルモ常ニ英國ニ對シテ妥協ノ余地ヲ存シツ、最少限度ノ損害ニ於テ最大ノ效果ヲ舉ケント虚々實々ノ苦心ヲ爲シ居ルカ如シ

三、英國カ東歐黑海方面ヨリノ外交的退却ヲ余儀ナクセラレ又東亞方面ヨリモ同様ノ狀態ニシテ曩ニ其ノ勢力中心ヲ上海ヨリ香港ニ移シ更ニ又香港ヨリ新嘉坡ニ移スニ至リタルハ其ノ間ノ消息ヲ物語ルモノニシテ其ノ對支政策ノ根本モ變更シツ、アリ米國ト雖「モンロー」主義擴張堅持ハ東亞方面ヨリ退却ノ姿勢ヲ意味シ石油屑鐵ノ禁輸モ畢竟進ンテ事ヲ構ヘントスル積極政策ニアラスシテ防禦(若クハ妨害)手段タル消極政策ナリ英米ノ政策ハ共同「ジヨイント」政策ニアラスシテ平行「バラレル」政策ナルモ右平行政策モ今日迄ノ所必シモ目的及運用ニ付完

全ニ一致シ居ラス右ハ我方ノ態度ニ懸ル所ナルカ我方ニ於テ條理ト且正々堂々タル態度ヲ以テ大東亞政策ヲ遂行スルニハ英米ヨリノ障害ハ自然ニ除カレ行クモノト見テ然ルヘシ英米ニ對スル我方ノ態度ハ尙主義及立場ヲ問題トスル必要アルト同時ニ實益ノ點ヲ充分ニ考慮スルヲ要スヘシ

四、茲ニ注意ヲ要スルハ太平洋ニ於テ日本ト英米トヲ衝突ニ導キ以テ恰モ蘆溝橋事件ヨリ支那問題ニ對シテ日本ヲ引込ミタルト同シク太平洋ニ於テ收拾シ得サル事態ヲ誘出シ歐洲戰爭ヲ世界戰爭トシ其ノ間ニ重大ナル漁夫ノ利ヲ占メントスル有力ナル運動活潑ニ行ハレ居ル點ナリ右ハ英米ニ於テハ左翼ヲ中心トスル在來ノ反日運動ノ強化ニシテ他ハ成可ク日本ヲシテ英米ヲ挑發セシメテ衝突ニ導カントスル運動ナリ何レモ終局ノ目的ニハ差アルモ直接ノ目的ハ一致シ居レリ

五、要スルニ大東亞ニ於ケル政治的經濟的ニ實力アル地位ヲ建設スルカ我政策ノ眼目ナルモ之ニ付テハ支那問題ハ矢張り大キナ腹ニテ結末ヲ着クルノ態度ヲ示スハ我方ノ弱味ニアラスシテ寧ロ我強味ヲ表示スル^(一字不明)ト思ハル我今日

ノ大ナル國際的地位ニ鑑ミ他國ニ對シ哀願若シクハ追從
 の態度ハ勿論他國ヨリ惡用セラル、ハ不可ニシテ國家ノ
 要求スル所其ノ信スル所ニ向ツテ主張ヲ爲スト共ニ複雑
 ナル國際關係ニ於テ不慮ノ實損害ヲ防キ何レノ國ニ對シ
 テモ之ヲ利用シ得ル範圍内ニ於テハ凡ユル手段ヲ講スル
 コト外交上要諦ト信セラル對蘇關係ヲ緩和シ對英米關係
 ニ就テモ周到ト考慮ト用意トヲ以テ進ムコト素ヨリ必要
 ト思考セラル(二三日)
 米、獨、伊へ轉電セリ

810 昭和15年10月5日

南洋を含む「大東亞」におけるわが方の新秩
 序建設の意圖を説明した対米覚書

今回ノ三國同盟ハ特定ノ國ヲ目標トシタノデハナク日獨伊
 三國ガ結合スレバ他國ヨリ攻撃ヲ受クル機會ヲ減少シ世界
 混亂ノ擴大ヲ防ギ得ルト云フ點ニ於テ世界平和ニ貢獻スル
 モノデアル日本ハ此ノ條約ニ依リ南洋ヲ含ム大東亞ニ於テ
 新秩序ヲ作ラントスル意圖ヲ重ネテ闡明シタ

大東亞ニ於ケル新秩序ヲ建設スルト云フハ日本ガ大東亞即
 チ南洋ヲ含ム東亞各地方ノ人々ト共存共榮ノ關係ヲ樹立シ
 此ノ地域ニ於テ他國ト平等ノ立場ニ於テ自由ニ移民貿易企
 業ヲ爲シ以テ我國ノ人口問題ヲ解決シ得ルガ如キ秩序ヲ造
 ルト云フノデアツテ此ノ區域ヲ征服搾取スルト云フノデナ
 ク又此區域カラ他國ノ通商企業ヲ閉メ出サントスル意味デ
 ハナイ。日本ハ久シク海外ニ於ケル移民通商企業ニ依ツテ
 人口問題ヲ解決セントシテ來タガ歐米諸國ハソノ廣大ナル
 領域ニ於テ日本移民ヲ排斥シ貿易及企業ヲ阻害シ我人口問
 題ノ合理的平和的努力ヲ無効ニ歸セシメタ

大東亞共榮圈ニ於テハ人間ノ斯ノ如キ自由活動ニ對スル不
 自然ナル制限ヲ撤廢センコトヲ企圖シ且右企圖ハ成ルベク
 平和的方法ニ依リ且成ルベク現状ニ不幸ナル變更ヲ加ヘズ
 シテ行ハンコトヲ企圖シテキル

我對支政策ハ右企圖ノ重大ナル一部デアルガ一部支那人ノ
 無理解ト英米ガ滿洲國不承認ノ態度ヲ採リ蔣ニ滿洲奪回ノ
 希望ヲ與ヘタガ爲メ不幸ナル武力衝突ヲ惹起シタ。此衝突
 ハ事實上戰爭デアルガ爲、我軍ノ行動中列國ノ在支權益ニ
 影響ヲ及ボスノハ止ムヲ得ナイノデアツテ、殊ニ右權益ガ

我對支作戰妨害ノ基地ヲ爲スガ如キ場合ニ於テ特ニ然リデアル。從ツテ右權益ニ對スル影響ヲ停止セントセバ日支間ノ和平ヲ促進スルニ如クハナイ。然ルニ列國ハ事情變更ノ爲適用不可能トナリタル條約聲明若ハ法律論ニ依ツテ我行動ヲ制肘スルノミナラズ吾國ニ對スル重要物資ノ輸出ヲ抑壓スル等ノ方法ヲ以テ日本ヲ苦シムルト同時ニ他方我敵蔣介石政權ヲ積極的ニ援助スルノハ東洋ヲ一日モ長ク禍亂ノ地ニ置キ我國力ヲ消耗セシメントスル隱レタル動機ニ基クモノデアツテ平和ヲ愛好スル爲デモナク權益擁護ノタメデハナイト思ハザルヲ得ナイ。日本ガ獨伊ト防禦的同盟ヲ結ンダノハ斯様ナ列國ノ壓迫ニ對抗スルタメニ過ギナイノデアツテ進ンデ他國ヲ攻撃スル意思ハ毛頭ナイノデアル。米國ガ斯様ノ事情及我東亞新秩序建設ノ眞意ヲ了解スル限り我國ト米國トノ關係ハ此ノ條約締結後ト雖何等ノ變化ナク我國ハ凡ユル懸案ヲ解決シテ米國トノ友好ヲ増進セントスル決意ヲ有スルモノデアル

編注 本覽書は、十月五日に松岡外務大臣から在本邦グルー

米國大使へ手交された。

811

昭和15年11月4日

松岡外務大臣より
在バタビヤ齋藤總領事宛(電報)

香港やシンガポールなどにおける英米による

対日經濟圧迫の実例通報

本省 11月4日後7時50分發

會商第四七號

往電第四四號ニ關シ

一、在香港岡崎總領事電報ニ依レハ最近同地政廳ハ邦人商社ニ對シ屑鐵ノ輸出許可ヲ與ヘス(内一社ハ在本邦英國領事ノ國內消費タル證明ヲ要スル旨告ケラレタル由ナルカ現ニ「ウオルフラム」ニ付テハ此方法ヲ實行中)又濠洲麥粉ノ對佛印輸出モ許可セサルニ付同總領事ヨリ民政長官ニ交渉セル處目下本國政府ニ請訓中ナルカ同訓アル迄ハ許可セサル旨説明セル趣ナリ

二、大阪商船新嘉坡支店ヨリ本社宛電報要領左ノ如シ

(イ)米國向ケ護謨ニ付最近買手側ハ米船巴奈馬經由ヲ條件トシ且米國銀行ハ邦船積ニ對シ殆ト信用狀ヲ發行セサル爲蘭印積米國行貨物ノ邦船積ナキ狀態ナリ

(ロ)阿弗利加、南米向ケノ歐米荷主ハ依然邦船拒否ヲ續行

印度向モ何レ影響アルカト思考スルモ現在變化ナシ

(ハ)爲替管理強化ノ結果十月二十一日以後ハ日、滿向貨物
代金決済信用狀許可セラレサルコトナリ輸出杜絶ノ
惧アリ

三、大阪商船紐育支店ヨリ本社宛電報ニ依レハ英國ハ希臘船
ノ英、米、蘭印ヘノ避難ヲ命シタリトノ噂アル由(本件
ニ付テハ我方ニ重大ナル利害關係アルヲ以テ目下東京ニ
於テ希臘側ト交渉中)

四、十月初旬米、蘭印船會社代表カ「マニラ」ニ於テ海運會
議ヲ開催セリトノ新聞報アル處其協議内容ニ關シ御聞込
アレハ參考ノ爲回電アリ度



昭和15年12月9日 松岡外務大臣
在本邦クレイギー英國大使 會談

日英關係改善や日本による英独和平斡旋の可
能性などに関する意見交換

付記 昭和十五年十二月十二日、東亞局第一課起案
右会談で英國大使が提出した口上書へのわが
方回答案

松岡外務大臣「クレイギー」英國大使會談要領

(昭和十五年十二月九日十時於本省)

一、英國大使ヨリ極メテ私的ノ參考トシテ別紙ノ趣旨ヲ披露
スル所アリ大臣ハ日獨伊三國條約締結セラレタル以上ハ
帝國トシテハ中立ノ義務ニ違反セサル範圍内ニ於テ獨逸
ニ對シ友誼的政策ヲ踏襲スルハ寧ロ自然ノ成行ナル所以
ヲ説示セラレ三國條約ノ精神ハ戰禍擴大防止ヲ眼目トシ
帝國ハ元來世界ノ平和靜謐ヲ希求スルモノニテ其意味ニ
於テハ英獨戰爭モ其ノ速ナル終熄ヲ欲スル次第ナリ英國
民ハ立派ナル國民ニシテ之カ衰亡ハ人類ノ爲ニ取ル所ニ
アラス自分トシテハ和平恢復ノ可能性アラハ之ヲ斡旋ス
ルニ吝ナラサルモノナリト述ヘラレタル處大使ハ遺憾乍
ラ可能性絶無ナリト答ヘ英國朝野ノ戰爭遂行決意ノ強硬
ナルヲ強調セリ

二、獨假裝巡洋艦ノ諾威船拿捕事件ニ付テ大使ヨリ概要ノ説
明アリタルカ大臣ハ之ヲ聴取スルニ止メラレタリ

三、日英間懸案書類(十一月二十三日大使ヨリ次官ニ手交セ
ルモノ)ニ關シテハ大臣ハ親ラ右ヲ一覽スヘク米國側ヨ
リ提出アリタル同種書類モ親シク検討中ナリト附言セラ

レ大使ハ深ク之ヲ多トセリ

四、尙大臣ヨリ長良丸ノ件ニ言及セラレ本件ニ關スル英國側
ノ好意的措置ヲ多トスル旨ヲ述ヘラレ大使ハ右ヲ政府ニ
電報シ差支ナキヤト質問シ結局 Appreciates deeply the
(accommodating 2) (Nagamaru 2)
accommodating spirit in which the Nagamaru case was
treated ト打電スルコトニ打合ハセタリ

(別紙)

ORAL

In my first general discussion with Your Excellency
on July 27th I gave an opening to pursue the question of a
general improvement in Anglo-Japanese relations which
might well have been expected to result from the Burma
Road Agreement. Your Excellency was unable at the time
to give me any indication of Japanese policy, which was still
under consideration; but, speaking less officially, you made
it clear that you felt unable to share my own strong view
that our differences were at that time capable of solution
by a process of friendly discussion. Your Excellency also

indicated that Japan's leanings were towards the Axis.

Subsequent events appeared to shew that Your
Excellency had correctly indicated this country's
intentions. Japan committed herself to the creation of a
"new order in Greater East Asia" and, although her
statesmen did not say so in so many words, it became
increasingly clear that this somewhat vague definition was
designed to cover a programme of expansion which could
only be achieved at the expense of British and other
interests over a wide area.

Two months after our interview of July 27th the
conclusion was announced of a three-Power pact in which
Germany and Italy accorded recognition to Japan's aims in
Asia while Japan openly recognised the aims of our
enemies in Europe and committed herself in certain
circumstances to joining them as a belligerent.

Lord Halifax has given careful consideration to Your
Excellency's explanations of Japan's policy as conveyed to
me from time to time and in particular has noted with

satisfaction my reports that you had been doing your best to discourage the most regrettable anti-British campaign promoted by various Japanese Government agencies which culminated in the wholesale arrests of British residents in Japan - men whose personal integrity and long-standing friendship for the Japanese nation were beyond question. But a whole series of events which have occurred since the signature of the three-Power agreement (such as the purchase of German ships in Japanese ports, the biased presentation of European war news in the Japanese press, the increasing Japanese efforts to provide Germany with goods and materials vital to the prosecution of the war et cetera) indicate clearly that the Japanese Government regard that instrument as a signal for the intensification of acts detrimental to vital British interests. In these circumstances Your Excellency will readily understand that it is not by words but by acts that His Majesty's Government must measure Japan's intentions.

(付 記)

(昭和十五年十二月九日在京英國大使「クレイギー」ノ「オーラル」ニ對スル回答「オーラル」案)

(昭和二五、二二、二二)

(欄外記入)

本大臣カ日英關係ノ改善ニ關シ強キ希望ヲ有シ居ルノミナラス其爲出來得ル限り盡力致シ居ルコトハ閣下ニ於テ了承セラル所ナリト信スル處昭和十二年七月以來帝國ハ不幸支那ト干戈ヲ交フルニ至リテ以來東亞ニ於ケル新秩序建設ノ爲多大ノ犠牲ヲ拂ヒ死活ノ戰ヲナシ居ルコトモ閣下ノ御承知ノ通りナリ而シテ右東亞新秩序建設ノ帝國政府ノ大方針ハ絕對ニ動カシ得サル國策ニシテ其爲第三國トノ間ニ如何ナル摩擦ヲ生スルモ敢テ辭セサルノ決意ヲ有シ居ル次第ナリ固ヨリ帝國政府トシテハ東亞新秩序建設ノ爲他ノ第三國ト無用ノ摩擦ヲ生スルコトヲ極力回避シ來レル次第ニシテ戰爭遂行上爲シ得ル限りノ不便ヲ忍ビ第三國ノ權益ヲ尊重シ又其ノ希望ヲ容ルルニ吝ナラサリシ次第ナリ然ルニ其間第三國側ニ於テハ必シモ帝國政府ノ眞意ヲ諒解セス帝國ノ目的達成ニ對シ妨害の行動乃至ハ策動ヲナシ來レルモノアリ今次事變發生以來英國政府ノ執ラレタル政策乃至行動

カ總テ帝國ニ對スル反對の行動ナリトハ申ササルモ少クトモ其ノ根本の態度ニ於テ將又支那現地ニ於ケル各種ノ言動ニ於テ帝國政府ノ不滿トスルモノ少ナカラサリシコトハ事實ナリ他方前記帝國政府ノ方針ヲ理解シ且支持スル國家少ナカラサリシ事實モ御承知ノ通りニシテ斯ノ如ク帝國政府ノ方針ニ同調スル國家ト同調セサル國家トアル場合其ノ同調のナル國家ト親善の空氣ノ醸成セラルコトハ國民感情トシテモ蓋シ當然ノコトナリト存セラル三國同盟ハ斯ノ如キ國民感情ヲ基トシ且帝國政府不動ノ國策ニ基キ執ラレタル必然の措置ニシテ本措置ヲ以テ直ニ締約國以外ノ國家ニ向ケラレタルモノトハ思考シ居ラス英國ヲ含ム如何ナル國家トノ關係モ改善セントスル帝國政府ノ意圖ニハ何等變更ナキ次第ナリ然シ乍ラ日英關係ノ改善ニハ英國側ニ於テ前記ノ如キ我方ノ死活問題ニ對シ之ヲ妨害スルカ如キ措置ヲ差控ヘラルルコト絕對必要ナル所最近ニ於ケル英國側ノ態度ハ之ニ逆行シ曩ニ一旦閉鎖セラレタル緬甸「ルーツ」ヲ再開シ又近クハ多額ノ借款ヲ許與スル等蔣政權援助ノ態度ヲ露骨ニセラレタルハ帝國政府及國民ノ甚タ不快トスル所ニシテ英國ハ公然日本ノ敵タル蔣政權ヲ援助シ日本ヲ妨害

スルモノナリトノ深キ印象ヲ國民ニ與ヘ斯クテハ日英關係ハ惡化ノ一路ヲ辿ルノ他ナシト憂慮セラル尙此ノ點ニ關シ貴大使ノ注意ヲ喚起致シ度キハ英國ノ如ク歐洲ニ其ノ本國ヲ有シ世界各地ニ植民地ヲ有セラルル國家ト帝國ノ如ク東亞ニノミ其ノ領域ヲ有スル國家トハ事苟モ東亞ニ關スル問題タル限り其ノ關心ノ度合カ後者(即チ日本)ニ於テ遙ニ大ナルヘキ事實ナリ帝國カ大東亞ニ於テ所謂共榮圈ヲ樹立セントスル所以モ亦此ノ地理の近接ニ基キ最モ重大ナル關心ヲ有スル地域ニ於テ帝國ノ自立ニ必要ナル最少限ノ要求ヲ充サントスルモノニシテ帝國トシテハ之カ貫徹ニ不動ノ決意ヲ有スルモノナル一方右ハ專ラ平和の手段ニ依リ帝國ノ必要トスル資源ノ確保ヲ内容トスルモノナルヲ以テ關係國ニ於テ我方ノ死活の必要ヲ認識シ好意的取計ヒヲ爲スニ於テハ平穩裡ニ解決シ得ヘキ問題ニシテ貴大使ノ危惧スル如ク決シテ英國ノ權益ヲ害セントスルモノニ非ス之ヲ要スルニ英國政府ニ於テ東亞ニ於テ帝國ノ建設セントスル秩序ニ協調セラレ且三國同盟後ト雖モ依然トシテ抱懷シ居ル第三國ニ對スル眞意ヲ了解セラレ右ニ對應セル措置ヲ執ラルルニ於テハ日英關係ノ改善モ亦期シテ待ツヘキモ

ノアルコトヲ御理解相成度

(欄外記入)

亞一二テ起案、結局撤回

813

昭和15年12月13日

在英国重光大使より
松岡外務大臣宛(電報)

対英関係の観点から日中和平および対南方施

策につき意見具申

ロンドン 12月13日後発

本 省 12月15日前着

第一九一五號(館長符號扱、極秘)

英米側ト我方トノ對立ハ益々激化スルハ免レサル所ニシテ
素ヨリ表面ハ極メテ穩ニ且成ル可ク妥協的態度ニ出テ我方
國力ノ培養ヲ急クノ要アルモ根底ニ於テハ深ク(脱?)所測ル
ヘカラスト信セラルル處今日相手(主トシテ英國)ニ對スル
急所ヲ衝ク意味ニテ考察スルニ

一、英帝國ノ中樞タル亞細亞の權益擁護ノ爲英國ハ東洋人ノ
指導者ニシテ且味方ナリトノ立場ヲ以テ任シ其ノ施策ノ

運用ニ非常ノ注意ヲ拂ヒ緩急宜キヲ得ルコトニ努メ居レ
ルカ其ノ實質ハ divide and rule ニ在リ右ハ單ニ印度ニ
對スル遣方ナルノミナラス到ル所一般ニ行ハレ居レルカ
國際間ニ於テハ東亞ニ於ケル兩大民族タル日支ノ衝突誘
致ハ「オーステン、チエンバレン」以來ノ對支援助政策
ノ歸結ニシテ支那人ハ今日正ニ英米人ノ手先トナリ居ル
ト云ヒ得ル次第ナリ又印度ニ於テモ回教圈ニ於テモ何レ
モ日本人ハ東洋人壓迫又ハ征服ヲ目的ト爲シ居ルカ如ク
映スコトニ努メ居レリ

英國ニ對スル最大ノ痛手ハ日本カ支那人ノ希望ヲ容レ其
ノ満足スル方式ニ於テ日支カ妥協シ其ノ衝突面ヲナクシ
支那人ヲ英米ヨリ引離シ日本人ト一致シテ外敵ニ當ル
(少クトモ東亞ニ於ケル歐米人ノ政治的根據ヲ破壊ス)ノ
方向ニ仕向クルコトニ依リ之ト共ニ日本カ東洋人(或ハ
有色人種)ノ指導者ニシテ且先驅タル實質ヲ示スニ於テ
ハ右ハ英米ノ最惧ルル所トナルヘシ

今日世界ノ形勢ヨリ觀テ東亞ニ於ケル我カ地位ヲ固ムル
ハ對支問題ト言フヨリモ對列強問題タル面益々強クナ
リタル今日日支ノ妥協ハ寧ロ其ノ對照ノ如何ニ拘ラス貴

重ノモノトナリ來レル位ニ感セラル

政策的及宣傳的見地ヨリ以上ノ點充分考究然ルヘシト思考ス

二、印度支那ニ於ケル日本ノ根據ヲ固メ「タイ」國トノ關係ヲ進ムルコトハ地政ヨリ見テ英米ニ對スル最大ナル痛手ナルハ明瞭ナリ此ノ點ハ無言ノ裡ニ着々進ムヘキモノト思ハル

三、歐洲戰爭ノ今日ノ趨向ヨリ察シ日本カ直ニ蘭印ニ政治的軍事的ニ進出ヲ試ミルハ危險ナリ支那トノ時機ヲ失セサル妥協力對英米ノミナラス對蘇關係ニ見テモ最重要ナルヤニ思考セラル



814 昭和15年12月19日

日米協會例会における松岡外相演說要旨

日米協會例会に於ける松岡外務大臣演說要旨

昭和十五年十二月十九日午後

於帝國ホテル

松岡外相は先づ日米兩國間の諒解増進に努力しつつある

人々と相會するの機會を與へられた事を欣快とする旨を述べ次に野村大將と云ふ強力な提督を新駐米大使に決定する爲同提督を口説き落すに至る迄の經緯を諧謔交りに述べて滿場を笑はせた更に野村大使が海將だけに雅量と自信と常識の持主であり又従つて他人をして信頼させる性格を有する有數の外交官であるとし力説し轉じて前駐米大使堀内謙介氏か日米友好關係維持の爲懸命の努力を傾けたこと及堀内大使夫人か夫君の爲に大いに内助の功あつた事を述べて同大使夫妻の勞を深謝し、愈々現下世界の視聽を集めてゐる日米問題に論及して要旨左の如く述べ列席者の注目を惹いた。

「世界の情勢は今や激變して區々たる小問題を論議する時代は過去の夢と化し何事も大規模に考へ大規模に行動せねはならぬ時代となつた。即ち我等は互に相手の立場と根本的政策方針等を直視して正解せねはならない。野村大將の駐米大使任命は我日本政府が對米關係に就て何を考へてゐるかを雄辯に指示するものである。卒直に言へば日米兩國關係は現在甚たしく緊張してゐる。其原因は種々様々ではあるが根本的原因是日本の目的抱負に對する米國側の誤解

に在る事を余は正直に指摘したい。日本は米國及其他の方面で考へられてゐるとは正反對に決して支那に於て貪慾を滿たす爲とか又は侵略しやうと云ふ様な帝國主義的戰爭をやつてゐるのではない。日支事變は我か日本に取つては正に道義の爲の十字軍である。諸君の中には余の此言に對して苦笑し或は疑惑を抱かれる者があるかも知れぬかそれは御隨意である。日本の聖戰は臆て時か證明し歴史か立證する事を余は確信する。それも恐らく今後五十年以内に明瞭になるであらう。日本が戰つてゐるのは破壊の爲てなく建設の爲てあつて我等は眞に文明的且安定的勢力たる大使命を確く信し大東亞に正義と衡平と互惠を基礎とする恆久的平和と無限の繁榮とを享樂し得へき新時代を齎らす爲に懸命に努力してゐるのである。斯かる崇高なる使命達成の爲には日本は敢て他國の協力を拒否するものではない。か然し斷つて置くか大東亞の新秩序の下に置ては征服とか迫害とか搾取とか云ふ事は斷して許されない。如上の我日本の既定方針は確固不動であつて譬へ如何なる壓迫かあり又何國か之を誣しやうとも微動たもするものではない。之れ我帝國政府の基本的態度である。日本開闢以來其理想となし

來つたものは宇内の諸國民諸民族をして各其の所を得しむるにある。余の考ふところ世界は從來よりも合理的に――印度礦物か自然の法則に従つて美しく結晶するか如くに――再組織され又改革さるへきてである。國際社會か眞に正義衡平の精神に依つて再建された曉に於てのみ純眞久遠の平和は全世界に光被するであらう。我等か想見する新秩序なるものは即ち斯かる國際社會であつて先つ此大東亞に之を建設しやうと云ふのか我等の考である。過般締結された日獨伊三國同盟の目標亦同一である。

世界の現狀を視るに政治的には廣範に過ぎ經濟的には狹隘に過ぎる。經濟活動は勿論全世界に亘るへきてあつて其所に何等の制限があつてはならない。然し政治的活動は各國其死活的利害關係を有する地域に局限して敢て他國の領域に及ぼすへきてはないと信する。斯かる地域的諒解に依つて地域的平和が確實に樹立されれば其集成したものが即ち世界平和となる。斯かる境地の實現こそ余か國際聯盟規約成立以來腦中に描き來つた理想である。地域的協力に依つて西半球の平和秩序を確立せんとした過般のハヴァナ會議も亦其一例である。

日獨伊三國條約に就ては米國民の一部は故意か惡意か我日本を目的を誤解し曲解して日本の對米敵意なと云々してゐるか右は全く笑止の沙汰である。我日本は米國に對しても又就れ^{（英）}の國に對しても別に之を敵とする考は持合はせぬ。萬邦と共に友誼を交へんとするのか日本の眞意である。

唯た日本の求むる所は其建設的事業遂行に當つて他から邪魔されぬ事であつて支那事變や歐洲戰爭に更に新なる參加國も現はれず速に動亂の終熄するのを念願する。

然るに米國若し歐洲戰に参加し我日本と太平洋上戰火の裡に相見えたしとしたならば如何？其慘禍は想像するに諸君の背に冷水三斗の思かあるであらう。

米國の參戰と日米戰爭とは實に人類文化文明の潰滅を意味する。余は米國の友人諸君に對して全人類の滅亡を齎らすか如き輕舉に就ては千思萬考せよと訴へざるを得ない。尙ほ余は此機會に於て次の事實を明白にして凡ゆる米國人の疑惑を徹底的に一掃したいと思ふ。即ち日本は其同盟諸國に對して飽迄忠實であり將來も變らざる事實である。日本の對外政策は今後三國條約を樞軸とすへきこと恰も往年の我外交か日英同盟を中心として動いたと同様である。斯く

言へはとて余は敢て威嚇めいた事を仄めかす譯ではなく單に自明の理を述へて無用の誤解を豫防せんとするに過ぎない」

以上の如く松岡外相は帝國外交か日獨伊三國同盟を樞軸として行はるる事を重ねて強調し動もすれば米國邊りて傳へられる疑惑的誤解を一掃するに努めたか外相は更に轉じて支那問題を繞る日米關係に觸れ左の如く帝國の抱懷する信念を吐露し米國側を啓蒙する態度に出た曰く

「支那の革命^運なと云ふ問題に對する米國民の態度は大體に於て感傷的なものに過ぎない。然し日本に取つては實に國家存亡に關する死活的重大問題である。我等は支那の將來に就ては自信もあり又速に平和克服の日の來らん事に望を失つてはゐない。而して平和實現の曉に於ては現在日米兩國間に蟠まる諸多の難問題は自ら雲散霧消すへきを信する。此意味に於て南京の新中央政府こそ輝かしき時代の黎明を告げる曉鐘とも謂ふべきである。米國民にして大所高所より事態の眞相を把握するならば反對どころか進んで日本の高遠なる目的實現の爲に協力を惜まぬたらう。故に余は此の如く提唱する。即ち互に大膽率直に好むと好まざる

を問はす一切の現實を直視して相互の立場を同情と協調的精神を以て理解する事だ。此の爲には偽善的説教とか毛を吹いて傷を求むるか如き愚劣を斷然中止して虚心坦懷の心境を持たねはならない。邪惡なる者とか無思慮なる者は往往にして斯かる言動に出て易いのだ。曖昧模糊な頭腦は兎角外交問題を正解せぬ。或る人々は國際關係と言へは必ず衝突とか戦争とかに關した事柄の様に考へて融和協力の爲の外交を考へることか出來ぬ。

日米兩國には各悲觀論者もあり太平洋戦争の不可避を信じてゐる模様であるかそんな事態が起れば人類は滅亡する。

斯かる恐るべき大慘劇を眞剣に豫防することこそ日米兩國が全人類に負ふ所の義務ではないか？」

松岡外相は左の如く述へた後最後に野村新駐米大使の手腕識見に依り太平洋も波靜かに日米兩國相互信頼理解の日到來せん事を希望する旨を述へ「危機に迫つて之を打開する力は見えざる常識である」と斷し兩國民は宜しく冷靜なる判斷と自制とを以て刻下の凄絶極まる世界的情勢に對處すへきてある「歴史は永遠に續く。目前の動きは史上一章を綴るに過ぎない。米國よ日本に藉すに時を以てせよ。長い

事は言はぬ五十年以内で澤山だ。日本の正しき事は聽かて炳平（平カ）として全世界の認める所となるを確信する」と結んで帝國不動の信念と抱負とを力強く闡明した。

815 昭和16年1月22日 松岡外務大臣より
在英国重光大使他宛（電報）

在米日本資金の凍結切迫に鑑み公館關係の在
米預金を至急引出し方訓令

本省 1月22日後9時30分發

合第一三三號

最近ノ情勢ニ鑑ミ在米我資金ノ凍結ニ關シテハ其ノ斷行時
日緊迫セルモノト觀ラルルニ付貴館關係公私金ニシテ在米
預金アラバ至急引出方手配アリタシ

編 注 本電報の宛先は「在英及中南米（暗號ナキ分館ヲ除ク）
各公館長」。

~~~~~

816 昭和16年1月22日 在カナダ吉沢（清次郎）公使より  
松岡外務大臣宛（電報）

## 松岡外相議會演説に関する報道振り報告

第一冊第338文書。

オタワ 1月22日後発

本省 1月23日前着

### 第一一號

貴大臣ノ議會演説ハ<sup>編注</sup>AP若クハUP電ニ依リ當領東部新聞ノ主ナルモノノ第一面ニ相當大ナル見出シノ下ニ要領掲載セラレ居ル處目下ノ處社説ヲ掲ケタルハ左ノ一新聞ノミナリ

Montreal Daily Star(11日)

日本在住英人ノ引揚警告カ松岡外相ノ率直且不氣味ナル演説ノ後ニ發セラレタルコトハ意味深長ナリ同外相ノ演説口調ハ現戰爭發生以來日本ノ政治家ノ爲シタルモノノ中最率直ノモノニシテ其ノ論旨ハ更ニ首相ニ依リ裏書セラレタリ日本ノ意圖スル所ハShowdownヲ挑ムカ或ハ從來ノBlitzヲ繼續スルカニ在リト認メラルル處若シ此ノ際挑戰的言辭ニ止ラス挑發的行動ヲ伴フニ於テハ米國ノ反撥ハ日本ヲ驚愕セシムルヤモ知レス

編注 松岡外相の議會演説は、「日本外交文書 日中戦争」

817

昭和16年1月23日

在シドニー秋山総領事より  
松岡外務大臣宛(電報)

### 松岡外相議會演説に関する報道振り報告

キャンベラ 1月23日後発

本省 1月24日前着

### 第四〇號

貴大臣議會演説ニ對シ當地「ヘラルド」社説ハ松岡外相針路ヲ定ムト題シ右演説ニ依リ日本ノ政策カ危險且侵略的性質ヲ有シ特ニ反「デモクラシー」ナルハ明白ナリ右ハ心得違ナルカ獨逸ノ勝利英帝國ノ崩壞ヲ前提トスル領土獲得ニテ新秩序トハ之ナリ英本國側ト生死ヲ共ニスル濠洲ハ松岡外相カ日濠親善ヲ熱望セルニ拘ハラス蘭印ヲ佛印同様日本ト不可分關係ニ置カントスル今回ノ演説ニ依リ其ノ方針確定シ緊急ノ關心ヲ有セシムルモノナリ「ス」外相モ今や曩ニ爲シタル濠洲ノ對日親善態度ノ聲明ヲ修正シ駐日濠洲公使ノ卒直ナル對日警告ニ裏書セリ現在日蘭經濟交渉ハ日本ノ眞意ノ「テスト」ト見ラルヘク近衛首相カ時局重大ト言

ヘルト在日英國人ノ引揚トハ一ノ偶然ノ一致ト思考シ得スト論シ又英國人ノ引揚命令ハ當地各新聞ニ大々の二報道セラレ人心ヲ刺戟シツツアリ

818 昭和16年1月23日 在米國野村大使より  
松岡外務大臣宛(電報)

対日刺激を憂慮し当分の間は独伊兩國のみに  
資金凍結法を適用するとの米國國務省見解に  
ついて

ワシントン 本 省 1月23日後着 発

特情華府第一五五號  
同盟特情(不發表)

日本は特別扱ひ 國務省對日刺戟を憂慮  
ワシントン二十一日發同盟 外國資産凍結問題の成行きは  
關係各國の重大關心事となつてゐるか國務省當局は二十一  
日左の如き見解を表明した

「資金凍結法の實施は徒に日本を刺戟して日本の蘭印攻撃を促進させる恐れがあるから假令之か實施されること

になつても日本に對しては特に寛大な措置を採ることとし當分の内は獨伊兩國にのみ適用されるであらう」

819 昭和16年1月29日

松岡外相議會答弁要旨「我が大東亞指導ハハ  
絃一字ノ大精神」

我が大東亞指導ハハ絃一字ノ大精神

我が松岡外相ハ一月二十九日ノ豫算總會ニ於テ平川松太郎氏ノ質問ニ答ヘ、蘭印問題ニ關シ重ネテ左ノ如ク大東亞指導ノ精神ヲ明カニシタ。

答辯内容 蘭印交渉、蘭印カラ輸入スル石油ノ問題ニツイテノ御質問デアルガ、私モ一日モ速ニ國民ニ數量等モ發表イタシテ安心ヲ與ヘタイト希ツテキルノデ、諸外國ノ方面デハ私モ一々承知シテキナイガ無論モレテキルト思フガ、蘭印當局者ト我が當局者ト過般漠然トシタ交渉ライタシタガ、アレ以上交渉スルコトハマダ相談ガ纏ツテラナイノデアル。

八絃一字 私ハコノ機會ニオイテ我々ノ考ヘ企圖シテキ

ル事ノ八紘一字ノ言葉ハ容易ニ外國デハ理解出來ナイ。私モ適譯ニ困ツテキル。又日本ガ大東亞建設ノ指導權ヲ持つテ居ルトイフコトニ關シテ何カ侵略ノ意思ガアルト考ヘタリスル向ガ多イ。何カ力ヲ以テ押ヘタリシハセヌカト考ヘルモノニハ却々眞意ノ理解ガ出來ナイガ意義ヲ明ラカニシテ置キタイ。指導權トイフト人ニヨツテハ耳障リニ聞エ角ガ立ツテ聞エルカモ知レヌシ、又誤解ヲ生ズルカモ知レナイガ、我々ガ八紘一字トイフ我ガ民族ノ傳統の大理念ヲモツテ大東亞ヲ指導センコトヲ期スルトイフコトニ別ニ不都合ナ點ハナイト考ヘテキル。コノ大東亞圈内ニアル諸國諸民族ヲシテ各ソノ所ヲ得シムルヤウニ努力スル指導スル、トイフコトハ、コノ圈内ニオケル諸國諸民族否世界ノ何人デモガ若シ虛心ニコレヲ見ルナラバ洵ニ結構ナコトトシテ共鳴歡迎スベキデアルト思フ。我ガ大和民族ハ肇國以來ノコノ傳統の大理念、コレハ獨リ大東亞ダケデハナイ、行ク行クハ全世界ニワタリテ實現センコトヲ期シテキルモノデアル。唯コノ際ハ世界ノ現狀ト我ガ國現在ノ國力ソノ他ノ事情ニ鑑ミ、我ガ國ハ大東亞ニコレヲ限り、歐洲ハ獨伊ニオイテ同様ノ理想實現ニ當ルトイフコトニシタノデアアル。

アレハ日獨伊三國條約デ明カニサレテヲル。北米合衆國ノ如キモシ同様ノ理想實現ニ志スナラバ南北米ノ天地デコレニ任ズレバヨロシカラウト思フ。何處ノ強國デアラウガモシ我ガ民族ト同様ノ大理念ヲ抱キ、アル地域ヲ指導シ進ンデハ世界ヲ誘導セントスルナラバソノ考ヘ方ハ結構ナコトデアツテ、何モ我ガ國ガコレヲ專賣ニシテキル譯デハナイ、コレニ反對スベキ謂ハレモナク、唯問題ハソノ場合果シテソノコトニツイテコレヲ實現スルダケノ能力ト資格トガアルカトイフコトデアツテ、結局何レノ國民乃至民族ガカカル大理想ヲ實現スルノ資格ト力トヲ持チ、カカル大任ニ堪ヘ得ルデアラウカトイフコトニ問題ハ歸スルノデアアル。差當リ大東亞圈内ニオイテ我ガ民族ハ八紘一字ノ大理想ヲモツテ前述ノ通りノ意義ニシテ指導シヨウトイフノデアツテ、先ヅモツテコノ圈内ニアル諸民族諸國ガヨク我ガ民族ノ眞意ヲ諒解シテコノ聖業ニ協力センコトヲ希望スルノデアアル。而シテ指導トハ讀ンデ字ノ如キモノデアツテ、歐米列強ト雖モ我ガ眞意ヲ諒解シコレト共鳴シ來ツテ協力セントスルモノハ固ヨリ之ヲ拒ムモノデハナイ。





820

昭和16年1月29日  
在英國重光大使より  
松岡外務大臣宛(電報)

松岡外相の議會演説および答弁は英國政府を  
極度に刺激したとの觀測報告

ロンドン 1月29日後発

本省 1月30日後着

第六二號

諜報(二十九日)

一、昨夜モ獨逸軍來襲ノ警報海岸地帶ニ行ハレ警戒ハ益々嚴  
重トナレリ地中海希臘方面ノ形勢ト共ニ非常ニ注意拂ハ  
ル「メタクサス」ノ死亡ノ報ハ「シヨック」ヲ與フ  
二、日本議會ニ於ケル演説及質疑應答ハ極度ニ政府要部ノ神  
經ヲ刺戟シ日本ハ遠カラス參戰ノ決意ヲナセルモノト判  
斷スル者多ク「バトラー」ノ如キハ自分ノ味方ハ殆ト無  
クナレリト零シ居リタリ云々

米へ轉電セリ

~~~~~

821

昭和16年2月3日
在シドニー秋山總領事より
松岡外務大臣宛(電報)

松岡外相の「大東亜共榮圈」構想に関する発
言などの反響報告

シドニー 2月3日後発

本省 2月4日前着

第六三號

曩ニ貴大臣ノ東亞共榮圈内ニ印度ヲモ加フルトノ言明ハカ
ナリ當地ヲ衝動セルカ更ニ東亞新秩序第二會談ニ於テハ濠
洲モ包含ストノ末次大將ノ談話ハ著シク注目ヲ惹キ居レリ
右ニ關シ三日「テレグラフ」紙ハ「マ」空相ハ吾人ハ太平
洋ニ於テ敵アル事實ヲ承知セサルヘカラス太平洋ノ有力國
カ我敵ト軍事同盟ヲ結ヒタル以上前大戰ト異リ濠洲力戰ハ
スシテ過シ得ヘシトハ保證シ得サルニ付濠洲國防力ヲ總動
員シ國民ヲ皆兵トスヘシ政府ハ國防防備ノ爲目下參謀本部
ト協議中ナリト語レル旨ヲ報ス

~~~~~

822

昭和16年2月3日  
在英國重光大使より  
松岡外務大臣宛(電報)

タイ・仏印国境紛争への日本の調停は代償に  
軍事基地を要求するものとの新聞論調報告



第七一號

新聞報(三日)

ロンドン 2月3日後発  
本省 2月4日後着

一、「タイムス」外交記者ハ日本ハ「タイ」佛印兩國ノ調停ノ代償トシテ右兩國内ニ海空軍基地ヲ要求スル魂膽ナルモノノ如ク斯クシテ新嘉坡及蘭印ヲ攻撃スルノ便宜ヲ得ントシ居ルカ如キモ蘭印ノ日本ノ新秩序ニ對スル態度ハ明瞭ナルノミナラス支那ハ馬淵大佐ノ悲觀的見解ノ如ク蔣介石カ直接交渉ニ依ル和平提議ニ應諾スヘシトハ思ハレスト報シタリ

二、本年度三月迄ノ戰費豫算二十八億磅ハ十月末ヲ以テ二十七億磅ノ支出ヲ見タルヲ以テ藏相ハ近ク下院ニ於テ不足額補充ニ對スル承認ヲ求ムルヘシト報セラル

三、英軍ハ「エリトリア」ニ於テ二日「アゴルダット」ヲ占領「エチオピア」及伊領「ソマリランド」ニ於テ伊軍ヲ追撃中ニシテ「リビヤ」ニ於テハ「ダルナ」占領後同地西部ニ兵力集結中ト報セラル

823

昭和16年2月8日 在英國重光大使より  
松岡外務大臣宛(電報)

クレーギー報告に基づく極東英領の危機說到  
関する英國外相の憂慮表明について

ロンドン 2月8日後発  
本省 2月9日後着

第七八號

(欄外記入)<sup>(1)</sup> 近衛内閣成立後ノ外務大臣トノ第一回會見ニ於テ「クレーギー」大使ハ新内閣モ前内閣ト同様協力ノ精神ニ依リ

友誼的手段ヲ以テ兩國ノ關係ニ對處セラレントノ希望ヲ述ヘタルニ對シ松岡外相ハ目下將來ニ關スル全體ノ御方針ヲ慎重考究中ナルコトヲ答ヘラレ其ノ際非公式ノ意思トシテ日英間ニ於テハ日英關係ノ全般的改善ヲ希望スルコトヲ得ス(No hope of any general settlements)日英關係ノ今後ノ緊張ハ已ムヲ得サル旨ヲ述ヘラレタリ

右會見ノ後二日ヲ經テ日本及朝鮮ニ於ケル多數英人逮捕ノ問題起リ之ニ對シ陸相及法相ノ共同聲明發セラレ一般ニ英國ノ「スバイ」網日本ニ存スルノ印象ヲ與ヘタルカ裁判ノ結果ハ其ノ罰セラレ居ルコトハ些細ナルコトニテ

眞ニ「スパイ」ノ事ハナカリキ

以上ハ七、八月ノ概況ナルカ九月ニ至リ日本ハ三國同盟ヲ締結シ公然英ノ敵タル獨伊ノ側ニ投スルニ至リ政治家ノ公ノ演説及新聞論調モ英國側ニ對シテ益々疑惑（「アンクサイエチイ」）ヲ深カラシムルニ至レリ

二、松岡外相ノ公ノ聲明ハ三國同盟ハ平和ノ爲ノ「パクト」ナリト言ハレ貴大使モ支那問題ノ困難ヲ克服シテ東亞ニ於ケル秩序ヲ回復スルコトカ日本ノ主タル方針ナリト言ハレタルカ其ノ後發生セル事實ヨリ判斷シ尙日本ヲ「ドミニネイト」セン爲ニ其ノ勢力範圍ヲ擴張シツツアル總テノ兆候ヨリ見テ以上ノ説明ハ率直ニ諒解ニ苦シム所ナリ此ノ點<sup>(2)</sup>ニ關シ英國政府ハ松岡外相カ「ビルマ」ニ對シ日本ノ「アスピレイション」ニ付不適當ナ言辭（improper references）ナリト思考シ居ル點注意ヲ喚起シ度シ次ニ印度支那及「タイ」國ノ問題ニ付テモ最近ノ事態ハ何等極東ニ於ケル緊張ヲ緩和スルニ至ラス松岡外相ハ極東ニ於ケル紛争ハ日本ノミカ調停スルノ權利アリト言ハレタルカ右ノ「クレイム」ハ英政府ノ承認シ得サル所ナリ若シ仲裁ノ目的カ單ニ紛争ノ解決ヲ齎スモノナラハ勿論

英國モ總テノ他ノ國ト同様歡迎スヘキナリ然レトモ日本カ佛印及「タイ」ニ壓迫ヲ加ヘタリトノ不穩（disquieting）ナル報告アリ此ノ調停カ此等兩國ヨリ遠ナル政治上及軍事上ノ「コンセンション」ヲ確保スル口實ニ用ヒラレ居ルニ非スヤトノ疑惑ヲ持ツニ至レリ例ハハ新聞情報カ「カムラン」灣及總テノ現存飛行場ハ日本ノ使用ニ供セラルト報セルカ如シ

三、最モ重要ナル點ハ最近「ク」大使ノ報告ニシテ同大使ハ“there is general feeling in Japan crisis in Far East will develop within next few weeks”ト報告シ來タレ

右ハ如何ナル事ヲ意味スルヤ何人カ何人ニ對シ挑戰スルモノナリヤ日本ニ依リ企テラレ居ル或ル種ノ前進（forward moving）カ英本國ニ對スル獨ノ攻勢ト同時ニ行ハルル事ヲ信スヘキヤ若シ然リトセハ英國ハ極東ニ於ケル英ノ領土カ日本ノ攻撃ノ危險ニ瀕シ居レリト認ムヘキヤ事態ハ自分ノ諒解ニ苦ム所ナリ日本ハ地理的ニ有リタル位置ヲ有シ若シ欲スルニ於テハ戰禍ヨリ全然離レ得ル譯ニテ又日本ハ何人ヨリモ特ニ英國ヨリハ脅迫ヲ受ケ居ラス

若シ<sup>(3)</sup>自分ニ忌憚ナキ言ヲ許サルナラ日本カ支那事變四年ノ後更ニ他ノ戰爭ニ介入セサルヲ可トスルノ多クノ理由ヲ持ツ様思ハル自分ノ考ニテハ日本ハ英國及米國ト非友誼的(「アンフレンドリー」)ノ間柄ニ在ルノ理由ハ之ヲ認メサルニ非ルモ歴史ノ證明スルカ如ク日本ノ繁榮ハ英米ト良好ノ關係ニアル場合最モ著シカリシコトハ爭ハレサル所ナリ「クレীগー」大使カ日本ニ於テ危機ノ範圍増加シツツアルコトヲ報告シ來レル理由ヲ了解スルニ苦ム位ナリ日本政治家ノ目的トスル所ハ或大ナル混亂カ迫リ居ルコトヲ示サントスルモノノ如ク見ユ(it seems purpose of Japanese statesmen appears to show some gigantic convulse of upheaval is about to take place)

四、上記ノ如キ徵候及警報ヲ無視スルコトノ不可能ニシテ其ノ立場ヲ明瞭ニ御話スルノ必要モ了解セラルヘシ英國ハ極東ニ於テ領土ヲ有スルカ英國ハ何等侵略の行爲ノ意圖ハ有セサルモ如何ナル他ノ國ノ指令ニ依リテモ之等領域ヲ犠牲ニスルノ意圖ハ有セス尙日本ノミカ極東ニ於ケル凡テノ住民(英人ヲモ含ム)ノ運命ヲ管理支配(control of destiny and dominate)スルノ權利ヲ有ストノ原則ヲ容認

スルコトハ不可能ナリ英ハ極東ニ於ケル領域ニ於テ住民ノ安全及福祉ニ對シ英ノ領土ニシテ攻撃ヲ受クル場合ニ何人モ吾人カ「ウイズ、アトモスト、ブイガー」ニ防禦スルモノナルコトヲ疑フヘカラス

五、<sup>(4)</sup>尙更ニ二ノ點ヲ述ヘタシ

第一ノ點ハ日本カ日本自身ノ政策ヲ決定(decide)スヘキコトハ素ヨリ異存ナキカ若シ舊友且昔ノ同盟國トシテ次ノ如キ事ヲ言フモ日本ノ怒ヲ買フコトナカルヘシト存ス即チ自分ハ日本ノ行ハントスル政策カ恐ルヘキ不幸(「テリブルディザスター」)ニ進マサランコトヲ希望シ祈願スルモノナリ尙日本カ獨伊ト協力スルコトニ於テ過去ニ於テ偉大ナル國力ト繁榮トヲ作上ケタル其ノ賢明ナル用意健全ナル判斷ヲ喪失セサランコトヲ<sup>(二字不明)</sup>□□シテ止マス

第二ノ點ハ戰局ニ關シ英國ニ有利ナル報道カ日本ニ於テハ押ヘラレ英ハ沒落ニ瀕セル「デカダン」ナリトノ思想カ唱道セラルルトノコトナルカ貴下ノ御承知ノ通り今日ノ英國人ノ眞ノ「スピリット」ハ左様ナモノニ非ス英帝國全部ニ亘リ絶對的ニ舉國一致ノ強キ決意ヲ有シ居ルノミナラス英國ハ大ナル資源ヲ有シ且米ノ制限ナキ援助ヲ

(欄外記入)

得居り如何ナル場合ニ於テモ此ノ鬭争ニ失敗スルコトナ  
キハ明瞭ナリ獨逸側ハ此ノ島帝國ヲ征服シ得ルコトヲ誇  
張シ居ルモ吾人ハ其ノ失敗ヲ確信シ居レリ昨年九月ニモ  
吾人ハ危機ヲ避ケ得タリ今日ハ陸上海上空中ニ於テ英ノ  
力ハ其ノ當時ヨリモ遙ニ威力ヲ増シタリ獨力英征服ノ企  
圖失敗シ戦争ニ敗ルルコトハ英國民ノ確信スル所ナリ

昭十六、二、七、「イーデン」外相ヨリ重光大使へ申入

824

昭和16年2月11日 在英國重光大使より  
松岡外務大臣宛(電報)

日本参戦の可能性に関する新聞報道振り報告

ロンドン 2月11日後発

本省 2月12日後着

第九三號

十一日新聞報

一、「テレグラフ」外交記者ハ倫敦官邊ハ樞軸側ハ日本ヲ強  
要シ恐ラク獨ノ春季攻勢ト同時ニ對英參戰ヲ爲サシムヘ

シト信シ居レルカ三國同盟以來日本ハ漸次樞軸側ニ近寄  
リツツアリ特ニ最近日本政府ハ何等カノ特殊事態ニ備ヘ  
ツツアルモノノ如キハ各種諜報ノ明示スルトコロナリ即  
チ日本ノ「タイ」佛印間紛争調停ハ右兩國内ニ海軍及飛  
行基地ノ獲得ヲ目的トスルモノノ如シ若シ日本ニ於テ  
「タイ」ニ基地ヲ獲得センカ右ハ蘭印乃至馬來攻撃ヲ可  
能ナラシムルモノニシテ英利益ニ對スル由々數脅威ナル  
カ又日本ハ其ノ南進政策實現ノ爲對蘇接近ヲ試ミ居リ之  
等日本近時ノ動向ハ獨逸ノ使囑ニ由ルモノト信セラル日  
本トシテハ地中海ノ形勢ニ鑑ミ英ノ更ニ成功ヲ重ネサル  
前ニ參戰ヲ可トスヘキモ或ハ更ニ待機シテ優勢ナル側ト  
良好ナル關係ヲ保ツヤモ知レス何レニセヨ日本ノ經濟狀  
態ハ惡ク短期戰ノミ可能ナリ英ハ極東又ハ太平洋ニ於ケ  
ル如何ナル事態ニモ對處ノ準備アリ日本ハ樞軸國ノ援助  
ヨリ隔離セラレ且有力ナル敵ニ圍繞セラルルコトニナル  
ヤモ知レスト報シタルカ同様ノ論旨ハ「エキスプレス」  
及「メイール」其ノ他ニモ掲ケラル

二、政府ハ「ルーマニア」ヨリ公使ヲ引揚ケルコトトセル旨  
發表セラレタルカ右ハ獨逸カ「ルーマニア」ニ於テ「プ

ルガリア」占領ノ爲ノ派遣軍編成ヲ完成シ近ク勃希國境迄兵ヲ進メタル上希臘ニ停戦ヲ強要セントスルノ形勢ニ鑑ミ決定セラレタルモノト報セラル

三、「エリトリア」方面英軍ハ北部ニ於テハ「メルサ」「タオライ」及「コロラ」ヲ占領シ「カツサラ」ヨリノ攻撃軍ハ「ケレン」攻撃ヲ續ケ居ル由報セラル  
加、濠、南阿、新嘉坡、香港、米ニ轉電セリ



825

昭和16年2月12日

在英国重光大使より  
松岡外務大臣宛(電報)

### 日本の参戦氣配に関する各紙報道振り報告

ロンドン 2月12日後発

本省 2月13日夜着

第九五號

新聞報(十二日)

一、日本ノ参戦氣配ニ關シ各紙ノ諸報左ノ通り(特情参照)

「タイムス」社説 何國ト雖モ日本攻撃ノ企圖ヲ有セサルハ明白ナルニ拘ラス日本カ此ノ上更ニ新シキ戦争ニ入ラントスル徴候ヲ示シツツアルハ英國ノ抗戦力ヲ極東ニ

分散セシメントスル獨逸ノ謀略ニ乘リタルモノナルカ日本ハ獨逸ヨリ如何ナル援助ヲ期待シ得ルヤ

「テレグラフ」社説 日本海軍ノ商船保護ニ關スル法案ハ英米威嚇ノ一方式ニシテ此ノ種強硬態度ハ最近日本ノ政策ヲ動カシツツアル獨逸系分子ノ思想ニ基クモノナルカ他面ニハ反英米政策ニ對スル反對モ尠カラス英國トシテハ極東ノ備ヘヲ怠ルヘカラス日本ハ須ク再思三考スヘシ

「ガデアン」外交記者 日本ハ獨逸ノ煽動、英國軍ノ勢力挽回及米國ノ對英援助ニ鑑ミ三國同盟ヲ利用シテ蘭印馬來方面ニ突進スル時機ハ今ヲ措テ無シト決定セル模様ナリ南進基地ハ佛印「タイ」等ニ着々固メラレツツアリ日蘇條約モ新四路軍問題ニヨリ成立ノ可能性ヲ増大シタリ乍併新嘉坡及馬尼刺ノ防備ハ進捗中ナレハ日本ハ伊太利ノ先例ヲ再思スルカ賢明ナルヘシ

「メイール」社説 日本ハ對支對蘇問題ヲ控フルカ故ニ對米對蘭印強硬政策ヲ一貫シ得ス戰勝國側ニ荷擔セントシ居ルモ其ノ見透シツカサル次第ナリ若シ樞軸側ニ參戰セハ結局ハ米國トノ戦争ニ依リ破滅ニ赴クヘシ

二、「エクスプレス」ハ大見出ノ下ニ「ルーズヴェルト」大

統領ハ太平洋戰發生スルモ米國ノ對英援助ハ切下ノ必要  
ナカルヘシト言明シタルカ同時ニ此ノ種問題ハ余リニモ  
決定的ニシテ米國カスル戰爭ニ入ル危險ハナカルヘシト  
述ヘタル旨ヲ報ス

三、「テレグラフ」新嘉坡電ハ英國ハ「タイ」國ニ對シ日本  
ニ軍事基地ヲ提供スルハ英「タイ」不可侵條約違反ナリ  
ト看做ス旨申入レタル模様ナリ尙英側ノ北部馬來ニ於ケ  
ル軍備増強進行中ニシテ「ブレンハイム」爆撃機群モ送  
ラレタリト報ス

四、二月三日ニ終ル一週間内ノ商船被害ハ英船十一隻四〇、  
四二九噸、同盟國船三隻一三、八七二噸、中立船一隻二、  
九六二噸、合計十五隻五七、二六三噸ト公表セラル



昭和16年2月13日 松岡外務大臣より  
在英國重光大使宛(電報)

極東危機説に関する英国外相申入れに對し松  
岡外相覺書を手交方訓令

本省 2月13日後8時0分發

第四六號

貴電第七七號ニ關シ  
(見當ラズ)

「クレイギイ」大使モ本大臣ニ會見方希望シ居リ兩三日中

ニ其ノ運ヒトナルベキ處不取敢「イーデン」外相ニ對シ別  
電第四七號ヲ御手交アリ度ク其際貴大使ヨリ本大臣ガ右様  
(編注)

率直ナル意見ヲ申述フルハ同外相ト壽府以來知己關係ニア  
リ個人的ニ特ニ親シミヲ感ジ居ル爲メナル旨ヲ附言セラレ  
度ク又「ク」ノ報告ニ係ル極東ノ危機切迫云々ノ如キコト  
ハ眞ニ嗤フヘキ妄想ニシテ(十二日次官ヨリモ同大使ニ對  
シ此點ニ付注意シ置ケリ)固ヨリ無根ナルノミナラズ我方  
ニハ進ンデ英國ト事ヲ構フルガ如キ意圖皆無ナル次第ヲモ  
併セテ口頭ニテ申シ入レラレ度シ

尙最近英國新聞ハ我眞意ヲ曲解シ日本ガ今ニモ軍事行動ヲ  
起サントスルヤニ報道シ徒ラニ刺戟的ナル記事論說ヲ掲ゲ  
居ル處右ハ兩國關係ヲ惡化スルノミニテ何等益ナク甚ダ有  
害ト認メラルルニ付此ノ點ニ付テモ可然先方ノ注意ヲ喚起  
シ置カレ度シ

編注 別電第四七号は見当たらないが、第四七号に基づく対英

覚書の和訳文を本書第837文書付記として採録。

827

昭和16年2月14日

在英国重光大使より  
松岡外務大臣宛(電報)

日本がドイツと連携して軍事行動を起こすとの報道振り報告

ロンドン 2月14日後発  
本省 2月15日前着

第一〇〇號(急)

新聞報(十四日)

日本カ獨逸ト連繫シテ近ク軍事行動ヲ起スヘシトノ想定ヲ中心トシテ引續キ新聞ハ大々のニ報道シ居リ其ノ大袈裟ナル書振リハ勿論官邊ノ指導ニ依ルモノノ如ク特ニ何等カノ目的ヲ有スル宣傳ヲモ含ムモノト認メラルルカ夫レ自身既ニ危険ノ程度ニ達シ居レリ

一、記事トシテハ濠洲首相代理危期聲明、軍事會議召集及右ニ英極東軍總司令官ノ參加カ大キク取扱ハレ尙米國民ノ支那、日本方面引揚命令、日本艦隊ノ南進報道アリ尙又米國ノ輿論カ極東ニ於ケル急激ナル危期ニ非常ニ神經質

トナリ新聞紙ハ警鐘ヲ急ニ打ち始メタリト報ス

二、各紙外交記者ハ多ク解説ヲ試ミ居レルカ大体同趣旨ニシテ「ナチ」ノ次ノ計画ハ「バルカン」及極東ノ戦線ニシテ日本ハ此ノ計画ニ從ヒ近ク蘭印、馬來次テハ濠洲ヲ攻撃スルモノノ如シトスルニ一致シ日本ノ蘭印ニ對スル要求條項ヲモ掲載シ且日本ノ對英、米輿論ノ最近數週間ニ於ケル惡化及南進論ヲ報シ居リ

三、論說(特情參照)

「タイムス」ハ「Japan the Puppet?」ト題シ日本カ獨逸ニ追從シ傀儡ト化シタル經緯ヲ論シ獨逸ノ空言ニ信賴シテ日本ハ今ヤ國家ノ基礎ヲモ賭セントシツツアリト云ヒ「テレグラフ」ハ濠洲ニ對スル脅迫ト題シ日本ノ南進ノ迫レル危険ヲ論ス其ノ他ハ或ハ日本ハサイコロヲ投シタリトノ標題ノ下ニ各紙共論調何レモ激烈ナリ米ヘ轉電セリ

828

昭和16年2月14日

在英国重光大使より  
松岡外務大臣宛(電報)

世論喚起に躍起となる英国の外交目的はタイ・

仏印国境紛争調停会議を不成功に導くことにあ  
るとの観測報告

ロンドン 2月14日後発

本省 2月15日前着

第一〇一號(至急)

一、英國側ノ新聞ノ激化シタル記事論調ニ拘ラス日本輿論ノ  
冷靜ハ印象ヲ與ヘ居ル處

英國側カ斯克モ世界ノ輿論喚起ニ躍起トナリ居ルハ各方  
面ヨリ有スル相當適確ナル情報素ヨリ不正確ナル情報ヲ  
モ根據トスヘキハ勿論ト思ハルルカ差當リ外交ノ目的ハ  
東京調停會議ヲ不成功ニ導カントスルニアルヘク

二、軍事上トシテハ「タイ」國ニ於テ日本ノ勢力ノ樹立ヲ危  
惧シ特ニ馬來ニ於ケル其ノ半島部分ニ對シ大ナル懸念ヲ  
有スルモノノ如シ

米へ轉電セリ



829

昭和16年2月15日

松岡外務大臣より  
在英國重光大使、在独国来栖大使他宛  
(電報)

日独伊離間ないし親英米勢力回復を目的とす  
る米国の謀略的活動に關し情報収集方訓令

本省 2月15日後11時発

合第三一一號(機密)

最近米國在外使臣ニ於テ我方出先ニ對シ米カ對日緩和政策  
ヲ採ルカ如キ口吻ヲ洩ス事例アリ例ヘハ本月八日在蘇米大  
使ハ建川大使ニ對シ茲十日間米國ノ對日態度ハ少シツツ好  
轉シツツアリト言ヒ在北京米大使館員ハ我大使館員ニ對シ  
米國ハ野村大使信任ヲ好機トシ日本ト妥結ヲ計ル意嚮ヲ有  
シ居ル旨ヲ述ヘ又香港ニ於テ得タル情報ニ依レハ米國總領  
事館員ハ重慶側ニ長期抗戰ノ見込ナキニ於テハ援助ハ無駄  
トナルヲ以テ「カリ」ヲシテ實地ニ調査ヲセシムルコトト  
セリト洩ラセルカ如シ

右ハ日獨伊離間ト我國ニ於ケル親英米勢力ノ回生ヲ目的ト  
スル國務省筋ヨリノ指令ニ基ク謀略行爲ナルヤニモ考ヘラ  
ルルヲ以テ貴地米公館員ニ接觸ノ際夫レトナク同一趣旨ノ  
事ヲ述フルヤ否ヤ試問アルト共ニ本件ニ關シ別途情報蒐集  
ニ努メラレ度

本大臣訓令トシテ



伯ヨリ亞、智、墨へ轉電アリ度

獨ヨリ伊へ轉電アリ度

瑞西ヨリ佛、土、西へ轉電シ西ヨリ葡へ轉報アリ度

馬尼刺ヨリ「バタヴィア」へ轉電アリ度

參考トシテ米へ轉電セリ

編 注 本電報の宛先は英、独、カナダ、ブラジル、スイス、

マニラ、コルカタ、北京、上海、香港の各在外公館長。

830 昭和16年2月15日

在英国重光大使より  
松岡外務大臣宛(電報)

英国の対日不信に関する英国外務次官の談話  
情報報告

ロンドン 2月15日前発

本省 2月16日前着

第一〇四號(館長符號扱)

十三日聯絡者カ「バ」次官ト長時間論議セル結果ノ報告要

點左ノ通り

英側ノ態度ハ全ク「クレイギー」ノ報告ニ依リタルモノナ

ルカ其ノ他各方面ヨリノ情報皆之ヲ支持ス要スルニ日本ノ政治ヲ動かシ居ル少數ノ要路ハ全然獨逸ノ指導ニ依リ日本ヲ戰爭ニ捲入レントシ居リ此ノ要路ノ勢力カ日本ノ政府ヲ動シ居ルコトハ爭ハレサル事實ナリトノ結論ヲ得タリトテ聯絡者ノ説明ヲ納得セス特ニ總理外務大臣ノ議會ニ於ケル演說質問應答其ノ他ノ聲明等ハ英トシテハ到底默視シ得スト考ヘ居ル譯ナリ特ニ「タイ」國及南方ノコトハ恰モ英國ノ「ローカントリー」ニ於ケルカ如キ利害關係トナリ居レリト説明シ更ニ直接最モ「イーデン」其ノ他ニ不快ノ念ヲ與ヘタルハ外相議會演說中ノ伊太利關係ノ部分ナリト云ヒ居タリ

米へ轉電セリ

831 昭和16年2月15日

在英国重光大使より  
松岡外務大臣宛(電報)

英国の対日強硬態度に対し冷静対応方意見具申

ロンドン 2月15日前発

本省 2月16日前着

第一〇五號(館長符號扱)

一、連日滿載セラレ居ル激烈ナル新聞ノ記事論説ニ付テハ當方ニ於テハ今日迄當方ニ有スル限りノ材料トシテハ何等急迫シタル形勢ナシ右ハ英國側ノ報道ニ基クモノナリト説明シツツアルカ

二、情報ニ依レハ英側ハ「クレイギー」ノ報告ヲ本トシ居ル譯ナルカ更ニ近衛内閣ニ依リ首相外相等ノ演說聲明及佛印「タイ」蘭印等ニ對スル日本ノ政策及言論等ヨリ日本トノ衝突ハ免カレスト結論シ歐洲戦局カ英國ニトリ阿弗利加地中海方面ニ於テ有利ニシテ伊太利カ獨ノ荷厄介トナリ居ル狀況竝ニ佛及西班牙ノ態度カ大局上ヨリ消極的トナリ米ノ援助力愈々積極的トナリ來レル等ヨリ全局面ハ有利ト見此ノ際日本ニ對シテハ斷然積極的ノ態度ヲ取リ必要アルニ於テハ樞軸ノ一角ニ對シ打撃ヲ與フヘシト決心シ居ル様ナリ從テ恐ラクハ右「チャーチル」「イーデン」ノ强硬政策カ效果ヲ擧ケツツアリト宣傳スルヤモ知レス

三、帝國トシテハ極メテ冷靜ナル判斷ノ下ニ宣傳カマシイコトハ避ケ(出來得ル丈ケ口數ヲ少クシ且口ヲ揃ヘ不謹慎ナル新聞記事等ハ慎ミ)帝國獨自ノ立場ニ立チ内外輿論

ノ指導政策遂行ニ努力スルコト此ノ際特ニ必要カト思考ス

米へ轉電セリ

~~~~~

832

昭和16年2月16日

松岡外務大臣より
在米國野村大使宛(電報)

シンガポールが危殆に瀕するような事態の現
出に米國は黙視し得ずとの米國大使館參事官
の大橋外務次官に対する内話について

第七五號

本省 2月16日後7時30分發

「ドウマン」參事官歸任セル趣ヲ以テ「グルウ」大使ヨリ引見方希望アリ十四日次官會談セル處其際「ド」ノ内話セル要旨御參考迄(近ク本大臣トモ會見ノ筈)

一、米國朝野ノ對獨反感ハ極度ニ達シ居ル處三國條約締結ノ結果日本ハ獨逸ノ盟邦トナレル爲日米關係頓ニ緊張セサルヲ得ス米國ハ右同盟ニ依リ危機ニ直面スルニ至リ日米關係ハ支那事變ヲ飛ヒ越ヘ全面的對立關係ニ入りタリ
二、英國崩壞セハ米國ハ孤立無援ニ陥ルヘキヲ以テ米國ハ對

英援助ニ全力ヲ傾注シツツアリ從テ日本カ直接又ハ間接ニ新嘉坡ヲ攻撃シ英帝國ヲ「バックドア」ヨリ壊滅ノ危険ニ瀕セシムルニ於テハ米國トシテハ默視シ得サルヘシ日本カ佛印蘭印等ニ於テ脅迫ニ依ラス經濟的權益ヲ獲得スルコトニ付テハ何等異議ナキモ例ヘハ今次ノ「タイ」佛印紛爭調停ニ關シ佛印ヲシテ「ラオス」「カムボヂヤ」ノ如キ廣大ナル地域ヲ無理ニ割讓セシムルカ如キコトアラハ佛印當局ハ土民ノ不滿ヲ制御シ得サルニ至ルヘク延イテ治安紊亂スル結果日本ノ占據トナリ更ニ「タイ」ニ侵入スルコトトモナラハ新嘉坡及「ビルマ」ハ脅威ヲ蒙ムルニ至ルヘシ

三、米政府ノ態度ハ過日ノ大統領ノ聲明ノ通り極東ニ於ケル戰爭ハ欲セサルモ萬一日米衝突トナルモ對英援助ハ中止セスト云フニ在リ米國ハ故ニ日本ヲ激發スルカ如キ意圖ナク從テ例ヘハ石油ノ全面的禁輸實施等ニ依リ日本ヲ戰爭ニ驅ルコトナキ様心掛ケ居ル次第ナルニ付日本モ同様米國ヲ戰爭ニ驅ルカ如キコトナキ様自制セラレ度シ日米關係ハ今ヤ「フル」ノ狀態ニテ此上ノ現狀變更ハ忍ビ難キ所ナリ

四、(次官ヨリ米國參戰ノ可能性ヲ尋ネタルニ對シ)米國民ハ舉テ對英援助ニ贊成ナルモ進テ參戰スルコトニハ八割五分迄カ反對ナリ尙蔣政權ハ實質的ニ米國ノ敵國タル獨逸ノ盟邦ト抗爭シ居ルモノナルニ付米國ハ當然之ヲ援助スルモノナリ云々
英ヘ轉電アリ度シ

833

昭和16年2月17日

松岡外務大臣ヨリ
在英國重光大使宛(電報)

英國側の日英危機高調には米國の関心をタイ・
仏印方面に向け英米提携の強化を狙う謀略的動
機を含むとの観測通報

本省 2月17日後6時發

第四九號(極秘)

貴電第七七號ニ關シ

今次英國外相ノ申出ハ「クレギー」大使ヨリノ報告ヲ基礎トシ帝國ニ於テ「タイ」佛印間調停會議ヲ利用シテ「タイ」佛印方面ニ軍事的基地等ヲ獲得シ次テ獨逸ノ對英上陸作戰ト相呼應シテ南洋方面ニ於ケル對英軍事行動ニ着手ス

ルニ非スヤトノ豫想又ハ危惧ノ下ニ爲サレタルモノト認メラルル處「ク」大使カ如何ナル事實ヲ根據トシテ右ノ如キ「アラームینگ」ナル報告ヲ本國政府ニ爲シタルヤハ頗ル不可解ニシテ十二日同大使ハ次官來訪ノ際次官ノ質問ニ對シ自分ハ過去ノ經驗ニ依リ日本ノ政治外交ヲ支配シ居ルハ軍部ナルコトヲ熟知シ居リ今回ノ報告モ軍方面ノ責任アル人々ノ言動ヲ根據トセルモノナリト述ヘ居タルニ依リ爲念早速各方面ニ就キ右種事實ノ有無ヲ内探セルモ別段之ニ該當スル事實ヲ見出し得ス一方英國有力紙カ舉テ日英危機ヲ高調シ居ル事實トモ照應シ本件申出ハ之ニ依リテ帝國ノ南方進出ヲ一時的ナリトモ牽制スルト共ニ米國ノ關心ヲ「タイ」佛印方面ニモ向ケ同方面ニ於ケル英米ノ提携ヲ強化セシメントスル謀略的動機ヲモ多分ニ含ミ居ルヤニ認メラル右ハ既ニ御氣附ノコトトハ存スルモ當方觀測御含迄在米大使ニ轉電セリ

~~~~~

834

昭和16年2月17日

在シドニー秋山總領事より  
松岡外務大臣宛(電報)

日本の蘭印攻略説に対し米英豪三国が警告発

出を討議したとの報道について

シドニー 2月17日後発

本省 2月18日前着

第八九號

(一)十六日華盛頓發「ヘラルド」特電ハ十五日ノ「ハル」  
「ハリファックス」及「ケーシー」會談ハ日本ノ蘭印攻  
略ハ之ヲ認容セスト米國ヨリ日本ニ直接警告スルノ是非  
ニ付討議セルモノニシテ右ニ基ク事態ニ適應スル必要ナ  
ル準備ニ關シテモ審議セルモノナリ右ニ關シ官邊ハ沈黙  
ヲ守リ居ルモ一般ニハ米國ハ野村大使ヨリ内密且確實ナ  
ル保障ヲ得サル限り右警告ヲ發スルニ至ルモノト了解サ  
レ居レリ又右準(備)ハ三國ノ陸海軍戦力ヲ即時南太平洋  
ニ集結セル點ニ及フモノナルカ當局ハ日本ノ蘭印飛躍ハ  
最早「エンバーゴ」ニ依ル壓迫ニテハ足ラス寧ろ海軍  
行動ニ依リテノミ阻止シ得ルト信スルニ至レリ太平洋ノ  
緊急事態ニ對應スル英海軍力派遣説ハ在米英國筋ヨリ確  
認セラレ居レリ尤モ現在ノ所極東ニ於テハ尙外交力指導  
的武器ニシテ時期ヲ延ハシ時間ノ余裕ヲ得ルコトニ努力  
ヲ重ネ居レリト報ス

(二)十六日「ヒ」海軍大臣ハ其ノ後極東ノ事態ハ重大ナルモ對獨戰爭ニ英國力屬セル以上又米國ノ態度カ英國援助ナル以上日本ヲ料理スルコト容易故不必要ニ心配ノ要ナシト放送セリ

英、米へ轉電セリ



835 昭和16年2月18日 松岡外務大臣より  
在英国重光大使宛(電報)

### 南進問題や三国同盟に関するクレギー大使

#### との意見交換について

本省 2月18日後8時発

#### 第五一號

往電第四七號ニ關シ

十五日「クレギー」大使貴電第七八號ノ趣旨及貴大使「イーデン」外相會談要旨ヲ認メタル書物ヲ持參來訪セルニ付本大臣ハ本件ニ付テハ重光大使ヨリ詳細報告アリ當方ヨリモ既ニ同大使ヲシテ「イ」外相ニ對シ覺書ヲ提出方訓令濟ナリト述ヘテ往電第四七號寫ヲ手交シ英國側ニ於テハ我政策ノ動向ニ付過當ノ懸念ヲ有スル模様ナルカ英米カ對

日共同施策ヲ進メツツアル旨ノ報道頻リニ傳ヘラレ右ハ渺カラス我輿論ヲ刺戟シ疑懼ノ念ヲ生セシメ居リ其ノ爲メ自然我方トシテモ之ニ備ヘサルヘカラストノ主張國內一部ニ擡頭シ延テハ双方ニ誤解ヲ醸ス傾向アリ英米側ニ於テ斯如キ刺戟的態度ヲ慎マルルニ於テハ我方ヨリ進ンデ英米ニ *anxiety* ヲ感セシムルカ如キコトハセサルヘシ孰レニセヨ相互ニ錯覺ヲ抱クコト最モ危險ナルニ付折角之ヲ避ケル様致シ度シト述ヘテ英側ノ反省ヲ促シ三國條約ノ主要目的カ歐洲戰爭ノ不擴大竝ニ平和收拾ノ促進ニアル所以ヲ説示シ更ニ極祕ノ含ミトシテ同條約締結ニ際シ獨逸側ハ米國刺戟ヲ避ケタキ意嚮ヲ明ニシ日米衝突ハ極力之ヲ回避方希望シ出テタル經緯アリ實ハ本條約ハ右ヲ基礎トシテ交渉ノ開始ヲ見タル次第ナル處本大臣ハ獨逸ノ眞意ヲ疑ハス右ハ獨逸ノ利益ニ合スル所以ナリト觀察セルモノナルカ日本ノ政策モ亦此ノ基礎ニ立脚シ日本カ引續キ此ノ方針ヲ以テ進退スルコト勿論ナリトノ趣旨ヲ説明セリ其ノ際「ク」ハ日本ニハ目下南進論活潑ニ行ハレ居ル處貴大臣ハ所謂南進ナルモノヲ阻止シ得ルヤ又日本側ハ佛印、「タイ」紛爭ノ調停ニ依リ法外ナル代償ヲ期待スルモノニアラスヤト問ヘルニ付

本大臣ハ南進ノ點ニ付テハ其ノ阻止ニ最善ノ努力ヲ拂フ決心ナルカ調停問題ニ關シテハ此際言譯メキタルコトハ差控ヘ日本ノ眞意ヲ事實ニ依ツテ證明致シ度シ本大臣ノ關スル限リ平和ノ克服カ即チ最大ノ報酬ニシテ右ヲ以テ満足スルモノナリ而シテ右ハ我カ肇國ノ理想タル世界平和具視<sup>(現カ)</sup>ノ一步ヲ爲スモノナリト信スト述ヘ我方政策ヲ詳述セリ尙本「メモランダム」ハ「イ」外相トハ壽府以來呢懇ノ間柄ナルニ依リ腹藏ナキ意見ヲ吐露セルモノナルカ此ノ中歐洲平和斡旋ニ關スル部分ハ勿論獨伊側トハ何等ノ關係ナク本大臣平素ノ信念ヲ述ヘタルニ止マル旨ヲ附言シ置キタルカ會談二時間ニ亘リ「ク」大使ハ餘程安心ノ体ニテ辭去シタリ米ヘ轉電セリ

~~~~~

836

昭和16年2月18日 松岡外務大臣より
在英国重光大使宛(電報)

極東危機説に関する英国側宣伝の経緯につき

観測通報

本省 2月18日後6時0分發

第五二號(外機密、極秘)

往電第五一號ニ關シ

一、當方ニ於テ探知セル所ニ依レバ本月初頭ヨリ東京ヲ初メトシ新嘉坡(支那艦隊司令長官)、佛印、泰、上海、香港乃至濠洲等各方面ヨリ所謂獨逸ノ春季攻勢ト呼應シ日本ハ近々南方ニ對スル軍事行動ヲ起ス様子ニテ極東ノ形勢俄然逼迫セリトノ趣旨ノ不穩ナル報告續々本國政府ニ打電セラレタル形跡アリ且下獨逸ノ上陸作戰ヲ危惧焦慮シ居ル英側ニ於テハ之ヲ現ニ進行中ノ東京調停會議トモ結び着ケ(我方ガ新嘉坡攻撃ノ爲ノ前進基地ヲ要求スルモノト觀察シ居レリ)日本ガ獨伊ニ使囑セラレ愈々積極的南進政策ヲ強行スルモノト即斷シ可成ノ衝動ヲ感ジタルモノノ如ク茲ニ於テカ我方ニ警告ヲ發スルト共ニ最後ノ「アツピール」ヲ行ハント欲シ七日ノ貴大使ニ對スル申入トナリタルモノト察セラル然ルニ我方ニ於テハ我ヨリ進テ英米ト事ヲ構ヘル意圖ナキハ往電第四六號及往電第一一號ノ通ニシテ又貴電第一〇四號ノ總理及本大臣ノ議會ニ於ケル答辯等ハ十五日「クレイギー」大使持參ノ翻譯ニ徴スルモ誤譯乃至誤解ニ基クモノ頗ル多ク英側ハ初メヨリ我方ノ眞意ニ付正確ナル報告ヲ受ケ居ラズ此ノ點

ニ關シテハ本大臣ヨリ「ク」ノ注意ヲ喚起シ「ク」モ了承シ居レリ

二、右ト關聯シ米國政府モ大同小異ノ報告ヲ接受シ居ルモノノ如ク米側モ亦英國濠洲ト同様頻リ二本邦居留民ノ引揚等ヲ急ギツツアリ英米協調シテ對日牽制ヲ計リ居ルコト勿論ノ儀ナルガ英國新聞ガ盛ニ極東危機ノ切迫ヲ書キ立テ居ルハ米國ヲ更ニ誘導スル爲メナルコト申ス迄モナク英側ハ米國ノ極東干涉ヲ誘發スル様極力努力中ニシテ蘭印保全ニ付テモ米國ヲ表面ニ立テント畫策シ居ル實狀ナリ尤モ其ノ反面目下華府ニ於テ進行中ノ英米軍事會談ニ於テハ米側ハ未ダ英側ノ希望スル所迄歩ミ寄り居ラザルヤノ情報アリ此邊ハ我方トシテ留意ノ要アリト存ス

三、尙我新聞論調ニ關シテモ「ク」大使ヨリ取締方要望アリ可然應酬シ置キタルガ十六日都下言論界代表ニ對シ本大臣ヨリ國際關係機微ノ際ニモアリ折角自制方申入レ諒解ヲ得置キタリ

米ニ轉電セリ

837

昭和16年2月18日
在英國重光大使より
松岡外務大臣宛(電報)

極東危機説をめぐる松岡外相對英覺書を手交
について

付記 昭和十六年二月十七日付

右覺書と訳文

ロンドン 2月18日後發

本省 2月19日後着

第一一七號

往電第一〇六號ニ關シ

外相猶數日不在ニ付十七日「バ」次官ニ會見

「本使ヨリ「イ」外相ノ所述ニ對シテ松岡外相ノ回電ニ接シタルモ「イ」外相不在トノコトニテ數日ヲ空費シ此ノ上遷延ヲ不適當ト認タルヲ以テ(尤モ大凡ノコトハ貴下ノ御承知ニ入レタリ)貴下ヲ通シテ説明シ度シ要スルニ「クレイギ」大使ノ報告ニ拘ラス日本政府ノ意嚮ハ從來本使ノ説明セル通りナルコト之ニテモ判明シ悦ビ居レリ日本ノ政策ハ獨自且確固(「ファーム」)ナルモノナルモ「イ」外相ノ心配セラレタルカ如キモノニアラスト前提

シテ貴電第四六號御訓令ニ依リテ書物ヲ手交セリ

二、「バ」次官ハ熟讀ノ上之ヲ謝シ「イ」外相歸ヘリ次第二傳フヘク且今夜首相ニ委曲話スヘシ尙何分ノコトハ「イ」外相ヨリ申上クヘキモ英ニ關スル限りハ攻撃ヲ受クル場合ヲ豫想シテノ準備ハ爲シ居ルモ何等攻撃的ノ意嚮ナキ次第二付此ノ點ハ特ニ明言ス(書物ノ日本側ノ心配云々ノ點ニ關シ)ト述ヘ居タリ

三、談話中英國ノ對支政策ノ批評今回ノ「プレスキヤンペーン」ノ寧ロ見苦シキコト其ノ他英國側ノ報道ノ「ソース」ノ不適當ナルコトニ注意ヲ與ヘ尙右書物中ニハ幾多ノ「サゼツシヨン」ヲモ含ム様ナルニ付良ク研究アリ度キ旨ヲモ述ヘ置ケリ

(付記)

二月十七日附松岡大臣發「イーデン」外相宛回答文譯

帝國外務大臣は英國外務大臣の態度か適當の危惧を示し居る趣を聞知し寧ろ驚きたる次第なり。

斯る危惧の念を抱かれしは疑も無く在京英國大使館及其他の方面よりの情報に因由せるものと思考す。英國政府が如

何なる情報を接受し居らるるやは勿論之を確かむべき方法なきも帝國外務大臣は其の知り得る限りに於て東亞の事態に付斯くの如き不穩なる見解を抱かるるか如き何等の事由も存在せざることを此の機會に言明するものなり。帝國外務大臣は是迄一再ならず在京英國大使に對し又は一般民衆に對しても三國條約の主要目的の一は現在戰爭に參入し居らざる國々の參戰を阻止し以て歐洲戰爭の範圍を局限し尙可及的速かに同戰爭の終熄を齎すことにある旨を説明し來れる次第にして帝國政府は現在其の政策の根幹を成す前記の如き明白なる目的を變更すへき何等の理由をも認めず、此點に關しては英國政府は安んじて可なり。

然れ共帝國外務大臣は率直に左の事實を開陳せざるを得ず、即ち英米兩國政府か其の想見する太平洋及南洋方面に於ける緊急事態に對應せんか爲の意圖を以て戰備を促進擴大せんとして種々劃策しつつある動きに對して危惧とは言はざるも或る程度の懸念を抱かざるを得ざるの一事なり。此等の動きに關する米國其の他の方面よりの新聞報道は日本國內に於ける懸念を益々増大せしめ、其の結果一部に於ては日本は前記諸地域に於ける最惡事態に對應する爲遲怠なく

措置すへしとの主張すら行はれ居る有様なり。不穩なる報道の行はれ居るに鑑み右の懸念は寧ろ當然なるへし。若し米國政府をして其活動を西半球内に局限せしめ慎重なる態度を以て日本國民に無用の不安を感じしむるか如き事を避けしむる樣説得し得るに於ては事態の緩和實に著しきものあるへし。

往年ジュネーヴに於て英國外務大臣と個人的親交を結ぶの光榮を有したるに鑑み且又此の際一般的に腹臆^{ハラカ}なき意見を交換するは日英兩國國民の相互理解に裨益すべきことを信し帝國外務大臣は更に其の見解を披瀝せんと欲す。

余の常に最も念願するは世界平和にあり、即ち一方支那事變を可及的速かに終熄せしめ他方歐洲戰爭の速かなる終焉を齎すことは本大臣の衷心より冀望する所なり。列強か再び圓卓を圍み相互間の問題を討議し且公正妥當の世界秩序を基礎とする恆久的平和樹立の大問題を檢討せむことは本大臣の常時衷心より祈念し居る所なり。尙此の點に關聯して帝國外務大臣か英國外務大臣に對し確言し度き點は即ち帝國の既定方針は協和と和解の精神を助長し以て大東亞の全地域に平和、惠澤及互助の新時代を招來するに在りて他

國民の運命を支配し或は之を抑制せんとするか如きは帝國の夢想たにせざる所なり。從來屢次聲明せるか如く帝國の信條は「無征服、無壓迫、無搾取」に在り、これ本大臣か帝國を中傷するを目的とする前記の如き偏見に基く報道を極力排せんとする所以なり。

本大臣は戰爭を遷延せしむる事は其の動機の如何を問はず何等の利益を齎すものに非ざることを確信す。戰爭の歸趨の如何を問はず將又何人か勝者たるへしとするも、世界就中歐洲の事態は現代文明の崩壞を來さんとする怖るへき混亂狀態を齎すか如き重大なる危險の要素を包藏し居れり。

斯くの如き破局の事態を豫見し機宜を得たる對策を講ずるか爲には高度の政治的手腕を要する處本大臣は斯る政治的手腕か今猶英帝國に缺如し居るものと失望し居らす。

最後に本大臣は帝國か迅速なる平和の克服に關し深甚なる關心を寄せ居る事實に鑑み帝國は營に大東亞に於てのみならず世界の何れの地方に於ても調停の勞を執り或は又平常狀態回復を目的とする一切の措置を講ずる爲の充分なる用意ある事を言明せんと欲す。

本大臣は英國外務大臣か平和を回復し現代文明を切迫せる

崩壊より救ふべき重大なる責務は實に懸つて諸大國の双肩に在りとの確信を頒つに躊躇せられざることを信す。斯る責任を遂行するの道は唯寛容なる精神を以て進んで他國の要求及主張に傾聴するか如き聰明にして且勇氣に富む政治的手腕にのみ求むべく、尙帝國の如何なる行動と雖も帝國が人類に負ふ處の責任感を以て常に之を行ふべきこと亦附言を要せざる所なり。



838

昭和16年2月18日

在英国重光大使より
松岡外務大臣宛(電報)

極東危機説に関する英国側宣伝の背景や効果
につき観測報告

ロンドン 2月18日後発
本省 2月19日後着

第一一八號

一、今回ノ英國ノ對日警報ハ固ヨリ主トシテ「ク」大使ノ報告ニ基キ英國政府ノ受ケシ其ノ他ノ情報之ヲ支持シタルニ起因シ(日本艦隊ハ佛印方面ニ集中シ南方攻撃ノ爲新編成ヲ整ヘツツアリ其ノ長官トシテ大角大將任命セラル

右ハ支那軍ノ破壊飛行機ヨリ得タル同大將ノ有セシ文書ヨリ證明セラレタリト眞シヤカニ郭泰祺ヨリ英國側ニ注キ込ミタリ)事態ヲ明瞭ニシ且之ニ備フル爲先ツ往電第七一號ノ通り「タイムス」ニ論説及特別論文ヲ掲載セシメ次テ「イ」外相ノ本使トノ會談トナリ夫ト共ニ英帝國全體ニ對シ萬一ノ場合ニ必要ナル覺悟ヲ促ス爲ノ新聞「キャンペーン」トナリ更ニ之ニ依リテ利害關係國タル米國及「タイ」佛印等ニ警報シテ英國ノ決意ヲ表示セント試ミタルモノナリ

二、右ノ目的ハ大體達セラレタルカ如キモ日本側ノ冷靜ナル態度ト右宣傳力餘リニ慌シカリシ爲英國側ノ態度如何ニモ輕卒ニシテ自信ナキカ如ク見エ而モ日本側ノ反感ヲ昂メ更ニ他國ノ之ニ乘スルモノアリ英國トシテハ非常ナル淺慮ト見ラレ決シテ成功ト言ヒ得ス

三、右宣傳ニ於テ各新聞ノ取扱振ヲ解剖スルニ大體ニ於テ右翼系新聞力煽動好戰的ノ態度ヲ示シタルハ注意ノ値アリ「タイムス」「テレグラフ」ハ素ヨリ政府ノ指導通りニ動キタルカ「デリーメール」ノ如キハ極メテ靜カナリ左翼紙中直接間接共產系ト見ラルルモノハ太平洋ニ對シ戰線

擴大ヲ主張シ又ハ之ヲ當然トスル前提ノ下ニ煽リタリ

四、本件ハ一九三七年西班牙戰爭ノ際佛國「モロッコ」總督「ノヂス」カ獨逸軍約六萬西班牙「モロッコ」ニ上陸セリトノ報告ヲ爲シ佛國ノ新聞ヲ中心トスル「プレスキヤンペーン」トナリ英國政府側ハ寧口自守論ヲ採リタル事例ニ酷似ス

米へ轉電セリ



839

昭和16年2月19日

大橋外務次官
在本邦クレイギー英國大使 會談

極東危機説をめぐる大橋次官とクレイギー大

使との意見交換について

南方問題ニ關スル大橋外務次官「クレイギー」

英大使會談録

(昭和十六年二月十九日 於次官タ邸)

「クレイギー」大使 實ハ過般ノ日本南進説ヲ自分ヨリ出シタルカ如ク日本ニ於テ喧傳セラレ居ル處自分ヨリ松岡大臣ノ議會ニ於ケル答辯及此ノ國ノ輿論ヲ隨時電報シ居ルコトハ事實ニシテ時々松岡大臣カ米國ノ對英武器援助

ヲ以テ獨ニ對スル攻撃ト解シ得ルヤモ知レスト述ヘラレタルハ我方ニ取リ「シヨツキング」ナルガ自分カ松岡大臣ト會見ノ際同大臣ハ之ヲ肯定スルト同時ニ併シナカラ國民ハ之ヲ「アクセプト」セサルヘシト述ヘラレタルニ依リ一應安心セル次第ナリ、併シ英國政府カ極東ノ危機ヲ恐レタルハ右ノ如キ自分ヨリノ電報ノミナラス各方面ヨリ入手セル情報ヲ綜合シテ判斷セル結果ナリ日本カ英國ノ敵ナル獨逸ト同盟ヲ結ビ而モ南進論カ、カクモ盛ニテハ英國政府カ敍上ノ結論ニ達スルモ異トスルニ足ラス次官 三國條約ノ規定ハ米國カ參戰スル場合ニ於テ始メテ發動スルモノニシテ其以外ニ於テハ日英ノ關係ハ從來ト何等異ナル處ナキニ拘ハラス英國カ日本ヲ以テ准敵國ト見做スハ我々ノ諒解シ得サル所ナリ、若シ日獨間ニ英國ヲ攻撃スル爲相互ニ援助スト言フカ如キ密約ニテモ存スレハ格別自分ノ知ル限りニ於テハ左様ノ密約ハ無ク、旁々英國トシテウロタヘル必要ナキニ非スヤ

「クレイギー」大使 松岡外相ハ英領馬來「ビルマ」モ大東亞共榮圈中ニ含マレ進ンテ印度ノ獨立運動ニ對シ同情ヲ有スルカ如キ答辯ヲセラレ一々之ヲ本國政府ニ報告シ

タル次第ナルカ英國トシテ斯様ノコトヲ默認スルコトヲ得ス

次官 大東亞共榮圈ノ根本理念ハ畢竟此ノ區域ニ於テ東洋古來ノ理想ヲ實現シ其ノ圈内ニ於テ平和ト繁榮ヲ齎ラサントスルニ在リ西洋ニ於テハ個人主義カ發達シタル爲、人種の二相反撥シテ幾千百ノ異種民族ノ對立トナリ多數小國家ノ對立ヲ激成シ古來民族戰若ハ國家戰ノ絶ユルコトナク右戰爭ハ武器及交通機關ノ發達ト共ニ大規模且慘虐ト成リツツアリ然ルニ東洋ニ於テハ例ヘハ日本ノ如キ蒙古人モ朝鮮人モ支那人モ「アイヌ」モ南洋土人モ古來ヨリ多數渡來シタルモ敍上ノ如キ對立觀念ナキ爲何時ノ間ニカ此ノ日本民族ヲ打出シ一民族一國家ノ形ヲ成シ居リ之ハ支那ニ於テモ同様ニシテ支那ト日本トノ間ニ於テモ昔ヨリ民族戰爭乃至國家戰爭ナルモノハ日清戰爭ヲ以テ嚆矢トナス處之モ或意味ニ於テ西洋思想ノ影響ヲ受ケタル結果ト云フヘク今回ノ日支事變モ蔣介石カ歐米ヨリ民族對立思想ヲ移入シ共產黨ノ組織宣傳機構ヲ眞似タル結果ナリ、依テ日本ノ大東亞圈建設ノ理想ハ此ノ區域ニ於テ西洋式民族對立意識ヲ清算シ東洋の四海同胞主義ヲ

實現セントスルニ在リ

「クレギー」大使 日本ノ上層部ニ於テハ右ノ如キ理想主義ヲ懷抱シ居ルヤモ知レサルモ一般大衆ハソウハ行カサルヘク旁々英領ヲ共榮圈ニ含メラルルコトハ眞平御免ニシテ又日本カ佛印及「タイ」ノ獨立ヲ危クスルカ如キ措置ヲ執ルニ於テハ新嘉坡ニ對スル赤信號ト解セサルヲ得ス

次官 先日松岡大臣ヨリモ述ヘラレタル通り我當局ハ目下排英運動ヲ極力取締リ居ル處斯ノ如キ反英感情ノ激化シタルハ一ニ英國カ香港乃至「ビルマルト」ヲ通シ蔣介石ヲ援助シ我カ國民ノ注意ヲ南方ニ引ツケタコト及英米ノ蔣援助ニ依リ支那事變ヲ永引カセツツアル結果南方ニ於テ物資ヲ獲得スル必要生シタル爲ニシテ其ノ責任ハ寧ろ英國側ニ在リ

英國ハ日本ノ政治的南進ヲ恐レ居ルカ如キモ其ノ本質ハ經濟的ニシテ先日モ蘭公使ニ話シタル通り經濟問題スラ満足ニ解決サルレハ政治問題ハ自スト解消スヘシ然ルニ現下英米ノ我國ニ對スル態度ヲ見ルニ軍事的及經濟的の我國ヲ包圍シ而モ其ノ包圍圈ヲ縮少セントスル傾向アル

處斯ノ如キ傾向ノ激化スレハ自衛上我方トシテ此ノ包圍ヲ突破セサルヲ得サルニ至ルヘシ今回ノ北「ボルネオ」ニ於ケル港灣ノ閉鎖ノ如キハ英米ノ敍上ノ如キ企圖ノ一表現ト見ラレ得ヘク又今迄殆ンド我國人ノ注意ヲ引カサリシ北「ボルネオ」ニ對シ同政府今回ノ斯ノ如キ不當措置ニ依リ却テ注意ヲ引クコトトナルヘク旁々速ニ本件不當措置ヲ撤回方盡力アリタシ

「クレイギー」大使 包圍網云々ハ「ヒットラー」ノ戰前ニ於テ述ヘタル處ニシテ危險ナル言葉ナルニ付左様ノ言葉ハ使用セラレサル様致度

經濟問題サヘ解決スレハ政治問題ハ自スト解決スヘシト言ハルルモ松岡外相ノ議會ニ於ケル答辯ニ依レハ日本ハ蘭印ヨリ多量ノ石油ヲ獲得スルニ成功シタリトノコトナラスヤ

北「ボルネオ」問題ハ何力故ニ斯ノ如キ措置ヲトリタルヤヲ調査ノ上同情的態度ヲ以テ解決ニ盡力スヘシ

次官 松岡外相ノ議會ニ於ケル答辯ハ國內ニ於ケル過般分子ヲナダメル爲ノ「ホーム、コンサンブション」ニ過ギス實際ハ從來ヨリ三十萬噸程度ノ増加ヲ見タルニ止マリ

極メテ不満足ナル現状ナルヲ以テ今尙其ノ増加方ニ付交渉中ナル次第ナリ

(終)

840

昭和16年2月19日

在米國野村大使より
松岡外務大臣宛(電報)

米國における対日感情の悪化と日本の南進に
對する懸念につき觀測報告

ワシントン 2月19日後發
本 省 2月20日後着

第九六號(極秘)

本使着任以來日猶短キモ見聞セシ所率直ニ報告ス

一、英米ノ結合愈々固ク米ハ對獨戰爭ニ於テ全ク英ト同一軌道ニ乘リツツアリ其ノ實績ヲ舉クル迄ニハ相當ノ時日ヲ要スルモ一般ノ趨勢前大戰ノ時ト同シク寧口其ノ熱度ノ一層高キヲ感ス

二、三國同盟以來當國朝野一般ニハ日本ヲ以テ準敵國ナリト爲ス意識漲リ居リ從テ一般ニハ獨ノ春期各方面攻勢ニ呼應シ日本ハ同時ニ南進ヲ斷行スヘシト期待シ之カ爲ニハ

先ツ以テ新嘉坡ニ向フヘク目下佛印「タイ」國工作ヲ以テ其ノ準備トナシ居ルモノト觀察シ居レリ

三、日本南進ニ對シテハ英國、濠洲、「ニユージーランド」

及蘭印之ニ當リ米國亦之ニ協力スヘシトノ論強シ

四、英米海軍ヲ協同使用スルニ當リ太平洋ニハ猶多クノ主力艦ヲ要シ大西洋ニハ猶多クノ小艦艇ヲ要スル現状ナルヲ

以テ必要ニ應シ太平洋ニ英ノ主力艦、大西洋ニ米ノ驅逐艦ヲ配置スヘキナリ此ノ説ニ基キ米ハ英ノ最新式主力艦

ノ協力ヲ得之ニ代フルニ驅逐艦ヲ以テ英ヲ援助セントスルノ論アリ之最モ注意ヲ要スル問題ナリ

五、一、二新聞中ニハ布哇ニ在ル米艦隊ニ西進ノ用意アリ等

ト眞シヤカニ報スルモノアル一方日本ノ南進ハ時ニ緩急アルモ既定ノ國策ナルヲ以テ米國ハ決シテ中立態度ニ止

マルヘキモノニアラサルヲ論シ英國敗退ノ場合アリトセ

ハ先以テ米艦隊ハ英ノ殘存艦隊ト共ニ太平洋ニ於テ日本

ニ當ルヘキヲ論スルモノアリ

陸、海大臣ニ御通報請フ

壽府ヘ轉電セリ

壽府ヨリ獨、伊、英、佛、蘇ヘ轉電アリタシ

滿、南大ヘ轉電アリタシ
紐育ヘ轉報セリ

~~~~~

841 昭和16年2月20日

在シドニー秋山総領事より  
松岡外務大臣宛(電報)

### 豪州の対日警戒感につき報告

第九五號

キャンベラ 2月20日午後  
本 省 2月20日夜着

「十九日「フアデン」首相ハ濠洲ハ不必要以上ノ警戒策ヲ採レリト非難セラレタルモ事實明カニ戰爭ハ急ニ擴大スヘク然モ濠洲カ濠洲附近ニテ現實ニ戰フ事態タラントスルヲ示シ居リ再ヒ茲ニ濠洲ハ最後迄然モ勝利ノ確信ヲ以テ戰ハントスル決意ヲ有スルモノナリト聲明セリ

二、二十日「ヘラルド」論説ハ日本カ凡ユル戰備ヲ收メツツアルニ拘ラス平和維持論又ハ平和ノ調停論ヲ唱フルカ如キハ晒フヘキ空言ニシテ三國同盟ヲ破棄セサル限り意味ナク濠洲ノ新嘉坡出兵ニ依リテモ示サルルカ如ク兵力ニ依リテ日本ノ脅威ニ對スルヨリ他ナシ米國カ Palmyra,

Johnson, Wake, Kingman, Reef, Roose, Tutuila 及「グアム」諸島ニ總テノ警備ヲ爲セルト同様「ヒットラー」ノ脅威ニ屈セサル態度ノミ現在ノ暗雲ヲ排除シ得ヘシト論シ又「テレグラフ」モ今ヤ日本ノ平和論ハ「ヒットラー」ノ戰術ヲ眞似タルモノニシテ三國同盟ハ儼然トシテ事態ノ背後ニ在リ新嘉坡ノ難攻不落ノ準備米國太平洋艦隊ノ配備蘭印及英國ノ落着ケル準備アルカ爲日本ハ毎日無意味ノ謹慎ノ聲明ニ依リ自信ナキ動搖スル態度及匿シ得サル不安ヲ示シ居ルモ今ヤ斯ル空ナル宣傳又ハ聲明ノ時代ニ非スト論評ス

842

昭和16年2月20日

在独国大島大使より  
松岡外務大臣宛(電報)

### 米國に日独離間策の形跡なき旨報告

ベルリン 2月20日後発

本省 2月21日前着

第一三五號(機密)

貴電合第三一一號ニ關シ

十九日加瀬米參事官及一等書記官ト四方山話ノ機會ニ現下

ノ日米關係ニ觸レ色々ナ角度ヨリ夫レトナク尋ネ見タルニ兩國關係ハ甚ダ緊張シ居ルモ眞逆戰爭ニハナラサルヘシトカ日米双方ノ輿論共少シ「ヒステリー」氣味ナリトカ最近ノ野村大使大統領間ノ應酬ハ和ヤカナモノニテ注意ニ値ストカ述フル程度ニテ夫レモ當方ヨリ聞ケハ個人的感想トシテ話スト云フ位ニシテ別ニ從來ノ態度ニ變リナク少クトモ當地米大使館ノ關スル限り國務省筋ヨリ統一的ニ日獨離間乃至我方ニ於ケル親英米勢力回復ノ謀略的指令出テ居ル形跡ナカリシ趣ナリ

843

昭和16年2月20日

在英国重光大使より  
松岡外務大臣宛(電報)

### 日本の欧州大戦調停意向に対する英国論調報告

ロンドン 2月20日後発

本省 2月21日前着

第一二四號

新聞報(十九日、二十日)

「日本ノ媾和斡旋意嚮ニ關シ十九日ノ「テレグラフ」「エキスプレス」等ハ獨逸ノ宣傳戰ノ一翼ナリト述ヘタルカ



二十日ノ「タイムス」「テレグラフ」(論説特情)其ノ他各紙ハ一齊ニ英國ハ單ナル言葉ニハ信賴セス日本カ眞實平和回復ヲ欲スルナラハ先ツ支那其ノ他ニ於ケル侵略的行爲ヲ精算シテ其ノ誠意ヲ實證スヘシト述フ

二、新嘉坡ニ於ケル英空軍及濠洲軍ノ増強ヲ大々的二報シ日本ノ脅威ニ對スル應答ナリト記ス

三、野村大使カ日本ノ南進ハ平和的ナルモ或種原料ノ獲得ハ死活ノ問題ナルヲ以テ武力ニ訴フルコトナシトハ確言出來スト述ヘタル旨各紙重要欄ニ掲ケラレ注目ヲ惹キタリ

四、「エチオピア」Gorja 地方ニ於ケル土民軍ハ優勢ニ進撃シ重要空陸基地タル Darjia ハ占領セラレタリト報ス(以上二十日)

五、土勃協定ニ關シ「タイムス」外交記者ハ土耳其ハ既ニ獨逸軍邀撃ノ爲「ブルガリヤ」ニ進撃スル代リニ「Thrace」ノ守備ヲ固ムルニ決シ居ルカ本協定成立遅延ノ爲「バルカン」諸國間ニ不侵略乃至共同防衛ノ協定ヲ成立セシメ得ル好機ヲ逸シタルハ遺憾ナリト報ス

六、十八日上院ニ於ケル食糧問題ノ討議ニ際シ「ウールトン」食糧大臣ハ地中海作戦繼續中ハ肉類ノ現在割當量ノ

増加ハ不可能ニシテ生活ノ簡易化ハ最モ緊要ナリト述ヘタリ

七、二月九日ニ終ル一週間内ノ商船被害ハ英船九隻一九、三六〇噸、同盟國船四隻一〇、四四二噸、計十三隻二九、八〇六噸ト公表セラル(以上十九日)



844

昭和16年2月20日

在米国野村大使より  
松岡外務大臣宛(電報)

# 日本の南進説に対する米国世論の動向報告

ワシントン 2月20日後発

本省 2月21日後着

第一〇〇號

日本ノ南進切迫説ト之ヲ仰々シク傳ヘタル英國側ヨリノ反響ハ數日來當國輿論ノ注目ヲ遽カニ日本ニ集中セル形ニテ各方面ノ言説ハ獨逸ト共同動作ニ出テントスル日本ニ對スル反感ト輕蔑ヲ遠慮會釋ナク表明シ居レリト云フモ過言ニ非ス一方對英援助法案ハ上院ニテ活潑ニ議論セラレ居リ歐洲參戰敢テ意ニ介セサル旨ヲ公言スル議員一二止マラス



下院ハ十九日「グワム」防備強化ヲ含ム海軍擴張「ビンソン」法案ヲ始ト全會一致通過シタルカ討論ノ途中對日強硬言論繰返し行ハレ「アンダーソン」議員ノ如キハ全面的禁輸ヲ勸告セリ尙米國陸軍ハ比律賓ヨリ「クラーレンス、ジヤクソン」少佐「フランシス、プリング」少佐及「アレキサンダー、キャンベル」中佐ヲ「オブザーバー」トシテ夫々盤谷、新嘉坡及「バタヴィア」ニ派遣スヘキ旨報セラル各新聞ノ論調モ我南進ニ對シ一齊ニ強硬ヲ極メ今や米國人ハ英國人ト同一ノ心ヲ以テ南方問題ヲ考ヘ居ル觀アリ此ノ點英國ハ「バルカン」ニ於ケル外交的不首尾ヲ西南亞細亞ニ於テ偶然穴埋メシタルカ如キ形ナリ

英、獨へ轉電セリ

845

昭和16年2月21日  
松岡外務大臣より  
在英國重光大使宛（電報）

タイ国境方面への英國軍増強やシンガポールでの機雷敷設などがわが方人心を刺激している旨クレイギー大使へ注意喚起について

本省 2月21日後9時0分発

## 第五七號

二十日「クレイギー」大使ノ來訪ヲ求メ本大臣ヨリ過般ノ華府ニ於ケル極東防備會談ニ關聯スル「ハリファックス」大使及蘭國公使ノ聲明竝ニ新嘉坡入口ノ機雷敷設、馬來半島泰國々境英軍集中等ニ關スル各種報道ニ言及シ之等ハ個々ノ情報トシテ觀ルトキハ或ハ些シタル害ナキ様ニ見受ケラルルヤモ知レサルモ其ノ集積シタル結果ハ現下ノ機微ナル國際情勢上當然我國ノ人心ヲ刺戟シ影響面白カラザルモノアリ此ノ點ニ付英國政府ノ深甚ナル注意ヲ喚起スル旨申入レタル處同大使ハ之ヲ諒承セリ依テ本大臣ハ英國側ガ泰國々境兵力増強（ク）ハ最近二ヶ月間増強ノ事實ナシト言（ヘリ）乃至濠洲印度等ヨリ新嘉坡方面ニ對スル部隊増遣ヲ此際中止シ又ハ更ニ進デ兵力ヲ減少スルコト兩國々交上望マシ泰國々境増兵ノ如キモ當初盤谷ヨリ英軍泰領ニ侵入セリトノ報道接到シタル程ニテ又今以テ英側ハ泰國ニ威壓ヲ加ヘテ我調停ノ妨害ヲ企圖シ居ルヤノ風説（ク）ハ之ヲ否定セリ）モ行ハレ居ル狀態ナリ將又南洋方面ノ防備擴充例ハバ新嘉坡ノ機雷敷設ニシテモ何故國際關係混亂紛糾セル此ノ際特ニ之ヲ實施スル必要アリヤ實ハ諒解ニ苦シム所

ナリ現ニ本件ノ如キハ我新聞ニモ大々の二報道セラレ一般ニ甚シク疑惑ヲ醸シ居ル處スルコトニハ充分國際環境ヲ考慮スルヲ要シ旁々英國側ノ措置ハ日英衝突ヲ誘致(invite)スル危険アリ賢明ト云ヒ難シ英國政府ニ於テハ之ヲ回避スル爲メ折角自制センコトヲ要望ストノ趣旨ヲ強ク申入レ置キタリ

尙十九日次官「ク」大使ト會談ノ際「ク」ハ日本カ泰・佛印ヲ脅威スルコトハ新嘉坡ニ對スル赤信號ト認ムヘク又英領ヲ大東亞共榮圈ニ包含セサル様サレ度シト述ヘタルニ付次官ハ英國ハ米、濠、蘭等ト合作シ經濟的軍事的ニ對日包圍ヲ策シ且此ノ包圍線ヲ漸次縮少セントシ居ル様認メラルル處斯クテハ日本ハ遂ニ爆發セサルヲ得サルヘシト答ヘ置キタル趣ナリ  
米ヘ轉電セリ

846

昭和16年2月21日

在伊国堀切大使より  
松岡外務大臣宛(電報)

日本の欧州大戦調停意向に対する伊国世論動  
向に鑑み右報道の真相回示方請訓

## 第一〇五號

ローマ 2月21日後発  
本省 2月22日後着

十八日ニ日本ノ歐洲戰停戰ニ關スル石井部長談話ハ各方面ノ注意ヲ惹キ伊國宣傳省ハ右ハ日本ノ平和的意圖ヲ表現シタルモノニシテ具體的意圖ヲ表明セルモノニアラス佛伊<sup>(マ)</sup>ハ最後ノ勝利ヲ確信シテ戰ヒ居レル趣旨ヲ以テ「プレス」方面ヲ指導シツツアルカ如キモ當國ニ於テハ右ヲ以テ日本ハ英米ノ壓迫ノ爲自信ヲ失ヒ且樞軸側終局ノ勝利ニ不安ヲ生シタル結果右ノ如キ弱音ヲ吐キ始メタルモノトシテ英米側ノ宣傳ニ利用セラルルヲ遺憾トスルモノ又ハ時機ヲ得ストノ感想ヲ懷クモノ少シトセス

右ニ關シ二十一日當地「ラヂオ」ハ日本ノ右行動ニ付英下院ニ於テ質問アリ「バトラ」カ本件ハ外務省ニテ考慮中ナル旨述ヘタル由放送シ各方面ニ種々ノ誤解ヲ生シ居レルニ付テハ本談話ノ真相「テキスト」ト合セ本使心得迄ニ至急御回電請フ  
英ヘ轉電セリ

昭和16年2月24日

## 松岡外相議會答弁要旨「對英回答覺書ノ趣旨

## 闡明」

對英回答覺書ノ趣旨闡明(二月二十四日松岡外相答辯)

松岡外相ハ二月二十四日ノ衆議院決算委員會ニ於テ福田關次郎氏ノ質問ニ對シ左ノ如ク答ヘ、泰・佛印紛爭調停ニ關スル我が對英回答覺書ニツキ率直明快ニソノ間ノ事情ヲ説明スルト共ニ、外相ガ抱懷スル世界平和確立ノ所信ヲ披瀝シタ。

答辯要旨 私ハ多忙デ議會ニ餘リ出席出來ズ議會デ言明スル機會ヲ得ナカツタノデ已ムヲ得ズ先日新聞記者諸君ノ質問ニ答ヘタガ、ソレハ各新聞ニ出テキル。アレデ事態ハ明ラカニナツタト思フガコノ機會ニ繰返シテ言ハウ。ソレハ第一ニ私ノ親展書デハナイ。私ハ何カラ「イーデン」外相ニ言ツタノデハナイ。實ハ覺書デアル。ガ、ソノ覺書ノ内容ノ一部ヲ情報局デ話ヲシタ際ニ多少ソコニ誤解ガ起ツタラシイ。ソレハ實ハ「イーデン」外相ガ重光大使ノ來訪ヲ求メテ、確カ私ノ記憶デハ七日デアツタト思フ。而シテ南

方問題ニツイテ英國外務大臣ノ所見ヲ述ベ、タマタマ東京デ行ハレツツアル佛印、泰紛爭調停問題ニモ言及シタ。ソノ會見ノ模様ハ重光大使カラ參ツタノデ、私ハ、「イーデン」外相ハ「ジエネバ」デ懇意ニ願ツテキタノデ、顔モ見タコトモナイ外相ナラ恐ラク私ノ申送ツタコトモ三分ノ一デ返事ヲスルノダガ懇意ナ關係デアリ、コノ機會ニナホ一般ノ世界平和ニ關シテ自分ガ年來持ツテキル所ノ考ヘヲ參考ニ供スルコトモ必ズシモ無益デハアルマイト考ヘタ。私ハソレヲ附加ヘテ書キ上ゲタモノガ一ツノ覺書トナツテ、云ハバ「イーデン」外相ノ重光大使ニ述ベタコトニ對スル回答トナツタノデアル。ソノ回答ノツイデニ私ノ年來ノ平和論ヲ附<sup>(ケ)</sup>フ加ヘタ。調停云々ハ「イーデン」君ガ東京ニ於ケル調停ニ言及サレタカラ私がソノ調停ニツイテ御答ヘシタ。ソレ以外ノ調停ナドト言フ問題ハアリ得ナイ筈デアル。然シ何處ニ誤解ガ生ジタカトイフト、全文ヲ公表シタ方ガヨイト思フノデアルガ外交文書ハ内容ヲ何モカクス必要ナイコトデモ祕密ニ交換サレタモノハ相手方ノ同意ヲ得ナイト公表出來ヌモノデアル。ソレデ私ハコレニツイテ御話シガ出來ナカツタノデアルガ。

「バドラー」次官が議會ノ質問ニ答ヘテ或部分ヲ話サレタカラ、ソコデ私モコノ部分ニツイテ言明シテモ不徳義デナイト思ヒ、過般新聞記者諸君ノ質問ニアノ程度答ヘテオイトノデアル。タダ以下ノ點ガ歐洲戰爭ノ調停問題ト解セラレルノデハナイカ。餘程ノ想像力ヲ廻ラシタラ少シハアルノデハナイカトモ思ヘル。佛印泰ノ調停問題ニ先方ガ言及サレタカラ、私ハコレニツイテ所見ヲ述ベタ。ソノ一節ノ中ニ斯ウイフコトガ加ヘテアル。獨リ大東亞圈内デ平和ヲ顧念シテ平和恢復ノタメニ調停スルトカ、マタ常態ニ回復スル爲ノ他ノ處置ヲトルダケデハナイ。日本ハ世界ノ何處デモサウイフ役割ガ出來ルナラ結構ダト思フ。ヒトリ泰ト佛印ダケヲ何カ意味アリゲニイフモノモアルガ別ニソシナ意味デハナイ、トイフ意味デツケ加ヘタ極ク簡單ナモノデアル。ソレカラ次ニ私ノ持論デアル平和論ヲ述ベタノデ或ハ獨逸カラ「インスパイヤー」サレソコデ廻リ遠クサグリヲ入レタノデハナイカト取り得ルノデアルケレド、「イーデン」外相ハ斷ジテサウハ取ラス。トイフノハ、コレハ「イーデン」外相ノ言ツタコトニ對シテ私ガ答ヘタコトデアルカラダ。然シ私ハ念ノタメニ東京ニ在ル英國大使ガ來訪シタ時

ニソノ寫シヲ渡シテコノ私ノ平和論ハ持論デアルト云ツタ。同大使ハ同ジ議論ヲ二年餘リ聽イタトソノ時言ツテキタガ「コレハ何ラ「ドイツ」ト關係ナイコトデアルカラシテソノ點ニツイテ誤解ノナイ様ニ」ト言ツタラ「ソシナ誤解ハアルマイガ、念ノタメ電報ヲ打ツテヤキマセウ」ト言ツテ電報ヲ打ツテキル。シカモコレハ私ノ覺書ガ「バドラー」次官ノ手ニ渡ル前ニ行ツテキル筈デアル。ソレガタマタ「イーデン」外相ガ不住ニナツタキタノデ直グ手渡シスルコトガ出來ナカツタトイフヤウナ行違ヒデモソノ間ニアツテ、何ヤカヤデチヨツト誤解ガアツタヤウニ思フガ、ソレハ勿論私ガ今申シタヤウナ經緯デ明カニナツテキルト私ハ信ジテキル。

~~~~~

848

昭和16年2月24日

在英國重光大使より
松岡外務大臣宛(電報)

極東危機説をめぐる松岡外相對英覺書への

チャーチル英國首相回答書簡

付記 昭和十六年二月二十四日付

右書簡和訳文

ロンドン 2月24日午後
本 省 2月25日夜着

第一三六號

⁽¹⁾ Note from Japanese Minister for Foreign Affairs containing message to his Britannic Majesty's Secretary of State for Foreign Affairs has been laid before Prime Minister.

Prime Minister is gratified to observe that Monsieur Matsuoka sees no reason to apprehend any untoward developments in East Asia, and notes with satisfaction his assurance about peaceful intentions of Japanese Government.

Since Monsieur Matsuoka, for his part, makes reference to "movements of British and American Governments in their attempt to expedite and enlarge warlike preparations", Prime Minister would allow himself to offer certain observations which he hopes may remove any misunderstanding of position of H. M.'s Government.

There is no question of H. M.'s Government making

any attack upon or committing any act of aggression against Japan; and Prime Minister is sure that this also represent intentions of United States, though of course he cannot claim to speak for them. All preparations which are being made in Oriental Regions by Great Britain and United States are of a purely defensive character. Incidentally, Prime Minister would wish to assure Monsieur Matsuoka that concern which Mr. Eden expressed to Japanese Ambassador was not based exclusively on reports from H. M.'s Ambassador in Tokyo, but on the course of events in Far East and on a study of the speeches of Japanese Minister Foreign Affairs himself.

⁽²⁾ Turning now to the war in progress in Europe between Great Britain and Germany it will be within Monsieur Matsuoka's recollection that, before outbreak of war, H.M.'s Government made every offer, by concession and reasonable dealing, to avert hostilities. That is recognised throughout world, and indeed the Government of the day in this country was severely criticised for having

travelled too far along this road. Their efforts were unavailing, and German Government, by attacking Poland after so many breaches of faith and of treaties, chose arbitrament of war. H.M.'s Government, having thus been forced to enter upon this grievous quarrel, have no thought but to carry it to a victorious conclusion. Naturally it takes some time for the peaceful communities which compose British Empire to overtake military preparations of countries which have long been exulting in their martial might, and adapting their industries to war production. But even now H.M.'s Government feel well assured of their ability to maintain themselves against all comers, and they have every reason to hope that within a few months they will, with rapidly increasing supply of materials which is coming from United States, be overwhelmingly strong.

Monsieur Matsuoka makes allusion to help which this country receiving from United States of America. Prime Minister would observe that that help is being given for very reason that battle which this country is waging is

for overthrow of system of lawlessness and violence abroad and cold, cruel tyranny at home which constitutes German Nazism regime.

⁽⁹⁾ It is this system that people of British Empire, with sympathy and support of whole English-speaking world, are resolved to extirpate from continent of Europe. H. M. government have no designs upon integrity of independence of any other country, and they seek no advantage for themselves except satisfaction of having rid the earth of a hateful terror and of restoring freedom to the many insulted and enslaved nations of European continent. This they would regard as greatest honour that could reward them, and the crowning episode in what, for western world, is a long continuity of history.

Monsieur Matsuoka, with loftiest motives, has hinted at his readiness to act as the mediator between the belligerents. Prime Minister is sure that, in light of what he has said and upon further reflection, Monsieur Matsuoka will understand that in a cause of this kind, not in any way

concerned with territory, trade or material gains, but affecting whole future of humanity, there can be no question of compromise or parley.

It would be a matter of profoundest regret to H. M.'s Government if by any circumstances Japan and this country were to become embroiled, and this not only because of their recollection of the years during which two countries were happily united in alliance, but also because such a melancholy event would both spread and prolong the War without however in opinion of H. M.'s Government altering its conclusion.

Foreign office. W. I.
24th February. 1941

(付記)

二月二十四日附「チャーチル」首相發

松岡大臣宛書翰譯

日本國外務大臣ヨリ英國外務大臣ニ宛テタル「メッセー
ジ」ヲ包含セル「ノート」ハ總理大臣ニ提示セラレタリ。

總理大臣ハ松岡氏カ極東ニ於テ何等面倒ナル事態ノ發展ヲ
危惧スル理由ヲ認メラレサルヲ知り満足スルト共ニ日本國
政府ノ平和的意圖ニ關スル同氏ノ保障ヲ満足ヲ以テ「ノー
ト」スルモノナリ。

松岡氏ニ於テ英國及米國政府ノ戰爭準備ノ促進及擴大ヲ試
ミントスル動キニ言及セラレタルヲ以テ總理大臣ハ若干ノ
所見ヲ述ヘ以テ英國政府ノ立場ニ關スル誤解ヲ除カンコト
ヲ希望スルモノナリ。

英國政府カ日本ニ對シ攻撃ヲ加ヘ又ハ侵略行爲ヲ爲スガ如
キコトハ全然問題トナラス尙總理大臣ハ合衆國ニ代リ述フ
ルコトヲ得サルコト勿論ナルモ右ハ又同國ノ意向ヲモ代表
スルモノナルコトヲ信スルモノナリ。東洋方面ニ於テ英國
及合衆國ニ依リ爲サレツツアル準備ハ凡テ純然タル防禦的
性質ノモノナリ。又總理大臣ハ松岡氏ニ對シ「イーデン」
氏カ日本國大使ニ表明セル憂慮ハ在東京英國大使ヨリノ報
告ニノミ基キタルモノニ非スシテ極東ニ於ケル事態ノ進展
竝ニ日本國外務大臣自身ノ演說ノ檢討ニ基キタルモノナル
コトヲ確言セント欲スルモノナリ。

次ニ歐洲ニ於テ進行中ノ英獨間戰爭ニ移ルニ、戰爭勃發前

英國政府力敵對行爲ヲ避クル爲讓歩竝ニ合理的の驅引ニ依リ總ユル申出ヲ爲シタルコトハ松岡氏ノ想起セラルル所ナルヘシ。右ハ世界ヲ通シテ認メラレ居ル所ニシテ又實ニ當時ノ當國政府ハ餘リ此ノ方面ニ深入リシ過キタリトテ嚴シキ非難ヲ蒙リタル次第ナリ。右努力ハ無効ニ歸シ獨逸政府ハ屢次ノ背信及條約違反ノ後波蘭ヲ攻撃スルコトニ依リ戰爭ノ審判ヲ選ヒタリ。斯クノ如クシテ此ノ悲シムヘキ爭鬭ニ入ルヲ強制セラレタル英國政府ハ右爭鬭ヲ勝利ニ終ラシムル以外餘念ナシ。英帝國ヲ構成スル平和的の社會力長年其ノ軍事の威力ヲ誇リ且其ノ産業ヲ戰時生産ニ適合セシメ來リタル諸國ノ軍事の準備ニ追ヒツク爲ニ當然若干ノ歲月ヲ要ス、然シ乍ラ現在ト雖モ英國政府ハ凡ユル來襲者ニ對シ自己ヲ保持スルノ能力ニ付充分確信ヲ有シ且二三個月以內ニ米國ヨリ來ル急速ニ増加シツツアル資材ノ供給ニ依リ壓倒的の二強力トナルヘキコトヲ希望スル充分ノ理由ヲ有スルモノナリ。

松岡氏ハ當國カ北米合衆國ヨリ受ケツツアル援助ニ言及セラレタリ。總理大臣ハ右援助ハ當國ノ行ヒ居ル戰鬭カ獨逸「ナチ・レヂーム」ヲ構成スル國外ニ於ケル無法ト暴力、

國內ニ於ケル冷酷殘忍ナル虐政ノ組織顛覆ノ爲ナリトノ理由ニ依リ與ヘラレツツアルモノナリト言ハント欲ス。

英帝國々民カ全英語使用世界ノ同情ト支持ニ依リ歐洲大陸ヨリ根絶セント決意シ居ルハ實ニ右組織ナリ。英國政府ハ他國ノ獨立保全ニ對シ何等ノ企圖ヲ有セス、又地上ヨリ憎ムヘキ恐怖ヲ除去シ且歐洲大陸ニ於テ侮辱ヲ蒙リ奴隸化セラレタル多數ノ諸國ニ自由ヲ回復スルノ満足以外自國自身ノ爲ニ何等ノ利益ヲ求ムルモノニ非ス、英國政府ハ右ヲ以テ自己ニ報ユル最大ノ名譽ニシテ、且西部世界ノ歴史ノ長キ連續中ニ於ケル無上ノ^(輝カ)搜話ナリト看做スヘシ。

松岡氏ハ至極高遠ナル動機ニ基キ交戰國間ノ調停者タルノ用意アル旨ヲ暗示セラレタリ、首相ハ松岡氏ニ於テ右言明ニ照シ且又熟考ノ上、領土、貿易若クハ物資の利得ト何等關係ヲ有セサルニ人類ノ全將來ニ影響ヲ及スヘキ此ノ種ノ目的ニ在リテハ妥協乃至商議ガ問題タリ得サルコトヲ了解セラルヘシト信ス。

若シ何等ノ狀況ニ依リ日本ト當國トカ戰爭ニ捲込マルトセハ英國政府ノ最モ深く遺憾トスル所ナルヘク右ハ單ニ英國政府カ兩國カ幸福ニ同盟ニ依リ結合セラレ居リタル時代ヲ

回顧スルカ故ノミナラス、又斯カル憂鬱ナル事件ハ英國政府ノ見解ニ於テハ戰爭ノ結末ヲ變更スルモノニ非サルモ戰爭ヲ擴大且延長スルカ故ナリ。

~~~~~

849 昭和16年2月25日 松岡外務大臣より  
在伊国堀切大使宛(電報)

日本の欧州大戦調停意向に関する外国報道に  
つき真相回訓

本省 2月25日後6時発

第四七號(極秘)

貴電第一〇五號ニ關シ

七日「イーデン」外相ハ重光大使ニ對シ帝國ノ對南方武力進出力目前ニ逼レルヤノ誤解及危惧ニ基ク警告の申入ヲ爲シタルヲ以テ十五日右危惧ノ何等根據ナキ旨竝ニ世界ノ各方面ニ於テ成ルヘク速ニ平和ノ回復スルコト望マシク右ノ爲ニハ本大臣トシテハ調停其ノ他一切ノ方法ヲ執ルノ用意サヘモアル旨回答シ我方ノ平和的意圖ヲ表明セル次第ナルカ十八日石井部長ハ外人記者團ニ對シ右我方回答ノ趣旨ニ依リ外人記者團ト應酬セル處調停云々ノ部分カ強調セラレ

「キヤリー」セラレタル爲諸方面ニ誤解ヲ生シタルヤニ認メラレタルニ依リ二十一日日本大臣ハ新聞記者會見ニ於テ「イーデン」外相トハ相識ノ間柄ナルニ付平素ヨリ抱懷セル世界平和ニ對スル持論ヲ附記シ參考ニ供シタル迄ニテ歐洲戰爭ニ關スル調停ト解スヘキ何物モナク「イ」外相モ其點誤解アルヘシトハ想像シ得ス」ト述ヘ又二十四日衆議院ニ於テ議員ノ質問ニ對シ本大臣及大橋次官ヨリ右趣旨ヲ以テ答弁セリ

尙在京獨、伊大使ニ對シテハ本件ニ付詳細説明濟ナリ獨、佛ニ轉電アリタシ

~~~~~

850 昭和16年2月25日 在シドニー秋山総領事より
松岡外務大臣宛(電報)

極東危機に対する共同防衛につき米豪両国が
合意したとの報道報告

シドニー 2月25日後発
本省 2月26日前着

第一〇四號

二十三日華府發 Argus 特報ハ太平洋ニ關スル米濠協定ト

題シ兩國間ニハ既ニ完全ナル諒解嚴存シ外交竝ニ經濟關係ハ曾テ無キ緊密ナル關係ニ在リ極東ノ危機ニ對シテハ何レノ場合ニ對スル準備モ行ハレ居リ米濠會談ノ内容ハ嚴秘ニ附サレ居ルモ共同防衛ニ關シ完全ナル計畫成レルコト確實ニシテ英濠カ新嘉坡ニ兵力ヲ集中スルニ對シ米國ハ比島ヲ強化スヘク既ニ多數ノ艦艇カ西方ニ派遣セラレ居リ馬尼刺ニ最モ強力ナル潜水艦部隊ヲ集結セルハ米國モ發表セル所ナリト報ス

851

昭和16年2月26日

松岡外務大臣より
在伊國堀切大使宛(電報)

日本の欧州大戰調停意向に関する報道につき
伊國大使へ真相説明について

本省 2月26日後8時発

第四九號(外機密)

二十六日在京伊國大使「ムソリニ」首相ノ訓令ニ依ル趣ヲ以テ本大臣ヲ來訪シ歐洲戰爭ニ關スル所謂調停問題(貴電第一〇五號)ニ付言及シ「ム」ニ於テ右ニ關シ日獨伊三國間ニ完全ナル諒解ヲ缺クコトヲ懸念シ居ルヤノ口吻ヲ漏ラ

シタルヲ以テ本大臣ヨリ改メテ本件經緯ヲ説明スルト共ニ調停云々ニ關シテハ當時「イーデン」外相ニ對シ右カ獨伊トハ無關係ナル旨ヲ申入レアリ英國側ニ誤解アリトセバ英政府ガ餘程如何カシ居ルモノト云フベク或ハ故意ニ宣傳ニ惡用シ居ルモノナルヤニモ想像シ得ザルニ非ズ帝國ハ現ニ三國同盟ニ忠實ニシテ又將來モ同様ナルベク此ノ點「ム」首相ニ傳達アリ度シ又若シ「チアチル」ノ回答ニ我方ガ歐洲戰爭調停ヲ「ヒント」セルヤノ記述ニテモアラルバ其際ハ右ノ如キ事實ナキ旨ヲ明ニシ且帝國ノ三國同盟ニ對スル立場ヲ一層強調スル考ナリト述べ置キタリ
獨、英ニ轉電アリタシ

852

昭和16年2月26日

松岡外務大臣より
在英國重光大使宛(電報)

英國政府が松岡外相對英覺書やチャーチル首相回答書簡を公表する際はわが方へ事前連絡
あるよう申入れ方訓令

本省 2月26日後8時30分発

第六一號(至急)

新聞報ニ依レハ英國政府ハ本大臣ノ「イーデン」外相ニ對スル「メモランダム」及「チアチル」首相ノ回答ヲ公表スル意嚮ナルヤノ處貴大使ハ英國側ニ對シ本件文書ノ公表ハ事前ニ當方ト聯絡サレタキコト及ヒ其際ハ七日「イ」外相ノ貴大使ニ對スル申入レヲモ併セテ發表スルコトニ取計ヒタキ旨爲念申入レ置キアリタシ

尙當方ニ於テハ以上ノ條件ニテ公表ニ異議ナシ右ハ在京英大使ニモ申入濟

853 昭和16年2月26日

在独国外務大使より
松岡外務大臣宛(電報)

日本の欧州大戦調停意向に関する報道は英国側の日独離間策であると独国外相へ説明について

ベルリン 2月26日後発
本 省 2月27日後着

第一八四號
伊發閣下宛電報第一〇五號ニ關シ
本件ニ關シテハ當地新聞ニ於テモ連日問題トセラレ居ルモ
論調ハ概ネ閣下カ世界平和ニ關スル一般的見解ヲ述ヘタル

ニ過サルヲ英國側ニ於テ日獨離間ノ爲利用シアルモノナリトノ筋ニテ指導セラレ居ル處二十三日「リ」モ之ニ言及セルニ付本使ヨリ真相相知セサルモ例ニ依リ英側ノ事實ヲ歪曲セル宣傳ナルヘキ旨述ヘタルニ「リ」ハ直ニ首肯セリ尙其ノ際「リ」ヨリ野村大使ノ米國記者團ニ對スル「インタビュー」ニ關シ接受シタル電報ニ依レハ同大使ハ米國開戦ノ際日本カ直ニ參戦スルヤ否ヤハ三國條約解釋(「アウスレーグング」)ノ問題ナリト答ヘラレタル趣ナル處日本側ノ眞意如何ト訊シタルニ依リ閣下ノ日米協會ニ於テ演說竝ニ本使赴任前閣下トノ懇談等ノ模様ヲ説明シ右モ亦米記者日獨離間ノ爲ニセル宣傳ト信スル旨答ヘ置ケリ

伊へ轉電セリ

854 昭和16年2月26日

在英国重光大使より
松岡外務大臣宛(電報)

英国外務次官が松岡外相對英覚書とチャーチル首相回答書簡を議会で説明について

ロンドン 2月26日後発
本 省 2月27日後着

第一三九號

新聞報(二十六日)

一、議會ニ於テ「バ」次官ハ松岡外相ノ仲裁ノ一般の申出ニ言及シ之ニ關聯シテ「チャーチル」首相カ英國ノ戰爭決意ヲ表示シ何等仲裁又ハ交渉若クハ妥協ノ餘地ナキヲ明カニセルコトヲ説明セルカ

二、之ヲ機會ニ英國ノ戰爭遂行ノ決意ハ各方面ニ強ク表示セラレ且「ルーズベルト」大統領カ今日ハ平和ヲ説ク時ニ非ス先ツ勝利ヲ得サルヘカラスト聲明セルコトヲ報セラル

三、「タイムス」(二十六日)社説ハ「極東ノ冒險」ト題シ「チャーチル」重光會見ニ於テ將來ニ對スル友誼の希望モ交換セラレ日英間ニ生シタル誤解一掃ニ貢獻セリト認メラレタルハ喜フヘキコトナルカ之ト同時ニ行ハレタル松岡外相ノ議會ニ於ケル六億乃至八億ノ人々ヲ收容シ得ル「オセアニア」ヲ白人ハ亞細亞人ノ爲ニ讓渡スヘキモノナリトノ演説ハ日本ノ餘リノ傲慢ナル「レーベンスラウム」ノ思想トシテ注目セラレタリ是迄ノ米英其ノ他ノ所爲ハ松岡外相自身ノ演説ニ基因スル次第ナリ更ニ佛印

及「タイ」ノ紛爭仲裁ニ關聯スル佛印ノ不安ハ重大問題ニシテ又今後日本ノ獨逸及蘇聯トノ關係ハ極東問題ニ一層ノ紛糾ヲ齎スヘク將來ハ不安多キヲ以テ英國自治領ト共ニ太平洋方面ノ正當ノ防備ヲ進ムルコトヲ緩ンシ得ス米國大統領モ之ト同意見ナルハ疑ヲ容スト論シタリ(特情參照)尙上海電ハ松岡外相獨伊訪問ヲ報シ多大ノ注意ヲ喚起ス
米ハ轉電セリ

855

昭和16年2月27日

松岡外務大臣より
在米國野村大使宛(電報)

米獨開戦の場合のわが方立場に関する野村大
使の記者談話につき真相回示方訓令

本省 2月27日後8時発

第一〇〇號

二十七日獨逸大使本大臣ヲ來訪シ在米獨逸大使ヨリノ電報ニ依レハ貴大使ハ新聞記者トノ會見ニ於テ米國カ獨逸ヲ攻撃シ獨逸カ對米宣戰ヲセル際ノ日本ノ立場如何トノ質問ニ對シ右ハ三國條約適用ノ解釋問題ナリト答ヘラレタル趣ナ

リトテ眞否ヲ尋ネタルニ付眞相爲念同電アリタシ

~~~~~

856 昭和16年2月27日 松岡外務大臣より  
在米国野村大使宛(電報)

日本は好んで南方へ武力行使することはない  
旨をグルー米国大使へ説明について

本省 2月27日後8時50分発

第一〇一號

二十六日「グルー」大使ト會談ノ際「イーデン」外相宛覺書(往電第四七號)ニ言及セル序ヲ以テ本大臣ハ諸情報ヲ綜合スルニ英國側ニ於テ日本カ今ニモ南方ニ於テ事ヲ構ヘントスルヤニ騷キ立テ居ルハ或程度危惧ヲ抱キ居ルコトモ事實ナルヘキモ其裏面ニハ米國輿論ヲ刺戟シ米ヲ誘導シテ對日強硬態度ニ出テシメントノ魂膽力潛ミ居ルヤニ疑ハルル節アリ又「タイ」佛印調停會議ニ關シテモ「タイ」ヲ煽リテ法外ナル要求ヲ提出セシメ會議ヲ決裂セシメントスル等各種ノ妨害ヲ試ミツツアリ右ハ眞ニ遺憾ニシテ英國ノ爲ニモ取ラサル所ナルカ英米トシテハ徒ニ對日猜疑ニ耽ルコトナク此際寧口會議ノ成功ニ寄與スルカ如キ態度ニ出ツルコ

ト建設的外交ト稱スヘク右ハ兩國ノ對日關係ニモ資スル所少カラサルヘシト說キタルニ「グ」ハ日本軍續々佛印ニ増遣セラレ居レリト云ヘルニ其ノ誤報ナルコトヲ明ニシ日本ハ現在支那事變ヲ抱ヘ居リ此際好シテ南方ニ武力ヲ行使スルカ如キコトハ常識ヲ以テシテモ考ヘラレス又現ニ何等スル行動ニ出テ居ラサルニアラスヤト述ヘタル處「グ」ハ東京會議ノ妥結促進ニ關スル本大臣ノ所說ニ對シ同感ノ意ヲ表シ居リタリ

英ニ轉電アリタシ

~~~~~

857 昭和16年2月27日 松岡外務大臣より
在英国重光大使宛(電報)

チャーチル英国首相の松岡外相宛書簡に対し

回答覺書手交方訓令

別電 昭和十六年二月二十七日發松岡外務大臣より

在英国重光大使宛第六三號

右覺書

付記 昭和十六年二月二十八日發松岡外務大臣より

在英国重光大使宛電報第六四號

右覺書の修正方訓令

本省 2月27日午後9時40分発

第六二二號

貴電第一三六號「チアナル」首相ノ覺書ニ對シ別電第六二三號同首相ニ御手交相煩度シ

(別電)

本省 2月27日午後10時30分発

第六二三號

His Imperial Japanese Majesty's Minister for Foreign Affairs acknowledges the receipt of the Note of His Britannic Majesty's prime Minister, dated February 24, 1941, and takes pleasure to apprise the latter that the statements and remarks contained therein have been duly noted.

The Foreign Minister trusts that Mr. Churchill is not necessarily expecting observations to be made upon them. He wishes, however, to take advantage of the opportunity to state that no hint whatever of his readiness

to act as a mediator between the actual belligerents was intended to be conveyed in his Memorandum addressed to His Britannic Majesty's Principal Secretary of State for Foreign Affairs, nor did he ever imagine of any possibility of such a hint to be read into any part of the text. The Foreign Minister took occasion in his Memorandum to refer to the mediation now taking place in Tokyo as Mr. Eden had made allusions to it and incidentally took the liberty of stating in a general and abstract manner the views he has always cherished, in order to make clear the aspiration and attitude of his country concerning the problem of peace or the recovery of normal conditions throughout the world.

The Foreign Minister believes that it will not be entirely out of place to reiterate what he has said on more than one occasion in reference to the Tripartite Pact, inasmuch as this matter was touched upon by Mr. Eden in his conversation with Ambassador Shigenitsu. The Tripartite Pact was concluded as, and remains, a peace

pact in the sense that it was entered into largely with a view to preventing a third Power from participating in the European war or Sino-Japanese conflict, thus limiting the participants and dimensions of the war and also to bringing about peace at the earliest possible date. Japan's ideals were epitomized in the preamble of the Pact and it is needless to say that Japan, remaining absolutely loyal to the aims and ideals enunciated, will always find herself standing by her allies under the Tripartite Pact.

The Foreign Minister would equally deplore and regret, if by any untoward circumstances Great Britain and this country were to become embroiled, not only because of the recollection of the years during which the two countries were united in alliance, but also because such a tragic eventuality would be fraught with the danger of destroying modern civilization to the undoing of the best part of Humanity.

February 27, 1941.

(付記)

本省 2月28日後7時30分発

第六四號

往電第六三號分割其ノ二ノ冒頭 nor did he ノ次ノ ever ヲ
削除シ imagine ノ次ニ for a moment ヲ又分割其ノ四中段
Tripartite Pact ノ次ニ Her faithfulness to an undertaking
was amply proved under the Anglo-Japanese treaty of
Alliance ヲ夫々挿入アリタシ

本電竝ニ往電第六二號及第六三號米、獨、伊ニ轉電セリ



858 昭和16年2月27日 在独国大島大使より
松岡外務大臣宛(電報)

日本がフィリピンに侵攻しない限り米国は英
蘭との共同軍事行動をとらない方針を決定し
たこのスターマー内話について

ベルリン 2月27日後発
本省 2月28日前着

第一九四號

往電第一九三號ニ關シ

二十七日「ス」トノ會談ノ際「ス」ハ在米獨逸大使館ノ入手セル確實ナル情報ニ依レハ(本「ソース」ハ今日迄常ニ間違ナカリシ旨附記ス)米國ハ日本カ比律賓ニ手ヲ着ケサル限り英又ハ和蘭ト共同軍事行動ニ出ツルコトナキ方針ヲ決定シ居ル趣ナル旨述ヘタリ本情報ハ東京ニ於テ「オツト」大使ヨリモ傳達セラルル趣ナルモ爲念尙「ス」ハ今後米英等ニ關シ密接ナル情報交換ヲ希望シ居リタルニ付有益ナルモノハ隨時電報相煩度シ

859

昭和16年2月28日

在英国重光大使より
松岡外務大臣宛(電報)

チャーチル英国首相に対する回答覺書は手文
見合わせないしは修正すべき旨意見具申

ロンドン 2月28日後発

本省 3月1日夜着

第一四六號(至急、館長符號扱)

一、貴電第六三號覺書(「チャーチル」首相へ覺書手交ノ件)ノ内容ハ既ニ帝國政府ニ於テ種々ノ機會ニ聲明セル所ナルノミナラス貴大臣ノ「イーデン」宛覺書カ何等歐洲間

題ノ調停ニ言及シ居ルモノニアラサル點モ本使ヨリ「チャーチル」其ノ他ニ對シ充分説明シアリ今更ラ繰返シ釋明ノ必要ナキ次第ナリ尙又日本カ一般のニ仲裁ニ應スル用意ヲ示セル點ハ日本ノ高遠ナル理想ヲ表示シ且一般公衆特ニ小國方面ニハ我大ナル立場ニ對シテ強キ印象ヲ與ヘタル次第ニテ今日殊更之ヲ取消スニ忍ビサル次第ナリ而シテ下記二ノ點ニ顧ミ本件覺書ハ寧ロ折角鎮マリ掛ケタル英側ノ神經ヲ刺戟スル丈ケニ終ル惧アリ且往電第一四二號ノ通り英側ニ於テハ未タ關係文書ノ公表ヲ考慮シ居ラサル趣ニテモアリ本件此ノ儘暫ク伏セ置クモ可ナルヘク又ハ本使ヨリ口頭ヲ以テ覺書ノ趣旨ヲ回答スルカニ致度シ

二、本件覺書中特ニ注目ヲ惹クハ末段近クノ“will always find herself standing by her allies under tripartite pact”ノ一句ニ有之申ス迄モナク英國ニテ allies ト稱スルハ波蘭、和蘭、白、希臘ノ如ク現實ニ戰爭ニ參加スル國ヲ謂フ次第ナル上一般の聲明演說等ノ場合ト異リ英國首相ニ宛テタル外務大臣ノ「パーソナルメツセーヂ」覺書ニテ日本カ獨伊ノ allies トシテ之ヲ支援スルコトヲ新筆スル

コトハ英政府ノ神經ヲ刺戟スルコト最甚タシト存セラル
就テハ若シ本件覺書ヲ是非手交スル必要アリトノコトナ
ラハ目下最機微ナル關係ヲ考慮ニ入レ右ノ點ハ一般的ニ

條約上ノ義務ハ之ヲ忠實ニ行フモノナル言ヒ方ニスルコ
ト却テ權威アル様ニ思ハル何分ノ儀御電示ヲ請フ

~~~~~

860

昭和16年3月1日 在米國野村大使より  
松岡外務大臣宛(電報)

### 米独開戦の場合のわが方立場に関する野村大 使の記者談話につき真相報告

別電 昭和十六年三月二日発在米國野村大使より松

岡外務大臣宛第一二三号

右談話記事

ワシントン 3月1日後発  
本省 3月2日後着

第一二三號

貴電第一〇〇號ニ關シ(野村大使ノ記者會見)

二月十九日新聞會見ノ際米カ獨ニ宣戦シタル場合日本ハ米  
ニ宣戦スルヤト執拗ナル質問アリタルニ對シ本使ヨリ右ハ

三國條約ノ問題ニシテ議論スルコトヲ欲セサルカ元來同條  
約ハ米國ニ對スル平和的意圖ヲ以テ締結セラレタルモノナ  
ルコトヲ述ヘリ參考ノ爲新聞記事(華府「ポスト」)別電ス

(別電)

ワシントン 3月2日後発  
本省 3月3日前着

第一二三號

"If the United States goes to war against German  
would Japan declare war on the United States?" was the  
next stickler. "I don't think the United States will declare  
war against Germany so the situation you refer to will not  
arise," Nomura answered. "Does the treaty obligate Japan  
to go to war against the United States if the United States  
goes to war against Germany?" the envoy was asked. "That  
is a question: I will refrain from going into it," he said  
cautiously. Then he volunteered the following: "When  
Japan entered upon the axis treaty it was her intention to  
preserve the peace. Her motives were entirely peaceful.

We wanted to avoid war with the United States.”

861 昭和16年3月3日 松岡外務大臣より  
在英国重光大使宛(電報)

チャーチル英国首相に対する回答覚書を修正  
の上遅滞なく手交方訓令

本省 3月3日後2時15分発

第六七號(外機密、至急、館長符號扱)

貴電第一四六號ニ關シ

折角御申越ノ次第モアルニ付貴電(一)ノ allies ノ次ニ曰  
carrying out obligations ヲ挿入ノ上遅滞ナク往電第六二號  
通り取計ハレ度シ尙本件ニ付テハ當方及獨伊側ニモ事情アリ  
其邊御諒承アリ度ク又覺書寫ハ既ニ參考トシテ在京英、  
米、獨、伊各大使ニ送付済ミナリ御傳達ノ上ハ其ノ旨至急  
御回電アリ度シ

862 昭和16年3月4日 松岡外務大臣より  
在英国重光大使宛(電報)

わが方には欧州大戦調停の意なき旨を近く公

表の予定について

本省 3月4日後7時発

第六八號(祕)

往電第六一號ニ關シ

過日「バトラー」カ下院ニ於ケル答辯中本大臣ノ「イーデー  
ン」宛覺書ノ一端ヲ發表セル次第モアリ此際本大臣ノ眞意  
ヲ明白ナラシムル爲(一)我方ニ於テ歐洲ニ於ケル現實ノ交戦  
國ニ對シ調停ノ勞ヲトルカ如キ暗示ヲ與フル意圖全然無カ  
リシ次第及(二)我國カ三國條約ニ基ク義務ノ遂行上常ニ同盟  
國側ヲ支持スルモノナルコト竝日本カ其ノ義務ニ忠實ナル  
コトハ日英同盟ニ依リ證明サレ居ル點ヲ説明セルモノヲ本  
月六日附朝刊ニ掲載セラルル様發表セシムル予定ナリ  
尙在京英國大使ニハ事前ニ連絡スヘシ

863 昭和16年3月5日 在英国重光大使より  
松岡外務大臣宛(電報)

チャーチル英国首相に対し松岡外相の回答覚  
書を手交について

ロンドン 3月5日後発  
本 省 3月6日前着

第一五八號(館長符號扱)

四日午後「チャーチル」首相ヲ往訪シ二月二十四日會見ノ際ノ貴首相陳述ハ委細政府ニ報告シ置キタルカ今回松岡外相ヨリ右ヲ委細了承シ更ニ重要ナル諸點ニ付テ書物ノ如キ同外相ノ意見開陳方來訓アリ何レモ誤解ヲ避ケテ了解ヲ進メントスル眞摯ナル日本側ノ努力ナルコトヲ御了解アリ度シト前提シ

右ハ大體三點ヨリ成リ居リ

第一點ハ貴方ノ最モ重キヲ置カレタル戰爭遂行ノ決意ノ點ニシテ仲裁ニ關スルモノナリ英國ノ戰爭遂行ノ決意ニ付テハ自分ヨリモ絶エス報告ヲ怠ラサリシ所ナルカ今回端ナクモ貴首相ノ表明ニ接シ一層明瞭ニ了解セリ但シ松岡外相ハ仲裁ヲ提議シタル譯ニアラスシテ「イーデン」外相カ松岡氏ノ佛印「タイ」紛爭仲裁ニ關シテ表明セシ誤謬ヲ訂正シ日本ノ公正ナル平和愛好ノ眞意ヲ表示スルヲ主眼トシタルモノナリ尙東京ニ於ケル仲裁ノ努力ハ漸次進捗シ之ニ付テモ日本ノ態度ノ極メテ公正ナルコトカ世界ニ反映シツツア

ルハ御承知ノ通りナリ

第二點ハ英國側ノ常ニ問題トセラルル三國「パクト」ノ意義ナルカ三國「パクト」ハ日本ハ締約國トシテ之ヲ忠實ニ實行スルモノナルコトハ誤解ナキ様ニ願ヒ度ク但シ右「パクト」ハ平和ヲ目的トセルモノニシテ戰爭參加ヲ目的トシ居ルモノニアラス日本ノ庶幾スル所ハ戰爭ノ擴大ヲ防止シ特ニ太平洋方面ノ靜止ヲ希望スルモノナリ此ノ點ニ付テモ篤ト御了解ヲ願ヒ度シ(首相ハ和戰ノ決ハ日本ニ於テ決セラルルモノト了解シテ可ナルヤト質問セルニ付本使ハ勿論日本ニ於テ自主的ニ之ヲ決定スルモノナリト答ヘタリ)

第三點ハ結論ナルカ日英間ニ戰爭ノ起ルカ如キハ日本ノ希望スル最後ノモノニシテ此ノ點ニ於テモ松岡外相ハ貴首相カ過日表明セラレタル意嚮ニ最モ強ク共鳴シ居レリ

以上ノ説明ヲ御了承ノ上御讀ミ願ヒ度シトテ書物ヲ手交セリ「チ」首相ハ右説明ヲ傾聽シ何レ篤ト拜見スヘシ尙松岡外相ニ充分謝意傳達方ヲ請フト挨拶セリ

米ハ轉電セリ

864

昭和16年3月5日  
在英國重光大使より  
松岡外務大臣宛(電報)

松岡外相の回答覚書を手交の際にチャーチル

英國首相が述べた所感について

ロンドン 3月5日後発  
本省 3月6日前着

第一五九號

四日「チ」首相ト會見ノ際

一、首相ハ左ノ所感ヲ述ヘタリ

「戰爭ハ今後種々困難ナル曲折アリ一弛一張ハ一九四二年一杯續クヘキモ來年末ニ至ラハ英國ハ空軍ニ於テ獨逸ヲ凌駕スヘク夫レヨリ海空ノ優勢ト米國ノ軍需工場トヲ以テスレハ必ス勝利ヲ得ヘシ其ノ曉ニ於テモ日本ト友好ノ精神ヲ披瀝シテ世界ノ政局ニ協力スヘシ日本ト英國トハ其ノ地理的關係ニ見ルモ協力アリテ衝突ナキ關係ナリ共ニ島帝國トシテ繁榮シ得ヘシ今次ノ如キ戰爭ニ於テ一進一退ハ免カレサルモ之ニ迷ハサルコトナク長キ目ニテ戦局ヲ見テ戴キタシ」

二、本使ヨリ日英關係ニ關スル自分ノ私見ハ聊カ前回會見ニ

於テ述ヘタリ兩國ノ平和的意見カ基礎的ニ合致ヲ見タルハ甚タ喜ハシキコトナルカ斯ノ如ク爾後ニ於テ誤解ヲ芟除スルノ努力ヲ寧ロ事前ニ於テ之ヲ豫防猜疑ヲ除去スルノ努力ニ代フルコト賢明ナルヲ考ヘラレサルヤ太平洋方面ニ於テ各國ノ了解ヲ進メ平和ヲ樹立スルハ政治家ノ重要ナル責務ト思考スト述ヘタル處

首相ハ御意見ハ了承セリ貴大使ハ「メンジ」氏ニ會談セラレタルヤ充分意見ノ交換ヲ希望スト問ヒタルニ付其ノ機會アルヘキ旨ヲ答ヘタリ(往電第一五四號ニテ大要御承知ノ通りナルカ昨三日「メンジ」ノ演説ハ「チャーチル」始メ英國政府ト打合セノ上ニ行ヒタルモノニシテ右首相ノ言葉ノ意味モ之ニ關聯スルコト勿論ナリ)米ヘ轉電セリ



865

昭和16年3月6日  
在バタビア石沢總領事より  
松岡外務大臣宛(電報)

米國が蘭印に圧力を加えて日蘭会商を妨害し  
対日経済圧迫政策を実行しているとの疑惑に  
関し米國總領事ハ照会について

バタビア 3月6日後発  
本省 3月6日夜着

第一八五號(極秘)

四日米國總領事「フット」ト懇談ノ際日米關係ノ現狀ニ觸レタルニ付本官ハ兩國關係ハ不幸ニシテ甚タ面白カラサルニ至レルモ之カ調整方ニ付テハ東京及華盛頓ニ於テ考究セラルヘキモノニシテ我々ノ間ニ於テハ如何トモ爲シ得ス唯當領ニ關スル限リハ日本ニ於ケル一般ノ氣分ハ米ハ蘭印ニ壓力ヲ加ヘ自己必要物資入手、對日輸出制限、今次日蘭會商妨害等ヲ策スルト共ニ蘭印ヲシテ對日經濟壓迫政策ニ追隨セシメント爲シ居ルニアラスヤトノ疑惑ヲ深メツツアリ若シ右疑惑ノ通りナリトセハ日米關係ハ更ニ惡化スルノ外ナカルヘシト述ヘタル處「フ」ハ米カ今次日蘭經濟交渉ヲ關心ヲ以テ眺メ居ルコトハ事實ナルモ蘭印政府ニ對シ壓力ヲ加フルカ如キハ全然考ヘ居ラス例ヘハ小林全權及向井氏ノ石油交渉ヲ行ハレツツアリタル際ハ勿論現在ニ於テモ自分ハ本國政府ヨリ一片ノ訓令ヲ受ケタルコトモナク茲數週間中一回モ經濟長官ニ面會セルコトスラナシ又昨年本國政府ヨリノ訓令ニ基キ相當多量ノ「キナ」皮買付方ヲ蘭印政

府ニ交渉セル際當局ハ日本英領印度其ノ他歐洲諸國ヘ夫々相當量ノ供給ヲ約セル後ナレハ米ノ要求ニ應スル能ハストテ拒否シ來リ自分ハ其ノ旨政府ニ打電セル處其ノ儘ニ終リタリ要スルニ蘭印ハ其ノ獨立性ヲ重ンスルコト極メテ強ク總テノ問題ヲ自己ノ裁斷ニ依リ決セントシ他ノ干涉ヲ許サス米トシテモ傳統的ナル此ノ傾向ヲ壓力ニ依テ抑ヘントスルカ如キ意思ナシ日本側疑惑ノ如キ事實絕對ニナキコトハ自分ノ名譽ニ懸ケテ確言シ得ル所ナリト述ヘタリ本官ハ貴言ノ趣旨ヲ日本政府ニ報告シ差支ナキヤト念ヲ押シタルニ差支ナシト答ヘタリ

尙米側策動ノ有無ニ付テハ今日迄注意ヲ怠ラサリシカ當地ニ關スル限リハ前記ノ如キ策動形迹ナキモ尙注意中ナリ



866

昭和16年3月7日 在バタビア石沢總領事より  
松岡外務大臣宛(電報)

タイ・仏印調停會議の合意成立により日本は  
シンガポールを第一目標として南方に進出可  
能となつたとの新聞論調報告

第一九四號

バタビア 3月7日後発  
本 省 3月8日前着

佛印「タイ」國間停戰協定成立ニ關スル七日「ニユース、フアンデンダツハ」夕刊論調左ノ通り

停戰協定成立ニ依リ日本ハ最重要ナル目的ヲ達シタリ佛印ヲ日本ノ共榮圈外ニ置カントセル佛國ノ希望モ一方ニ獨逸ヲ控ヘ他方頼ミニナラサル英國及之トノ協力ナシニハ極東ニ手出シスル意思ナキ米國トヲ控ヘ遂ニ日本ニ屈服セリ斯クテ日本ハ「タイ」國ト協力シテ南方ニ一步ヲ進ムルコト可能トナリタルカ其ノ第一目標ハ新嘉坡ノ中立化ニアリ何レモ蘭印ニ影響スル所大ナルカ餘リニ吾人ノ身邊ニ迫リタル日本ハ好マシキ姿ニアラス

867

昭和16年3月10日

在英国重光大使より  
松岡外務大臣宛(電報)

豪州首相の演説など英国側の対日宥和的言動  
や英国勢力の太平洋方面漸増の形勢に注目す  
べき旨意見具申

第一七一號(館長符號扱)

ロンドン 3月10日後発  
本 省 3月12日前着

往電第一五四號三月三日ノ「メンヂー」濠洲首相(當地<sup>(1)</sup>ニテハ戰時内閣ニ列ス)ノ演説ハ四日ノ會見ニ於テ「チ

ヤーチル」首相モ言及シタル位ニテ「チャーチル」ハ「アピーズメント」ノ語ヲ避ケテ「デタント」ト言ヒ居リタリ「イーデン」外相ニ宛テタル貴大臣ノ最初ノ「メツセーヂ」ノ意ヲ汲ミ之ニ對應シテ腹藏ナキ意見ノ交換ニ依リ太平洋ニ於ケル困難ヲ除去センコトヲ提唱セルモノニシテ日本トノ友好關係ニ重キヲ置キタルモノナルカ(演説ハ外國新聞協會ニテ英米記者等多數ノ内外新聞記者及名士列席ノ上廣ク公衆ニ對シテ爲サレタルモノニシテ中ニハ「レーサム」公使派遣ニ關シ之ニ對應スル有力ナル河相公使ノ任命アリタリト同公使ノ「ユーロヂー」ヲ爲シタル部分モアリ)之ニ對シテ濠洲政府部内ノ勞働黨閣員カ右ハ「アピーズメント」政策ナリト非難ヲ加ヘ當方面ノ反對分子ノ之ニ呼應スル者アリタルモ「メンヂー」ハ斷然之ヲ否定シ右ハ一步一步讓歩シテ何

物カヲ購ハントスル「アピーズメント」政策ニアラスシテ率直ニ意見ヲ交換シテ困難ヲ除去セントスル實際の政策ナリト發表セリ(六日(附)ニテ濠洲政府モ何等意見ノ差違ナキコトヲ公表ス)斯クシテ右「メンヂー」ノ演說ハ日本側ノ眞摯ナル太平洋平和希望ニ對スル英國側ノ公然ニシテ大膽ナル應酬ト看做サルルニ至リ爾後新聞ノ調子モ之ニ應スルモノアリ

二、<sup>(2)</sup>太平洋ノ危機ハ一應去リタルカ如キモ此ノ儘ニテ進メハ更ニ再ヒ危機ヲ繰返シ遂ニハ最惡ノ場面ニ立至ルヘキハ豫想ニ難カラス三國「パクト」ノ範圍内ニ於テ太平洋ノ危機ヲ回避センカ爲ニハ異常ノ努力ヲ内外ニ對シテ爲スコトヲ要スヘキカ從來支那問題ニ付テ英米ハ英國ノ如ク強烈ナル反感ヲ有セサル濠洲ノ首相ヲシテ前記ノ如キ演說ヲ爲サシメタル事情ヲ考慮シ右演說ヲ支持スルコトハ米國ニ強キ印象ヲ與ヘ太平洋ノ危機防止ノ有力ナル手蔓トナリ併セテ支那問題ニ對スル我カ立場ヲ強ムル好機トモナル次第ト認メラル就テハ此ノ機會ヲ利用セラレ貴大臣ノ次回議會演說等ノ機ニ「メンヂー」ノ演說ニ應セラルル様ニセラレテハ如何

尙當方ニ於テハ二月二十八日往電<sup>(マ)</sup>第四七號「ブルース」トノ接觸ハ繼續シ居レリ

三、<sup>(3)</sup>最後ニ帝國カ三國「パクト」ニ忠實ナルヘキハ議論ノ餘地ナク(尙四日會見ノ際此ノ點ヲ本使ヨリ明瞭ニ説明セルニ對シ「チャーチル」ハ御尤モナリト答ヘ居タリ)只之ト併行シテ之ヲ利用シツツ實力ノ背景ニ依リテ太平洋ノ戰爭ヲ避ケ支那問題ヲ解決ニ導キ我カ東亞ニ於ケル地位ヲ固ムルニハ常ニ冷靜ニシテ獨自ノ政策ノ運用ヲ要シ最モ苦心ノ存スヘキ所ト考ヘラル「メンヂー」演說ハ勿論「チャーチル」其ノ他有力者ノ言動ニ見ルモ從來ト異リ日本ヲ些カモ侵略者(アグレツサー)呼ハリスルコトハ控ヘ只管兩國ノ利害ハ地理的關係ヨリモ根本のニハ一致シ居ルコトヲ印象付クルニ努メ居ルハ支那問題ニ對スル彼等ノ態度ヲ暗示スルモノトシテ味フヘキ點ト認メラル巴爾幹大陸方面ノ英國ノ勢力ハ到底支フルコト能サルヘキモ海上(島嶼)及植民地ニ於テハ英國ノ勢力強シ今後戰局ハ幾多ノ變轉アルヘキモ陸ノ力ト海ノ力トノ勝敗ノ決ハ猶前途遼遠ナリト見ルノ外ナク而シテ米國ニ聯繫ヲ持ツ英帝國自治領植民地ノ力ノ太平洋方面ニ漸増スヘキ形

勢ハ見逃シ得サル所ト思考ス

868

昭和16年3月11日

在米国野村大使より  
松岡外務大臣宛(電報)

極東に紛争發生の場合英國は米国の協力を期  
待しうるとの英國大使内話について

第一三八號

ワシントン 3月11日後発  
本省 3月12日後着

英大使十日答禮ノ爲來訪種々雜談ノ間ニ左ノ通り語リタリ  
自分ハ米國ノ立場ヲ語ル位置ニアラサルモ英モ米モ極東ニ  
於テ紛争ヲ望マサルコトハ同一ナリ唯萬一ノ場合ニ備ヘツ  
ツアルニ過キス然シ若シモ事端ヲ生シタル際ハ英ハ米ノ充  
分ナル協力ヲ期待シ得ルモノト認メツツアリ  
新聞報ニ依レハ英大使ハ濠洲公使ト同道國務長官訪問後極  
東ノ形勢ハ幾分緩和シタル感アルモ依然「スレツツンニン  
グ」ナリ一般形勢ノ觀測ハ國務長官ト一致スト語リタリト  
英、獨ニ轉電セリ

869

昭和16年3月15日

近衛臨時外務大臣事務管理より  
在米国野村大使宛(電報)

日本が重大なる南進措置をとる場合英米蘭三  
国政府共同での対日警告声明發出に米国が賛  
同したとの情報について

第一一九號(外機密)

本省 3月15日後6時発

確實ナル情報ニ依レハ最近實地英國大使「ハル」長官懇談  
中「ハル」ヨリ英米駐在日本大使ノ平和的言辭ニ拘ラス時  
機至ラハ日本ハ必スヤ行動ヲ起スモノト考ヘ居ル處其ノ場  
合「タイ」ニ對スル軍事的經濟的把握ノ外英領ニ對スル攻  
撃ヲモ爲スモノト解スヤト問ヘルニ對シ同大使ハ日本ノ攻  
撃ハ「マレー」又ハ蘭印ノ何レカニ向ケラルルモノト考ヘ  
居リ尙現在迄ノ處英米ノ執リタル措置ハ日本側ヲ抑制スル  
ニ充分ナリシモ今後ハ疑問ナリト述ヘタル上全ク一個人ノ  
思付ナリトシテ日本力更ニ重大ナル南進措置ヲ執リタル場  
合英米蘭三國政府共同シテ警告的聲明ヲ發シテハ如何ト述  
ヘタルニ意外ニモ「ハル」ハ贊意ヲ表セルヲ以テ右以上追  
求セサリシモ本問題ニ關シ更ニ「ハル」ト話合ヲ續クヘキ



ヤニ付本國政府ニ請訓中ナル趣御參考迄  
英、獨ニ轉電セリ

870 昭和16年3月29日

近衛臨時外務大臣事務管理より  
在米國野村大使宛(電報)

米國政府に対し重要物資のさらなる禁輸拡張  
は日米國交に重大なる影響を与える旨注意喚  
起方訓令

本省 3月29日後9時発

第一四八號(機密)

往電第一二八號ニ關シ

廿六日貴地I・N・S特電ハ重要物資ノ禁輸機構ヲ擴大強  
化シ敵性國家ニ對スル米國品ノ流出阻止ヲ完璧ナラシムル  
爲大統領ハ比島ヲ含ム米國全領土ニ輸出許可制ヲ敷衍スル  
新法令ニ署名スヘキ旨報シ居リ又同日紐育同盟ハ本大臣宛  
「マニラ」來電第一三六號ト同趣旨ヲ報シ更ニM・M情報  
又右ヲ裏書シ居ル次第アリ他面業者側ヘノ情報ニ依レハ  
「オクタン」價八七以下ノ「ガソリン」モ禁輸ノ對象タル  
ヘシトノ說アリ是等ヲ綜合スルニ米側ハ經濟壓迫ヲ更ニ強

化セントノ氣配歷然タルモノト認メラルルニ付閣下ハ最近  
ノ機會ニ於テ禁輸ノ地域的又ハ品目上ノ是以上ノ擴張ハ日  
米國交上重大ナル影響ヲ與フヘキ點ニ付米當局ノ深甚ナル  
注意ヲ喚起シ置カレタシ

尙右ノ際比島ヘノ擴張ニ關シテハ同島ト日本トノ地理的及  
經濟的緊密性ニ鑑ミ米本國ノ許可制トハ性質上全然異ナレ  
ル深刻ナル影響ヲ與フヘキ點竝ニ石油許可制ノ與フル影響  
ノ重大性ヲ充分強調シ置カレ度シ

「マニラ」ヘ轉電セリ

871 昭和16年3月31日

近衛臨時外務大臣事務管理より  
在米國野村大使他宛(電報)

英米兩國の対日經濟圧迫などに関する情報通報

本省 3月31日後9時30分発

合第七六〇號

歐米情報

一、英米兩國ノ我方ニ對スル態度ハ此ノ際我方ト事ヲ構フル  
ヲ避クル意味ニ於テ石油食料等ノ禁輸ノ如キ日本ヲ最後  
ノ巖頭ニ追ヒ詰ムルカ如キ政策ハ避ケ居ルモ其他ノ點ニ

於テ徐々ニ經濟的ニ我方ニ對スル壓迫ヲ増シツツアル現  
狀ナリ

二、松岡外相ノ渡歐ハ英米側ニ深刻ナル印象ヲ與ヘタルモ新  
聞論調ヲ綜合スルニ尠クトモ外相ノ不在中ハ大規模ナル  
南進政策ヲ實行スルコトナカルヘク問題ハ其歸國後ニア  
ル可キ處日本ハ必スシモ獨逸ノ注文通りニハ動クモノニ  
非ス又對蘇問題ニ付テハ何事モ爲シ得サル可シト云フニ  
アルカ如シ

三、米國ノ對英援助ハ武器貸與法ノ成立ト共ニ愈々本格化シ  
事實上ノ參戰ニ近付カントシツツアリ之ニ對シ獨逸ハ潛  
水艦戰ヲ激化シ英國ノ船舶被害ハ急激ニ増加シツツアリ  
英國側ノ發表ニ依ルモ一日一萬「トン」乃至二萬「ト  
ン」ニ上リ居ル狀態ニテ右ハ港灣設備ノ空爆ト共ニ甚シ  
ク食糧物資ノ不足ニ拍車ヲカケ居レリ他方獨逸ハ「バル  
カン」ニ對シ着々其ノ地歩ヲ固メ居ルモ獨蘇關係ハ「ブ  
ルガリヤ」「ユーゴスラビア」及「トルコ」問題ヲ中  
心トシ相當機微ナル關係ニアリ今後獨「バルカン」近  
東政策ノ進展ト共ニ蘇聯カ如何ナル態度ニ出ツ可キヤ注  
目ノ要アリ

872

昭和16年4月6日

在ラングーン福井(淳)総領事より  
近衛臨時外務大臣事務管理宛(電報)

タイ・仏印国境紛争の調停成立は日英の衝突  
を惹起するとのビルマ有識階級の見解報告

ラングーン 4月6日後発  
本省 4月10日後着

第九一號

貴電合第七一八號ニ關シ「タイ」佛印紛争調停ノ東亞ニ於

ケル民族運動ニ及ホシタル影響)

(大カ)

當地ニ於ケル英字新聞ハ英國ノ宣傳機關ニシテ緬甸語新  
聞ニ對スル國防部ノ指導ハ本年初頃ヨリ漸次強化セラレ  
テ今ヤ其ノ完全ナル統制下ニアリ(國防部情報係ハ蘇聯  
邦ノ態度不(明)ナルヲ以テ今日日本ハ英米支ヲ相手トシ  
テ盲目的ナル開戰ハ爲ササルヘシトノ趣旨ノ記事ヲ緬甸  
語ニテ起草シ之ヲ短評欄等ニ頻繁ニ掲載セシメ居リ新聞  
社ハ當局ノ彈壓ニ怯エテ極東情勢ニ關シテハ大體左ノ趣  
旨ヲ骨子トシ社説ヲ掲ケ居レリ尙情報係ハ印度人等ノ經  
營スル日刊英字新聞ニ對シテモ英國ノ宣傳の記事ヲ與ヘ  
テ之カ掲載ヲ要求スルト共ニ假令文化的モノト雖本邦關

係ノ記事ヲ掲クルモノニハ嫌カラセヲ言ツテ之カ掲載ヲ差控ヘシムル様努メ居ル趣ナリ）從テ新聞紙ハ何等緬甸國民ノ輿論ヲ代表スルモノニアラサルカ緬甸新聞ハ客月上旬日本ノ調停成功セサレハ東洋ノ危機切迫スヘシト論シタルモ其ノ後ハ專ラ當局ノ指導方針ニ極東情勢ノ展開ハ松岡外相ノ歸國後ニアラサレハ判明セサルモ日本ハ自國ノ利益ヲ考フヘク獨伊ノミノ爲ニハ行動セサルヘシト論シ居リ「タイ」佛印問題ニ付テハ論及セス

二、<sup>(2)</sup>緬甸國民ハ當初ヨリ解決條件ニハ餘リ關心ヲ有セス有識階級ノ大多數ハ紛爭解決前殊ニ其ノ直前ニハ紛爭力大國間ノ戰爭ニ發展スルコトナキヤニ付只管懸念シ居リタルカ亞細亞民族トシテ亞細亞ニ於ケル紛爭力解決セルコトヲ喜フト共ニ調停ノ成功ハ東亞ニ於ケル日本ノ威力ヲ世界ニ示セルモノナリト見居リ唯支那事變ニ對スル認識ノ缺如ヨリ日本ハ「タイ」佛印間紛爭ヲ調停シツツ何故蔣政權トノ戰爭ヲ繼續スルヤトノ反問ヲ抱ク者モアリ又紛爭解決後ニ於ケル日「タイ」間親善關係ノ増進振（タイ）ヨリノ歸國者ノ談話）日本ノ對佛印新要求提出說（三月二十七日重慶發「ルーター」）緬甸領内緬「タイ」國境

地方ヘノ軍隊集結等ヨリ推シテ日本ノ調停成功ハ結局日英ノ衝突ヲ惹起スヘク殊ニ松岡外相歸國後戰禍東洋ニ波及スルヤモ圖ラレスト見ルモノ相當多シ

三、<sup>(3)</sup>有識階級ノ大多數ハ經濟東亞共榮圈ノ建設ニハ贊成シ居レ共新秩序ノ建設ニ付テハ之ニ贊成スル者ト所謂新秩序カ日本ノ小國侵略或ハ搾取ヲ含マサルヤ否ヤヲ見極ムルヲ要スト爲ス者トアリ

緬甸國民間ニハ濃淡ノ差別ハアレト一般的ニ反英感情充滿シ居ルカ蘭貢ニ於ケル有識及有產階級者ノ現在ノ心境ハ三、末段ノ戰爭懸念ヨリ反英感情及緬甸ノ自由獲得問題ヨリモ寧ロ戰禍蘭貢ニ波及ノ懸念カ切實トナリ日本ノ空襲ヲ恐レテ戰々競々タリ極メテ少數ノ反英急速分子中ニハ日本ノ參戰ヲ望ミ居ル者モ山間淳朴ナル地方民竝ニ現在ノ秩序ニ於テハ浮フ瀬無キ細民階級及英緬混血兒中ニハ緬甸ノ獨立不可能ノ場合ニハ日本ノ統治ヲ可トスル者モアリ之カ爲最近ニハ「ラヂオ」及新聞ヲ通シ英國ニ替リ日本カ緬甸ノ主人トナル事ハ緬甸ノ幸福ヲ増進スル所以ニ非ストノ宣傳行ハレ居レリ

四、紛爭ノ解決及日本ノ調停成功ハ國民主義ノ實際運動ニハ

別段ノ影響ヲ與ヘ居ラス當局ノ彈壓及日本ハ英米政府ヲ  
相手トシ戰フ力ナシトノ英國及支那側ノ宣傳ニ依リ緬甸  
ノ國民主義運動ハ地上地下共ニ最近下火ニシテ例年四月  
一日ニハ「タキン」黨等ノ主催ニテ緬甸統治法反對ノ示  
威運動行ハレタルモ本年當地ニ於テハ何等示威運動ヲ見  
ス



873

昭和16年4月11日 在英國重光大使より  
近衛臨時外務大臣事務管理宛(電報)

# 太平洋方面の平和確保に関する英国外務次官

## との意見交換について

ロンドン 4月11日発  
本省 4月12日着

第二五二號

一、松岡大臣ノ伯林羅馬訪問ニ付テハ英國系新聞ハ異常ノ注  
意ヲ拂ヒ同大臣ノ演說聲明日本政府筋ノ言動等獨逸新聞  
放送及東京電報ト共ニ細大報道シ何レモ日本カ益々樞軸  
ニ深入リシ軍事委員會成立ハ愈日本カ南方ニ對シ行動ヲ  
起ス前提ナリトノ印象ヲ與ヘ對日惡感情ヲ唆リ(尤モ政

府方面ニ對シテハ當方ヨリ常ニ松岡大臣ノ使命ハ同大臣  
出發前既ニ「クレーギー」大使ニモ直接説明セラレタル  
通りニテ何等疑ノ要ナキニ付新聞報道等冷靜ニ指導スヘ  
キ旨ヲ以テ接觸シ先方モ之ヲ諒トシ新聞ノ掲載振ハ實際  
ノ印象ヨリモ穩カナリシハ事實ナリ)今後太平洋方面ノ  
平和ヲ確保スルニハ此ノ點ヨリ見ルモ異常ノ努力ヲ要ス  
ヘキカ十日バトラー次官トノ會見ニ於テモスコニ於ケ  
ル松岡大臣ト米大使トノ會談内容ヲ念頭ニ置キ左ノ通り  
應答セリ趣旨ハ從來ノ報告ト變化ナキモ電報ス

## 二、先方ノ質問ニ答ヘ左ノ通り述ヘタリ

曩ニ松岡大臣ハ英國政府ノ質問ニ答ヘ日本政府ノ平和的  
政策ヲ説明シ英國ニ對シ何等攻撃の意圖ナキコトヲ明ニ  
シ三國パクトノ平和企圖ヲ率直明確ニ説明シチャーチル  
首相モ同趣旨ヲ以テ之ニ應酬セラレ且又獨伊訪問ニ付テ  
ハ予メ直接ク大使ニ其ノ使命ヲ説明スルノ機會アリタリ  
ト貴下ヨリ承ハリタルカ今日ノ日本ハ松岡氏カ何等前言  
ヲ齟シタル行動ヲサレタルコトナク尤モ今回ノ歐洲訪問  
ハ之ヲ確認スル次第ト認メラルルコトヲ申述ヘタリ即チ  
太平洋ノ平和ハ日本側ノ政策ノミナラズ樞軸諸國ノ一致

ノ希望ナルコトモ明カトナレリ然ルニ拘ラス今ニモ太平洋ニ戰禍ノ波及スルカ如キ世界ノ空氣ナルニ對シテハ英國側モ反省ノ余地ナキヤ危機ヲ解消スルノ必要ナルハ勿論ナルモ危機ヲ予防スルノ更ニ必要ナルヲ感スル次第ナルハチャーチル氏ニ對シテモ篤ト申入レタル通りニテ今繰返スヲ得ス

日本政府ノ與ヘタル平和ノ證言ハ三國パクトノ現下ニ於テ英國政府ノ希望スル最モ大ナルモノヲ提供シタル譯ナルカ之ニ對シテ最近東京ヨリ傳ヘラレタル平沼前首相演說(地方長官會議ニ於ケル)ノ一部ニ英米兩國ハ日本ヲ經濟的ニ抑壓スル政策ト日本ノ敵タル重慶援助ノ政策ヲ維持シ飽迄日本ニ敵意ヲ表示シ居ル旨指摘シタル點アリ(バ氏ハ自分モ其ノ點ヲ承知スト言フ)右ハ日本人ノ感情ヲ率直ニ陳述セルモノニシテ極メテ味フヘキモノト思考ス自分ノ惧ルル所ハ斯クノ如クニテ太平洋ノ危機ハ復又釀成セントモ限ラズ苟モ太平洋ノ平和ヲ希望スル者ハ之ヲ坐視スヘキニ非サルヘシ自分ノ今日ノ言ハ日本ノ弱點(ウィキクネス)ヲ表示スルモノニ非ズ又英國ノ弱點ヲ起揭セントスルモノニ非ズチャーチル氏ノ言フカ如ク強大

ナル東西ノ兩島民ハ根本ニ於テ何等利害ニ衝突ナク將來ニ向テ理解アル共助ニ依リ世界ノ平和ニ貢獻スヘキモノナリトノ基礎的觀念ヨリ出發スルモノナリ唯今御出合ヒセシイーデン外相(停車場ヨリ外務省ニ歸着セシバカリ)ニモ又特ニチャーチル氏ニ自分ノ意ノアル所ヲ更ニ篤ト御傳ヘアリタシ

三、バ次官ハ今日ノ御話ヲ充分御傳ヘスヘシト答ヘタル後然ラバ貴大使ニ於テ何等實行方法ヲ有セラルルヤトノコトナリシニ付政策ノ轉換ハ先ツ好意ト理解トヲ以テ他ノ立場ヲ了解セント努力スルニ在リ右ノ氣持ヲ以テ平和ヲ破壞セントスルモノノ宣傳策動ニ乗セラルコトナク猜疑ヲ除キ互ニ信賴シテ意見ノ交換ヲ行ヒ建設の方策ヲ發明スルニ努ムルコト第一ト思考ス其ノ爲ニハ今日迄ノ御座ナリノ且普通ノ往復互ヒニ今少シ勉厲シテ接觸ヲ密ニシ實際的ニ大局ヨリ處理シテハ如何右ハ日英關係ヨリ言フ問題ナルモ自分ハ米國ヲ疎外セント言フニハアラス否米國ニ了解セシムルコトカ尤モ重要ニシテ之カ爲ニハ英國政府ハ最好都合ノ地位ニ在リト思ハル

ト述ヘタルガバ氏ハ熱心ニ聽取セリ英國側ニ於テ對日政

策變更ノ兆ヨリロードハジケーヲ米國經由日本ニ派遣セ  
ントスルノ議熟シ居リタルカ右ノ如キ案モ米國ヲ説得ス  
ルノ一手段トモ考ヘラル  
尙バ氏ハモスコ―ニ於テチ首相ヨリ直接松岡大臣ヘ戦爭  
ニ關スル英國事情ヲ具體的ニ説明セルメッセ―ジヲ差上  
ケルコトトナリ居レル旨語リ居タリ  
ソ米ニ轉電セリ

~~~~~

874

昭和十六年 4 月 16 日 在英国重光大使より
近衛臨時外務大臣事務管理宛(電報)

チャーチル英首相より松岡外相宛メッセ―ジ
を英國外務次官から受領について

別 電 昭和十六年四月十六日發在英国重光大使より

近衛臨時外務大臣事務管理宛第二六九號

右メッセ―ジ

ロンドン 4 月 16 日發
本 省 4 月 17 日着

*
第二六八號

往電第二五二號末尾ニ關シ

「バトラー」ヨリ十一日附「チ」首相ヨリ松岡大臣宛「メ
ッセ―ジ」ナルモノ(別電第二六九號)内報シ來ルト共ニ右
「メッセ―ジ」ハ質問体ニナシタルガ「チ」首相ハ日本カ
自ラ之ニ對スル回答ヲ選擇セラレ重大ナル破局(太平洋ノ
戰爭ヲ意味ス)ヲ避ケ日本ト太平洋海軍國トノ關係ノ顯著
ナル改善ヲ將來ニ資セラレンコトヲ希望シテ止マサルナリ
ト附言越セリ尙右「メッセ―ジ」ヲ莫斯科ニ於テ英國大使
ヨリ大臣ニ渡シ置キ度キ希望ヲ表示セルニ對シテハ大臣ハ
東京ニ於テ受取ル様先方ニ通ジタル行掛リアリ
米ヘ轉電セリ

(別 電)

ロンドン 4 月 16 日發
本 省 4 月 17 日着

第二六九號

I Will Germany, without command of sea or
command of British daylight air, be able to invade and
conquer Great Britain spring, summer or autumn of 1941?
Will Germany try to do so? Would it not be in interests of

Japan to wait until these questions have answered themselves?

2 Will German attack on British shipping be strong enough to prevent American aid from reaching British shores and United States transforming their whole industry to war purposes?

3 Did Japan's accession to Triple Pact make it more likely or less likely that United States would come into present war?

4 If United States entered war at side of Great Britain, and Japan ranged herself with Axis Powers, would not naval superiority of two English-speaking nations enable them to deal with Japan while disposing of Axis Powers in Europe?

5 Is Italy a strength or a burden to Germany? Is Italian fleet as good at sea as on paper? Is it as good on paper as it used to be?

6 Will British Air force be stronger than German Air force end of 1941 and far stronger before end of 1942?

7 Will many countries which are being held down by German Army and Gestapo learn to like German more or will they like them less as years pass by?

8 Is it true that production of steel in United State during 1941 will be 75 millions tons, and in Great Britain about 12.5 making total of nearly 90 millions tons? If Germany should happen to be defeated, as she was last time, would not 7 millions tons steel production of Japan be inadequate for a single-handed war?

編 注 本文書には脱文等が見られるが原文のまま採録した。

なお、本文書は電報のため冠詞が省略されている。

~~~~~

875 昭和16年4月22日 松岡外務大臣より  
在英国重光大使宛(電報)

松岡外相よりチャーチル英首相宛書簡の手交

方訓令

別 電 昭和十六年四月二十二日発松岡外務大臣より

在英国重光大使宛第一三九号

右書簡

本省 4月22日後8時発

第一三八號

別電第一三九號「チャーチル」首相ニ御手交相成度シ

(別電)

本省 4月22日後8時20分発

第一三九號

April 22, 1941 Tokyo

Your Excellency

I have just come back from my trip and hasten to acknowledge the receipt of a paper, handed to me at Moscow on the evening of the 12th instant by Sir Stafford Crips with remark that it was a copy in substance of a letter addressed to me dated London, April 2nd, 1941, and forwarded to Tokyo.

I wish to express my appreciation for the facilities with which your Government made efforts to provide our Ambassador when he wanted to meet me on the continent,

I was keenly disappointed when I learned that he could not come.

Your Excellency may rest assured that the foreign policy of Japan is determined upon and after an unbiased examination of all the facts and a very careful weighing of all the elements of the situation she confronts, always holding steadfastly in view the great racial aim and ambition of finally bringing about on the earth the conditions envisaged in what she calls Hakkōichiu.

The Japanese conception of a universal peace under which there would be no conquest, no oppression, no exploitation of any and all peoples. And, once determined, need hardly tell your Excellency, it will be carried out with resolution but with utmost circumspection, taking in every detail of changing circumstance.

I am, believe me,  
your Excellency's obedient servant  
Yosuke Matsuoka  
His Excellency the Right Honorable Winston Churchill



P.S.

I am going to wire the contents of this letter from Manchouli to Tokyo with direction to transmit them to your Excellency through our Ambassador at London.

編 注 本書簡は、昭和十六年四月二十四日発松岡外務大臣より

在英国重光大使宛電報第一四〇号をもって、末尾の

「P.S.」以下を削除するよう訓令された。

~~~~~

876 昭和16年4月28日

在伊国堀切大使より
松岡外務大臣宛(電報)

太平洋方面への戦争波及防止に向けたローマ
法王庁と米国政府との接触に関する情報報告

ローマ 4月28日後発

本省 4月29日前着

第二五一號(館長符號扱)

當地米國大使館參事官「チットマン」ハ先般「ヴァチカン」附ニ轉シ二十二日ヨリ法王廳ト接觸シ居レルカ「ヴァチカン」側情報ニ依レハ「チットマン」ハ法王廳カ戦争ノ

太平洋ニ波及スルノ危險ヲ防止センカ爲ニ極東及太平洋間

題ニ關シ日米關係ヲ檢討センカ爲仲介ノ意圖アルニ鑑ミ

「ヴァチカン」附トナリタルモノニシテ法王廳ハ「ル」大

統領ヲシテ日本カ平和的ニ東亞及支那問題ヲ解決セントス

ル善意アルコトヲ信セシムルニ成功シタリト稱シ居レリ

「チ」ハ既ニ法王廳ノ首腦部ト本問題ニ付豫備的會談ヲ爲

シタリトノ趣ナリ聞込ノ儘不取敢

米ヘ轉電セリ

~~~~~

877 昭和16年5月6日

在バタビア石沢総領事より  
松岡外務大臣宛(電報)

シンガポールから蘭印を経て豪州を結ぶ共同  
防衛線に関する英国提案に賛意を示した蘭国  
外相のラジオ演説について

バタビア 5月6日前発

本省 5月7日前着

第三七五號

五日夜「クレファンス」外相ハ概略左ノ通り「ラヂオ」放送ヲ行ヒタリ

和蘭側ヨリ挑發スル事ナクシテ行ハレタル獨軍侵入ノ結果  
 本國人カ如何ニ大ナル苦痛ヲ經驗シ居ルカヲ力説シ斯ル犠  
 牲ニ對シ蘭印人トシテ單ナル感謝ノミニテハ不充分ニシテ  
 行動ニ表スコト必要ナリ吾等ハ本國ノ利權ト全領土ノ恢復  
 ニ努力スヘシト述ヘタル後蘭印ニ言及シ太平洋ノ暗雲ハ吾  
 等ノ覺悟ヲ促スモノナルカ平和ヲ愛好スル蘭印モ他國ノ理  
 不盡ナル要求殊ニ武力ニ依ル脅迫ニハ斷乎抗爭スヘシトテ  
 蘭印軍隊及一般市民ノ勇氣ヲ鼓舞稱揚シ次テ數日前英極東  
 軍司令官「サー、ロバート、ポハム」カ新嘉坡ヨリ蘭印ヲ  
 經テ濠洲ヲ結フ線ハ政治、軍事的ニ一單位ヲナシ其ノ一部  
 ニ對スル攻撃ハ全部ニ對スル攻撃ナリト言ヒタル言ヲ引用  
 シ吾人モ此ノ言ヲ充分味フヘキナリト述ヘ次テ歐洲戰況ニ  
 付最近我々ニ不利ナル情報ヲ耳ニスルモ戰爭ノ運命ハ變リ  
 易ク米國ノ援助ヲ有スル聯合國側ノ資源ハ測リ知レサルモ  
 ノ有リ且英海軍モ日々ニ優勢トナリツツアルコトヲ見レハ  
 將來我方ニ有利ニ展開スヘシ云々



878

昭和16年6月4日

松岡外務大臣より  
 在香港木村(四郎七)総領事代理宛(電  
 報)

香港における対日輸出制限に関しクレギー

英國大使へ是正方申入れについて

本省 6月4日後9時発

第一三〇號

香港ノ對日輸出制限問題ニ關シ五月二十九日次官ヨリ「ク  
 レーギー」ニ對シ香港ノ特種地位殊ニ事實上我カ實力ニ依  
 リ包圍サレ居ル事實等ニ鑑ミ同地ニ於ケル此種英側ノ措置  
 ハ日本國民感情ニ與フル影響至大ナリ從テ今後同様ノ措置  
 ヲ繼續セントスルニ於テハ我方ニ於テモ報復措置ヲ考慮セ  
 サルヲ得サルニ至ルヘキニ付香港ニ對シテハ特別ノ考慮ヲ  
 拂ハレ度キ旨述ヘタル處「ク」ハ香港モ大英帝國ノ一部ニ  
 シテ他ノ地域ト全然同一ナリ本件ノ如キ軍需物資ノ確保ニ  
 必要ナル措置ハ他ノ諸地域ト異ナルコトヲ得ス唯香港ニ關  
 シテハ日本國民ニ他ト異ナル感情ヲ與フルノ惧アルヘキ點  
 ハ同感ナルヲ以テ現在蓄積シアルモノニ付テハ特別措置ヲ  
 講シ得ルヤニ關シ本國政府ニ照會スヘシ云々ト述ヘタル趣

ナリ

879

昭和16年6月5日

在米国野村大使より  
松岡外務大臣宛(電報)

ガソリンなど軍需品の対日輸出統制強化を検

討中との米国國務長官の記者談話について

ワシントン 6月5日後発

本省 6月6日後着

第三六七號

四日「ハル」長官ハ新聞會見ニテ日本向「ガソリン」其ノ  
他ノ軍需品ノ輸出統制強化計畫中ナル旨述ヘタル處(特情  
參照)目下下院ハ石油「ガソリン」等ノ重要物資ノ輸出狀  
況ニ付祕密會ヲ開キ居リ日本及蘇聯向重要物資ノ輸出増加  
特ニ日本向石油「ガソリン」油脂錫板「グリセリン」「ト  
リウム」等ノ輸出ノ激増ヲ指摘シ右ヲ以テ輸出許可制ノ缺  
陷ナリトシテ國務省ヲ攻撃シ居ル趣ナルニ鑑ミ前記「ハ  
ル」ノ聲明モ其ノ反響トモ觀察セラル

紐育へ暗送セリ